# おねがい♪マイメロディ
## ふぉ～えば～



著♥山田隆司
監修♥(株)サンリオ
イラスト♥宮川知子



フラットくん
ひいらぎ けいいち
柊 恵一
クロミ
マイメロディ
バク
ひいらぎ じゅん
柊 潤


ウスラ・バッカ・ウラノス
こぐれ かける
小暮駆
ゆめの まさひこ
夢野雅彦
ゆめの かなで
夢野奏
ゆめの こと
夢野琴
ゆめの うた
夢野歌



ふじさき まな
藤崎 真菜
さくらづか みき
桜塚 美紀

# おねがい♪マイメロディ
## ふぉ〜えば〜

# おねがいマイメロディ　ふぉ〜えば〜

もくじ

# 序章　地球を征服できたらイイナ！



「美しい……実に美しい」
巨大宇宙船『ウララ号』の艦橋から見える地球を見ながら、その男は呟いた。
「さすが、父上が気に入るだけはあるな」
男の名は、ウスラ・バッカ・ウラノス。
全宇宙のおよそ三割の星々を支配下に置く、ウラノス帝国の次期帝位継承者の筆頭王子である。
その姿は、地球に住む人類とは大きく違い、異形の者である。
顔が異常にデカい。というよりは、頭部がデカいのだ。顔は頭の四分の一ぐらいで、バッタのような目鼻立ちで、二本の足より太い尻尾まで生えている。
胴体は、深紅の甲冑のようであり、頭の割には細く、体のバランスが妙に悪いように見える。だが、ウラノス帝国では、全宇宙で一番美しい体だと言われている。
その時、背後のドアが開き、王子と同じ姿だが、やや背が低く、顎に髭を生やした男が入ってきた。
執事のウノである。
「王子、アルチュール大佐から地球に関する報告書が届きました」
一万ページはあろう分厚い報告書を王子に差し出した。
ウスラ・バッカは受け取ると、ものすごいスピードでページをダダダッとめくり、およ

そ一分で報告書を閉じた。
「なるほどな」
すっかり頭に入れたかのようなどや顔で、ウノを見た。
いや、絶対読んでいない。ウノは思った。
「ウノ、要点だけ、あとで教えてくれ」
そう言って、ウスラ・バッカは報告書をウノに投げてよこした。
「やっぱり……」
ウノは小さく呟いた。
「それじゃあ、私はこの目でじっくり地球を見て来ることにするか。私が戻ってくるまでに、要点をまとめておいてくれ」
「かしこまりました。でも、王子、そのお姿では、地球人に怪しまれますぞ」
「分かってるよ。地球で適当に変身しておくよ」
「それがよろしいかと」
ウノが頭を下げると同時に、ウスラ・バッカの姿がスッと消えた。
ウノは三日三晩かけて報告書を読破した。

（こんな事なら、アルチュール大佐に要点だけ報告させるのだった）
と、悔やんだところで後の祭りだ。
母艦の執務室の王子の椅子に座り、ウノが大きなアクビをした時、ウスラ・バッカが入ってきた。
「こ、これは、王子⁉」
ウノは慌てて立ち上がり、席を譲った。何年か前、母星ウラノスの帝王家の城の王子の部屋の椅子に座っただけで、彼の逆鱗に触れ、最果ての星に流刑になったメイドがいたことを思い出したのだ。
（拙いところを見られてしまった。絶対お怒りになる……）
ウノは冷や冷やしながら控えていたが、ウスラ・バッカはそのことについては何も言わなかった。
「ウノ、地球はいいぞ！　特にメスが……いやいや、地球では女と言うらしい。美しい女がゴロゴロいる」
「さ、左様でございますか。それはようございましたね」
「是非、我がものとしたい。で、報告書を読んで、地球征服の良い手立てはあったのか？」
「はい……報告書の99・99％は歴史であるとか、文化であるとか、過去の戦争である

とか、下らぬものでございましたが……」

「余計なことはいい。結論だけ言え」

「は、はい……地球を征服するには、マリーランドのマイメロと、その朋友であるウサミミ仮面を倒せば良いようです」

「何っ!?　たった二人を消すだけでか？」

「はい。報告書を読む限りでは……」

ウスラ・バッカはニヤリと笑うと、

「面白い。そんなに簡単に手に入るのなら、帝国艦隊は必要なさそうだな。ウノ、艦隊を帰還させろ」

「かしこまりました」

ウノは一礼して執務室から出て行こうとしたが、背後で声がした。

「ウノ、私の椅子の座り心地はどうだった？」

ギクッ！　ウノは立ち止まった。体中の血が逆流して、全身から脂汗が吹きだした。

だが、ウスラ・バッカは小さな笑い声を立てただけで、

「地球のアジトと当座の必要な金はすでに用意してきた。明日から、二人で地球を征服しよう」

と言って、ウスラ・バッカは今度は大きな声で笑い出した。

ウノはその笑い声から逃げ出すように、執務室を後にした。

五分後、母艦『ウララ号』を残して、その背後に控えていた一万を優に超えるウラノス帝国の精鋭艦隊は母星に帰還していった。

# 第一章　ヴァイオリンってイイナ！



適度に空調の効いたパリのホテルの一室に、人間の姿をしたウスラ・バッカ・ウラノスはいた。

朝目覚めると、まず、窓の外を眺めるのが日課になっている。窓からはエッフェル塔が見え、眼下にはセーヌ川が流れる。オペラ座やコンコルド広場もほど近い、要するに一等地に建つ高級ホテルだ。

ホテルの一室といっても、日本でいうと、ファミリーマンションクラスの広さがある。彼が立っているのはリビングに当たる場所で、ドアのあたりから漂うコーヒーの良い香りに気づいて時計を見た。朝八時、ピッタリだった。

「眺めは良いが、さすがに飽きてきたな」

窓際にいたウスラ・バッカは、くるりと踵を返し、ソファに腰かけた。

「何をおっしゃいます、ウスラ・バッカ王子。まだパリに来て、ほんの二週間しかたっていないではありませんか」

ワゴンに載せたポットから、コーヒーを注いでいた執事のウノが、慌ててウスラ・バッカにコーヒーを差し出した。

ウノも人間の姿をしていた。そう、執事を絵に描いて額に飾ったような姿だ。ダークスーツに蝶ネクタイ。頭はツルツルの禿げ頭で、白髪交じりの髭。ウスラ・バッカがこんな感じにしろと言って、渡してくれた映画雑誌に載っている執事役の男優をモデルして変身

したのだ。

「私がヒマを持て余しているのは、お前が無能だからだろう。地球に来てから、もう半月以上たつが、マリーランドの手掛かりさえ掴めていないじゃないか」

ウスラ・バッカは、空になったコーヒーカップを乱暴にソーサーに置いた。イライラしているのは明らかだった。

「ウノ」

ウスラ・バッカが目で合図すると、すかさず、新しいコーヒーが注がれた。途端に王子の機嫌が和らいでいくのが分かる。

ウノはコーヒーとともに運ばれてきた、スープやパン、サラダなどをテーブルにセットすると、

「そもそも、報告書がいい加減だったのです。それでも、マイメロとマリーランドの手がかりが日本にあることは分かっています」

ウノが答えたが、王子は返事もせずに、スープを飲み始めた。

ウスラ・バッカの父であるウラノス五十一世が、銀河系のその中にある太陽系、さらにその惑星の一つである地球の美しさにほれ込んでしまった。

そして、その地球を我がものとしたいという欲望が生まれた。だが、帝王である自分が乗り込むわけにはいかない。地球という惑星そのものの知識もない。そこで周囲に自

分に代わる人材をと見回したところ、何人かいる子供の一人、ウスラ・バッカ王子が立候補したのだ。

王子たちはそれぞれ強い魔力を持っていたが、中でもウスラ・バッカ王子は父親同様、並外れた魔力があった。そこで、父に代わり、地球を手に入れると約束したのだ。

ウラノス帝王は、さすがに用意周到だった。手始めに地球についての予備知識を得るため、アルチュール大佐とその部下たちを地球に送り込み、調べさせていたのだ。

そして、一年後、ウスラ・バッカに、帝国艦隊を指揮させて、地球征服をさせようとしていたのだ。

しかし、アルチュール大佐の報告書はいい加減で、マイメロとウサミミ仮面を抹殺してしまえば、地球は手に入ったも同然などと書かれていた。ざっくり過ぎるのではと、普通は疑問に思うところだが。地球がかなりなめられているのは間違いない。

マイメロとウサミミ仮面が出没していたのは、日本の夢ヶ丘市を中心としたエリアだとある。すでに何度か、大きなトラブルに見舞われた場所である。かなりの規模で争いが勃発したはずなのに、ウノが調べると、夢ヶ丘市は何もかも元通りで、そんな形跡は残っていない上、住民の記憶もあやふやなものだった。

そして、最近はマイメロもウサミミ仮面も現れたという情報がなく、平和そのもので、マイメロやウサミミ仮面がどこにいるのか、マリーランドとはいったいどんな場所な

のかという手がかりは、まったくといっていいほどなかった。
つまりは、肝心のところがスッポリ抜けた報告書だったのだ。ウスラ・バッカ王子の性格を熟知しているウノは、愕然とした。詰めの甘さを指摘しようにも、報告書を作ったアルチュール大佐と部下たちは、逃げるように母星に帰ってしまったのだ。連絡を取ろうにも、あろうことか着信拒否をしている。
「使えないヤツだ。このゆとりが」
ウノはこっそり毒づいた。王子の父親、ウラノス五一世の魔力は強く、治世が長く続いていて安定しているせいか、部下の若者たちはみな、平和ボケしていたのだ。
当然何人かいる王子たちも同じで、ウラノス五一世は王位継承権第一位である、ウスラ・バッカ王子と帝国の行く末を案じていた。
ウスラ・バッカ王子が一人で地球を支配すると言い出した時、可愛い子には旅をさせろの気持ちから承諾したのだが、内心では心配でしょうがない。魔力の強さには定評のある王子だが、身分の高さと、魔力のおかげで困難というものに遭遇したことがない。
そのため信頼のおける部下である、ウノを同行させたのだった。
どちらにしても、自分探しみたいな目的で支配されかねない地球の住民にとっても、

迷惑な話である。武闘派でないことが、唯一の救いだ。
「王子、唯一の手掛かりのある日本で暮らすという選択肢は……」
ウノは食べ終えた皿を片付けた。王子にうながされ、自分もコーヒーを飲んでいる。
「うーん」
ウスラ・バッカはパンをちぎって、口に運ぶと、
「だって、夢ヶ丘のあたりは、あまり面白くないだろう。近くにいいホテルもないし」
じゃあ、東京の都心のホテルに住めばいいじゃないか。と、ウノは思ったが、口には出さず、
「王子ほどの魔力があれば、あっという間に解決出来るのではないでしょうか」
繰り返すが、ウスラ・バッカの魔力はハンパない。現在、パリの高級ホテルに滞在出来るのも、そのすぐれた魔力のおかげだった。一番得意なのが、相手の能力をコピーすることで、地球に降り立ったウスラ・バッカは、まずその才のみで財をなした人物の能力をコピーした。
まるでプリンターで印刷するかのように、大金を手にしたウスラ・バッカは、早速夢ヶ丘に乗り込んだのだが、なぜか今はこうしてパリのホテルにいるわけだ。
「私も夢ヶ丘とパリを往復する手間が省けますし……」
苦々しく思いながらも、極めて丁寧な口調でウノが尋ねた。表情を変えないところ

が、執事の執事たるところなんだろう。さすがだ。

「いやー、一度は来てみたかったんだよねー。パリはやっぱりいいところだよ」

ウスラ・バッカは悦に入ったような表情を浮かべた。

いや、あんた地球も初めてでしょうが。と、思ったが、やはりウノは黙っていた。さっきから会話が全然かみ合っていないことに、そろそろみんなも気づいているだろう。

「でももう、パリの暮らしも飽きちゃいそうだなー」

（こんのー、ゆとりがーー！）

王子の性格を熟知しているウノではあるが、心の中で悪態をつかずにはいられない。その魔力に関しては前に書いた通りだが、集中力がなく、何事にも飽きっぽいのが難点だ。

その代り、ウノが『ゆとり』と称したように、父親の安定した治世の恩恵を存分に受けたせいか、殺伐としたことに魔力を使ったことは一度もなかった。

そんな必要に迫られたこともなかったということもあるが、面倒臭いだけかもしれない。ある意味草食系と言えなくはない。もっとも、お坊ちゃまにふさわしく、短気な性格でもあるため、この先手がかりが見つからないと、何をしでかすか分からない。

ゆとりと同様に、キレやすさも持ち合わせている、厄介な世代なのだ。こんなに強い力を持っているのに。ウノはもどかしい思いで、ウスラ・バッカを見た。

ウノは魔力は低いが、温厚な性格を気に入られ、独身の頃からウラノス五一世にずっと仕えていた。ウスラ・バッカ王子が成長してからは、王子付きの執事となったが、間もなく定年になる。

定年後は退職金でのんびり家族旅行でもしようかと考える、一般的なサラリーマンだ。よもや、定年間近になって、こんな厄介な任務に就くことになるとは。ウノの方がキレそうになってきた。

何しろ母星は遠い。事前調査の際に銀河系内に待機させておいた艦隊は、早くも母星に戻ってしまった。王子ならその魔力で、ひとっ飛びに母星に戻れるが、ウノ一人の力では、夢ヶ丘とパリを往復するのがやっとだった。

ウラノス五一世に、この遠すぎる出張を命じられた時に、ウノは当然固辞した。

「出張手当に単身赴任手当も、倍出すぞ」

などと持ちかけられても、

「私のような老いぼれには無理でございます」

手当の額は気になったが、必死に断り続けた。しかしウラノス五一世は、ウノの妻を味方につけてきた。

（きっと手当の金額を聞いたに違いない）

ウラノス五一世の申し出を辞退することは出来たのに、妻にはノーと言えないウノな

のだった。
（今頃は今月の給料日に振り込まれた私の手当で、ブランドバッグを買ったり、旅行に行ったり、豪華なランチを食べているに違いない）
泣きそうだ。
せめて、出張手当だけは、自分の隠し口座に振り込んでおきたかった。どこの星の熟年夫婦も、似たようなものなのだと、ウノは地球のテレビを見て知ったのだった。
幸い、王子は地球の生活を楽しんでいるようだ。ウノもささやかながら、その恩恵を受け、リッチな暮らしをしている。だが、王子はパリに飽きたら次はロンドンやニューヨークへと、移り住むつもりだ。
まだ夢ヶ丘についても、調べが足りていない。時間稼ぎはできそうだが、小心者のウノのことなので、贅沢を楽しむゆとりはない。
こうなったら、何としても王子に成功してもらい、特別手当をはずんでもらうしかないと、ウノは考えていた。そのために、自分専用の口座のカードと通帳を、自分の荷物の中に入れ、地球に持ち込んでいたくらいだ。
そんなウノの葛藤にも気づかず、王子は朝から旺盛な食欲をみせていた。

「ところで」
食後のフルーツを手に取ったウスラ・バッカ王子は、
「今日の予定は何だったかな？」
そう尋ねられ、ウノは最新型のスマートフォンを取り出し、
「今夜はパーティーが一つ入っております」
「そうか。じゃあ、オペラは明日にしよう」
食事を終えた王子は、あくび混じりに返事をすると立ち上がった。少なくとも地球の食事は彼の口に合うらしい。パリではスウィーツとパンとコーヒーがお気に入りで、安上がりといえなくもない。
ウスラ・バッカの生活は、万事がゆったりとしたものだ。ウノは情報収集のために、パリと日本を往復しているので忙しいのだが、王子はマイペースだ。
朝食はルームサービス、昼は観光や散歩。夜は映画やオペラなどの芸術鑑賞とパーティーだ。てっとり早く金が稼げる株の取引を大いに気に入っており、時々パソコンを使って取引を行っている。
ウスラ・バッカはコピーした能力を存分に発揮しており、財産はどんどん増えて行く。当然支払いもすべてはブラックカードと言われる、庶民とは無縁のカードを手にしている。すぐにいわゆるセレブ階級の仲間入りをしたわけだが、しょっちゅう招待される

パーティーも慣れてくると、目新しいメンバーもなく、退屈を感じていた。
ウスラ・バッカの現在の外見について、もう少し説明を加えると、アジアと欧州が混じっているような国籍不明の顔立ちで、なかなかのイケメンだ。その上身長も高い。日本人から見ると二〇代後半から三〇代前半くらいに見えるが、精神的な感覚は二〇代前半の若者に近い。
有り余る財力と、最新の情報ツールをすっかりものにしているところは、万国共通のイマドキの若者だ。早速手に入れた情報をいかんなく発揮し、服装もブランドものを身に着けている。育ちが良いためか、パーティーに参加しても、ボロを出すようなことはない。
ウスラ・バッカの母星は、地球よりも色んな技術が発達しているが、科学技術というよりも魔法の力によるものが多く、魔力の大きさがその星でのステイタスだ。その点、ウスラ・バッカは血統的にも魔力的にもサラブレッドなのだ。
ハンパない魔力をいかんなく発揮すれば、マリーランドの手がかりが夢ヶ丘と知った時点で、解決は目前なわけで、マリーランドとマイメロ、そしてウサミミ仮面を見つけ出し、やっつけてしまえば、地球は簡単に手に入ると考えている。
実際、世界の情勢が分かって来た今は、マイメロとウサミミ仮面を倒しただけで、地球が手に入ると本当に思っているのか疑問に感じてもいるが、マイメロやウサミミ仮面

がカギを握っているのだろうと、考えることにした。

そうすれば、少なくとも報告書に書かれた内容はクリア出来る。その頃には母星が懐かしくなるだろうし、父親のウラノス五一世も見直してくれるに違いない。生まれてこのかた危険な目に遭ったことのない王子は、呑気な若者だった。

今ののんびりしているのは、親の目の届かないところで羽を伸ばしている、一人暮らしを始めたばかりの大学生みたいなものだ。本人には言わないが、ウノはそう思っている。

金持ちの独身イケメン（その上魔力持ち）という、ロマンス小説も真っ青な設定大盛の若い男が、社交界でチヤホヤされないはずがない。文句を言いながらも、パーティーは嫌いではないウスラ・バッカだった。

その日の夜も、ハイブランドのタキシードに身を固めたウスラ・バッカ王子が、パーティーの会場に入っていくと、たちまち人だかりが出来た。すでに有名人なのだ。

若い女性に取り囲まれ、話しかけられ、すっかり気を良くしていると、

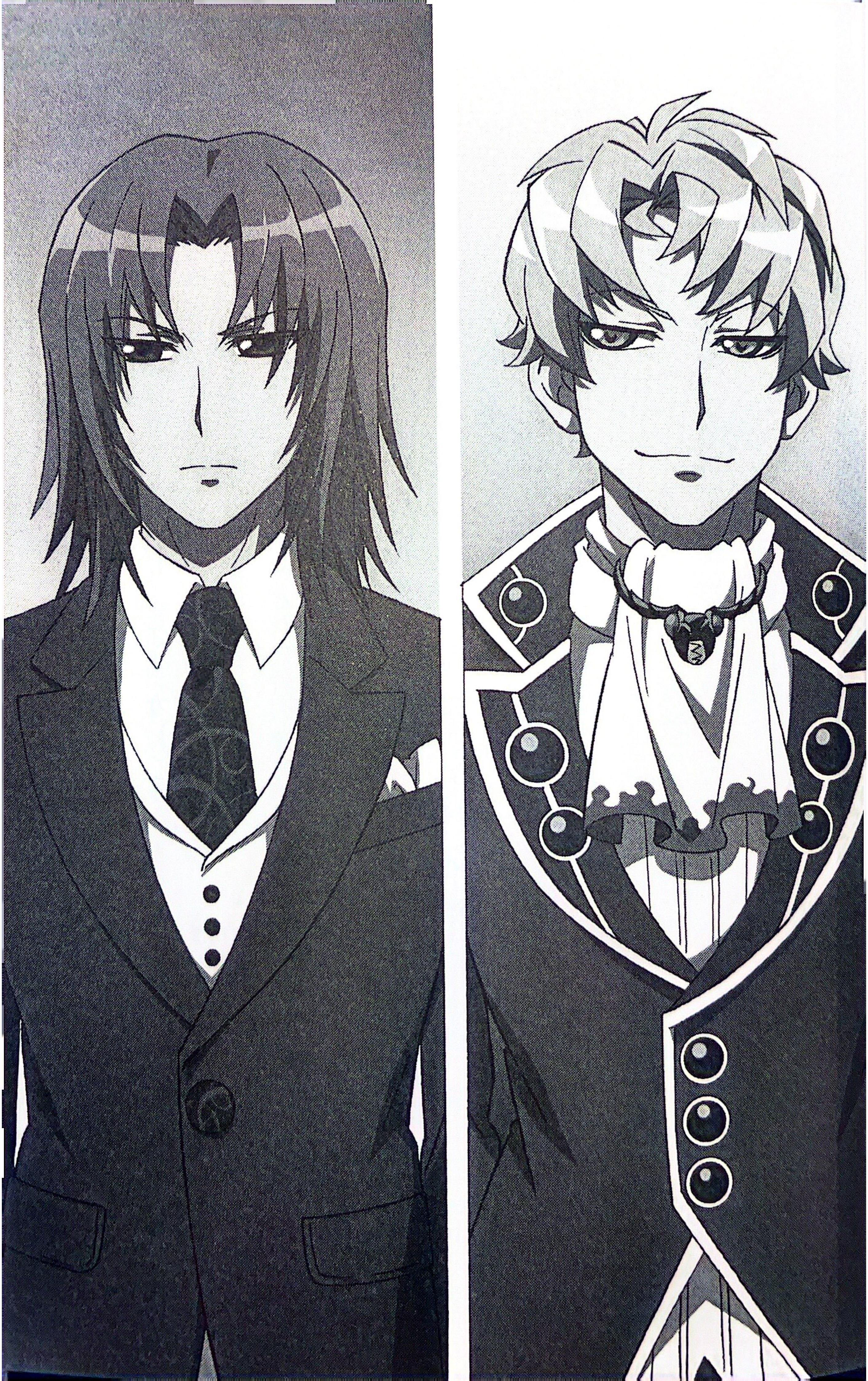
「きゃー、ヒイラギ様よ」

入り口のあたりから声があがり、女性たちはこぞってそちらに向かった。

「何事だ？」

自分の周りは男ばかりになり、仕方なく近くの男性に尋ねると、
「おや、あなたでも知らなかったのかい。まあ、彼はあまりパーティーには顔を出さないからね」
「彼って？」
「柊恵一という、日本人の大学生だよ」
「大学生？」
名前を言っても王子の反応が薄いのを見て、男は付け足した。
「ああ、パリの大学に留学してきたんだよ。ヴァイオリニストとしても有名で、世界各地でコンサートも開いているよ」
男は肩をすくめ、恵一のいるあたりを指差した。
「あの通りのハンサムだろう。顔で人気が出たのかと思ったら、ヴァイオリンの技術も相当に高くて、我々も驚いたよ。天は二物を与えずなんて言葉は、残念ながらウソっぱちだったってことさ」
「ふうん」
ウスラ・バッカは男に相槌を打ちながら、話を聞いていた。平静を装ってはいるものの、内心かなりカチンときていた。
「私は初めて聞いた名前だが……」

なかなか本体が見えないのが気になって、ウスラ・バッカが言うと、
「日本でコンサートをしていたそうだが、戻ってきたようだね。大学でも優秀な成績だと聞いているよ。ああ、女性にはあまり関心がないらしいね」
説明をしていた男は、同席していた奥さんまでが柊のところに行ってしまったのに、苦笑するだけだ。恵一は女性嫌いというわけではないが、自分から積極的に行くタイプでもないらしい。男はそれを良く知っているようだ。
「君も彼のヴァイオリンを聴いてみるといい。あの若さで大したものだよ。クラシックの演奏も素晴らしいが、作曲の才能もあるようだ。この先が楽しみだよ」
欧州の人間らしく、芸術に優れた者に対しては惜しみなく賛辞を贈る。まるで近所の男の子の自慢でもするような口ぶりだが、ウスラ・バッカは、そこまで寛容な気持ちにはなれそうになかった。
「ヒイラギケイイチって、どんなヤツなんだ？」
恵一を取り囲んでいた女性たちがようやく減り、ウスラ・バッカが目を向けると、
「なんだ、大したことないじゃないか」
イケメンには違いないが、思った以上に若く、自分とは違うタイプだ。どうして彼が人気者なのか理解できない。王子は努めて関心のない顔をしながら、他の男性や女性と会話をしつつ、近づいていった。



（髪は今時滅多にいないロン毛、顔立ちはのっぺりしていて、表情がほとんどないし、話しかけられても笑顔も少ない上に、素っ気ない。多少、ヴァイオリンが弾けるからといって、なんなんだ。私の方が財力もあるし、なんたって王子だぞ……）

心の声がダダ漏れするほどに、ウスラ・バッカはライバル意識を剥き出しにしている。

周囲を見ると、女性たちはそれぞれ自分の連れの夫や恋人のところに戻って来ている。それで、恵一を囲む人数が減っていたのだ。つまりは、

「特定の相手のいない女性たちは、私よりもヒイラギを選んだということか」

美人女性がたくさんいることで、地球に心動かされたウスラ・バッカだったが、ここにきて、ようやく信用を得ることが出来て、女性の人気も上々。気が向いたら、一夜のアバンチュールも楽しんでいる。

再び周囲の人たちに話しかけられ、ウスラ・バッカは普段通りに応対をしたが、今夜もアバンチュールの相手を捜そうというどす黒い気持ちを抑えるのがやっとだった。

ウスラ・バッカがホテルの部屋に戻ると、

「どうなさいましたか？」

ウノが驚いた顔で迎えた。ここ数日、退屈しているとは言っていたが、パーティーなど

の人が集まる場所から帰って来ると、たいてい上機嫌だったからだ。しかし、今夜はイラついた顔をしている上に、無言で上着を脱ぎ、
「ウノ、柊恵一という男について、すぐに調べろ」
「ヒイラギケイイチ？　ですか。それは人の名前でしょうか」
ウスラ・バッカはシャツも脱ぐと、バスルームに向かい、ドアを開け、
「フランスに留学している、日本人の大学生だ」
言い捨てると、勢いよくバスルームのドアが閉められた。
「ヒイラギ……ケイイチ……」
ウノが言われた通りにパソコンのキーを叩くと、多数の情報と画像がヒットした。簡単に情報が得られたことに満足し、ウノは脱ぎ散らかしたままの王子の服を片付け、再びパソコンに戻った。ルームサービスでコーヒーを頼むことも忘れなかった。
「なるほど、王子はこの青年と今日出会ったわけですか」
柊恵一は、王子とはタイプが違うが、地球上ではイケメンの部類に入るようだ。クールな表情の恵一の画像や映像を見て、ウノは何度か頷いた。ヴァイオリン演奏時の画像も多数アップされていて、そこそこの有名人であることが分かった。その上母親は有名デザイナーで、家はかなりのお金持ちであることや、
「……夢ケ丘出身……ですと？」

ウノは驚いて立ち上がった。バスルームからは水音が止まり、多少は機嫌を直したウスラ・バッカが、バスローブを羽織り、ウノのいるリビングに戻ってきた。
「どうだ、ウノ、何か分かったか？」
「はい、王子」
ウノはパソコンの画面を王子に向け、タイミングよく届いたルームサービスのコーヒーのワゴンを、リビングに持って来た。
「まったく腹の立つ男だ。まだ二十歳にもならない若造のくせに、この私よりも目立つとは。いっそ、始末してやろうかとも思ったが、さすがに人目があったしな。私もそこまで大人げないことはしないさ」
(じゃあ、人目がなかったらやってたんだな)
ウノは声にも顔にも出さず、ウスラ・バッカにコーヒーを差し出した。コーヒーの香りが漂ってきた。王子はコーヒーカップに手を伸ばしながら、画面を見ていたが、先ほどまでのイラついた顔は収まっていた。
「とにかく、すぐに始末しないで正解でした。王子、彼のプロフィールを見てください。夢ケ丘市出身とあります」
興奮した口調でウノが言うと、
「ユメガオカ？　何だ、それ？」

真顔で問い返され、ウノは怒りよりも脱力感を感じた。心の中でさえ、ツッコミを忘れるくらいに。しかし、次の瞬間、ウスラ・バッカの前に立ち、
「王子、地球に来た目的を、もうお忘れですか」
厳しい口調で言われ、ようやく王子はポンと手を打ち、
「あっ、あ〜〜……冗談だよ、ウノ。夢ヶ丘っていえば……私たちが最初に行った日本の街じゃないか」
途中の間がちょっと気になったが、ウノは大きく頷いた。
「そうです。これを利用しない手はありません。王子、その柊恵一とやらは、夢ヶ丘市ならずとも、日本でも有数のお金持ちです。王子の友人にふさわしい青年じゃないですか。この際、夢ヶ丘の柊家に招待されるくらいに、親しくなるのです」
ウノの地道すぎる調査の結果、マイメロの存在はようやく分かって来たが、夢ヶ丘で姿を見たこともない上に、マリーランドの場所は相変わらず誰も知らない。秘密にしているわけではなく、本当に誰も知らないことは、ウノの魔力で判明している。
しかし、恵一とウスラ・バッカ王子が親しくなれば、堂々と夢ヶ丘の街を調査出来る。
「しかし……」
ウノは開いたパソコン画面から、恵一のヴァイオリン演奏の映像を映し、
「彼はある種の天才、または秀才のようですね」

「ヴァイオリンとは、我々の星にはない面白い楽器だが……これは上手いのか？」
ウスラ・バッカ王子は地球に来てから、色んな音楽を耳にしている。しかし、クラシックの中でも、演奏のみの曲はあまり興味を持てなかった。軽快なロックやポップスなど、軽く聞き流せる曲が好きなのは、コピーした元の人間の好みなのかもしれない。
実際、クラシック音楽はポップスやロックほど売り上げが多いわけではない。しかし、ここはパリである。欧州においては、クラシックは教養というよりも、自然に親しんでいる音楽なのだ。
「演奏技術はかなり高いようです。コンサートのチケットも、すぐに売り切れてしまうとか。非常にクールで、気難しいタイプとありますが、日本人はシャイな民族でもありますし、ミステリアスに見えるのでしょう」
ウノの分析は、当たらずとも遠からずである。本人はいたって普通なのだが、柊恵一の普通は一般人の普通と同じではない。
「王子がうまく短期間で親友にまでなれるといいのですが……ウノは心配です」
ウノは大げさに、ため息をついてみせた。
「失敬な、私を誰だと思っているのだ。見てろよ、ウノ。すぐに親しくなってみせるからな！」
王子はパソコンの画面を消すと、立ち上がり、寝室に向かった。最初の怒りはすっかり

収まったようだ。そして、やる気満々の背中を見て、ウノはにんまりと笑った。この半月で、ウスラ・バッカ王子の取り扱いに、すっかり自信を持ったウノは、満足そうな顔で、自分の寝室に入った。

日本とフランスの時差が八時間あるため、普段は王子の寝ている間、夢ヶ丘市に赴いて調査をしていて、王子が目覚める直前に、パリに戻っていた。つまり、かなりの寝不足だったのだ。

翌日から、ウスラ・バッカ王子の退屈な日々がようやく終わり、本来の目的に向かって、あれこれと画策しているようだ。朝のコーヒーを飲みながら、パソコンで情報を調べている様子を見て、ウノは安心した。

「早速明日の晩に、柊が出席しそうなパーティーがあるぞ」

それは、しばらく病気で療養していた有名な指揮者の復帰コンサートを祝うもので、著名な音楽家や関係者が出席するパーティーだった。

「それは良いチャンスですね、王子。では、招待状を手に入れましょう」

コピーするのも簡単だが、小国の国家予算ほどの財力を持つウスラ・バッカ王子に近づきたい人物は山ほどいる。その日のうちに、難なく手筈がついた。

ウスラ・バッカは、その間、パーティーに着ていく衣装を決めることにした。ホテルに届けられた何着ものタキシードをズラリと並べ、その中でもっとも高級で、センスの良いものをと吟味していたのだ。

一般の女性から見れば、男性のタキシードの些細な違いなど分かるはずもないが、パーティーの招待客はセレブ中心だ。王子はだいぶ目が肥えてきたのだ。また、恵一の母親がデザイナーと知ったからには、ヘタなものを着ていくわけにはいかない。

「だからといって、無難過ぎるのも……いやいや、ここは仕立ての良さで……はたまた小物で差をつけるか……」

ウノはあれこれと悩む王子を、冷めた目で見ていた。

(デート前の女子か……)

ため息交じりにそっと呟いた。

一流ホテルのパーティー会場は思った以上に広く、続々と着飾った男女が入っていく。

「行ってらっしゃいませ」

ウノはパーティー会場の入り口で、ウスラ・バッカを見送った。

ウスラ・バッカは、任せておけというように、軽く手を振り、堂々とした態度で、颯爽と中に入っていく。その背中は王子の父親、ウラノス五一世の若い頃を偲ばせる。批判的なことを言ってばかりのウノも、その夜ばかりは、安心してその場を去ることが出来た。

ウノが久しぶりに良い成果が得られるだろうと、ホッと胸をなでおろし会場を去った後、ウスラ・バッカ王子は、さっそく柊恵一に近づいていった。

「初めまして」

丁寧に握手を求める王子に、恵一は戸惑いの表情を見せた。警戒しているわけではないが、恵一は高校に入ってから知り合った者たちに、さんざんな目に遭わされている。女の子に関しては、悪い出会いばかりではなかったが、その他の人間とマリーランドの関係者には、ロクな目に遭っていない。

一瞬の間にそんなことを思い出したのか、王子を前にして、つい及び腰になる恵一に、周囲の人たちが耳打ちする。最近の社交界では有名なセレブだと聞き、ようやく自分も手を伸ばした。

「柊恵一です。初めまして。よろしく」

警戒されているのを、シャイだと信じ込んでいるウスラ・バッカは、気を良くして、

「ウスラ・バッカです。よろしく」

名前を言った途端、恵一は複雑な表情をした。いや、ウスラ・バッカには複雑に見えたかもしれないが、実際は笑うのを必死で堪えていたのだ。
「……珍しいお名前ですね」
微笑みながら言うのがやっとだ。
「？　そうですか？」
今までほぼフランスにいたせいか、『ウスラ・バッカ』という名前に関して、特にコメントをもらったことはなかった。確かに、日本語表記するとちょっと面白い、いや、マズい名前だ。小学生ならイジメに合うかもしれない。
そんなことは知る由もないウスラ・バッカが、話を進めるために一歩詰め寄ると、
「ケイイチ、ヴァイオリン演奏をしてくれないか？」
人だかりの中から声が聞こえた。パーティーの主役の指揮者だった。
「……はい」
さすがに、著名な指揮者にリクエストされれば、応じないわけにはいかない。恵一が周囲を見ると、控えていたセバスチャンがヴァイオリンケースを携えて向かってきた。
「すまない」
恵一がケースからヴァイオリンを出すと、自然に拍手がおこり、みんなが恵一を中心に丸く取り囲んだ。ウスラ・バッカも慌てて後ろに下がった。

恵一がヴァイオリンを構えると、ざわついていた会場が静まり返った。
「……これは」
パリについてからは、演奏会には何度か行ったことのあるウスラ・バッカだったが、間近でみる恵一の演奏は、それらの演奏会のヴァイオリンソロと比べても遜色のないものだった。いや、聴いた中でも出色かもしれない。パソコンで演奏の映像を見た時は、有名な演奏家に比べたら、大したことはないと思っていたが、実際、間近で聴いてみると遥かにその演奏を上回っていた。
「……面白い」
演奏が終わると、大きな拍手が沸き起こった。囲んでいる輪が小さくなり、恵一はその中心にいて、絶賛されていた。その様子にウスラ・バッカは嫉妬の炎を燃やしたものの、ヴァイオリン演奏にそこまで皆の賞賛が与えられるとなると、自分もその中心になりたくて仕方がない。
「素晴らしい演奏でした」
ウスラ・バッカも笑顔で近づき、恵一に握手を求めた。
恵一がヴァイオリンをケースに収めると、セバスチャンがそれを持ち去って行き、周囲の人だかりも少なくなった頃合を見計らって、声をかけたのだ。
「ありがとうございます」

何の疑いもなく、恵一は握手を返した。
その瞬間である。ウスラ・バッカの得意の魔力が発揮された。恵一のヴァイオリンの才能を、右手を通して、瞬時にコピーしたのだ。
手を離した時、王子の脳にはヴァイオリンの譜面が広がり、指先や体にはその技術が宿った。
「実は私もヴァイオリンを得意にしているのですよ」
笑顔を浮かべ、言うと、
「それは初耳ですな」
などの声が周囲から出た。
「ぜひ、聴いてみたいわ」
「しかし、残念ながら、今日はヴァイオリンを持っていませんし……」
しおらしく答えた王子に、恵一はセバスチャンを呼び、
「良かったら私のヴァイオリンを使ってください」
計算通りの展開になった。恵一のヴァイオリンならますます好都合である。
ウスラ・バッカは、ヴァイオリンを手に取ると、恵一の得意な曲を頭に浮かべ、すぐに演奏を始めた。数分の小曲を弾き終え、頭を下げると、すぐに絶賛の嵐が巻き起こった。
「素晴らしい！」

「ケイイチの演奏に勝るとも劣らない」
実際は恵一の演奏と同じなのだが、先ほどの恵一に寄せられた賞賛と同じ待遇を受け、ウスラ・バッカは得意満面だった。
「素晴らしい演奏でした」
ウスラ・バッカからヴァイオリンを受け取った恵一も、自分の演奏のコピーとは気づかず、素直に褒めた。ウスラ・バッカと異なり、恵一にはみんなの注目を浴びたい、目立ちたいというような欲望がまるでない。
「今度は落ち着いた場所で、演奏を聴かせてください」
勝手にライバル視していたウスラ・バッカは、若干ガッカリとしたものの、ウノに言われた本来の目的を思い出した。
「面白い男だ」
しかし、それとは別に、恵一に興味を持ったのだ。
上機嫌でホテルの部屋に戻って来たウスラ・バッカを、ウノが出迎えた。
「お帰りなさいませ」
王子の表情から、うまくいったことが分かった。ウスラ・バッカはポンポンと服を脱

ぎ、バスルームに向かって行く。ウノはそれらをクローゼットに片付けると、ルームサービスのコーヒーと軽食を頼んだ。いいコンビネーションが出来ている。

ウスラ・バッカがバスローブをひっかけて、リビングに戻って来たのとほぼ同時に、コーヒーが運ばれてきた。

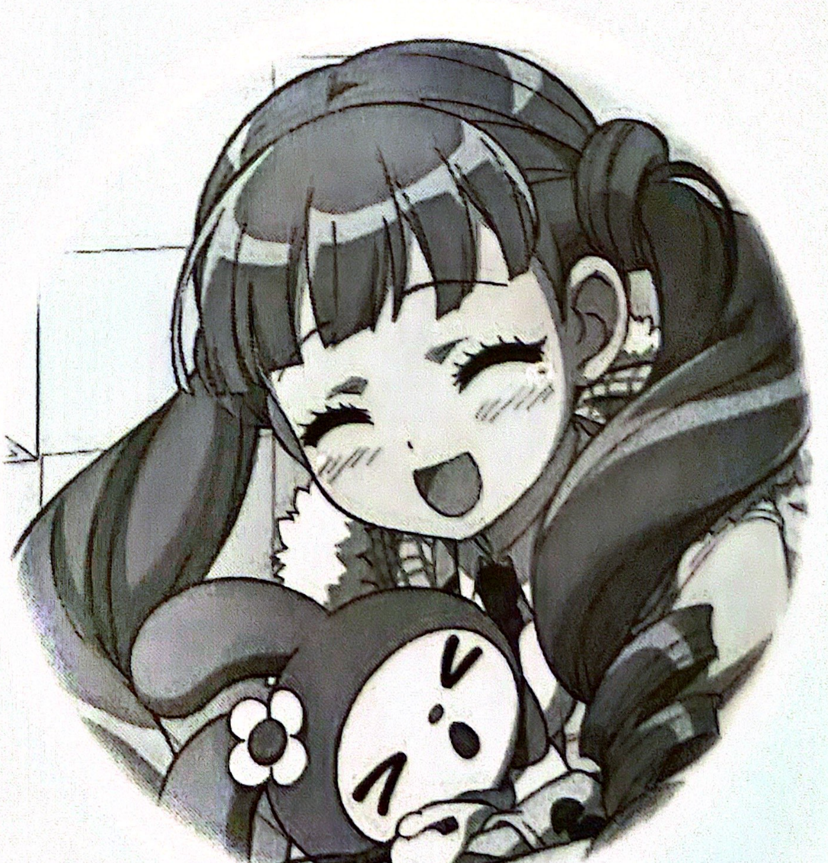
「柊恵一と知り合いになれましたか？」

コーヒーとサンドイッチを差し出し、ウノが尋ねると、

「ああ、それ以上に親しくなれそうだぞ」

得意そうに、パーティーでの様子を語りだした。

# 第二章　また会えたらイイナ！



ウスラ・バッカ王子がこのような野望を胸に、柊恵一に近づこうとしていた頃、夢ヶ丘の面々は何をしていたのだろうか。王子が恵一と接点を持ったあたりから、ウノは夢ヶ丘には来ていない。平和そのものの街での探索には限界がある。ウスラ・バッカが恵一の家に堂々と入り込むことさえできれば、後の作業は簡単なものだと考えている。

しかし、いつまでもウスラ・バッカの話ばかり続けるわけにはいかない。この物語の主人公はマイメロディこと、通称マイメロであることを忘れてはいけないからだ。

マイメロが主役の割に地味だとか、大して活躍もしていなかったとか、そんなわけではない。あまりに平和で、書くことが何もなかったのだ。残念ながら、それだけだ。

王子が地球に来た頃も、ウノが夢ヶ丘を突き止めた頃も、マイメロはちゃんといた。もっとも、ウノは『マイメロ』というのは人間か、もしくは巨大な生物だと考えていた。のっけから勘違いしていたわけだ。

今日も元気にマイペースなマイメロは、夢野家に滞在中だ。ニャンミのドクロボウ騒ぎが、思いのほか大がかりになったものの、みんなの力で事件が解決して、一か月がたとうとしていた。

「歌ちゃ～ん、お帰り～」

「マイメロ～！」

学校から帰って来た夢野歌が、キッチンに飛び込んで、マイメロを抱きしめた。



「歌ちゃん、きついよ〜」
「ゴメンゴメン」
慌てて歌はマイメロを離した。クロミとバクがマリーランドに戻った後も、マイメロは夢野家にいるのだが、歌は心配でたまらない。
「良かった。マイメロが今日も家にいて」
制服を着替え、ダイニングに来た歌は、マイメロの淹れてくれた美味しい紅茶をゆっくりと味わう。それが平和になってからの日課だった。
「心配性だねー、歌ちゃんは」
マイメロは歌の肩をポンポンと叩いて、ニッコリと笑った。その笑顔を見ると、歌だけじゃなく、誰もが幸せな気持ちになる。
マリーランドは空の向こうにある夢の国だ。歌たち、地上に住む人が幸福な気持ちを失うと、マリーランドもなくなってしまう。地球に住む人たちが全員幸福になることは、とても難しい。だからといって、自分だけが幸せならそれでいいとは言えない。
ダークパワーとの戦いが終わった時、歌は人間の心が弱いものだと気づいた。大好きな恋人の小暮駆のことも、信じることが出来なかった。
普段は自分と周りのことしか考えられないけれど、紛争地域や難民のニュースがテレビ画面に映ると、自分に出来ることが何かないかと考える。みんなが幸せになれるように願

う。歌に出来ることはそれくらいだ。
　マイメロやマリーランドがいつまでもあってほしい。自分の出来ることは少ないけれど、いつでも心の片隅に持っていようと、歌はそう考えるようになった。本人は気づいていないが、成長の証しだろう。
「マイメロね、ずっと歌ちゃんのところにいるよ」
　不安な気持ちが分かったのか、マイメロはもう一度笑顔になって、歌を見つめた。
「マイメロ……」
　歌もつられて笑顔になった。

　そして、ウスラ・バッカ王子が柊恵一と急速に接近している頃。ちょうどクロミたちがマリーランドに戻ってから三か月ほど過ぎた頃だろうか。
「ゴメンね、歌ちゃん。マイメロ一度マリーランドに帰らなきゃならなくなったの」
　別れの日は突然やって来た。
「ええ〜〜っ!?」
　歌の妹の琴が大きな声を出し、
「まだウチにいられるって、言ったばかりじゃない？」

姉の奏が寂しそうに尋ね、

「なんでなんでー一っ！」

歌はマイメロの肩を掴んで激しく揺さぶった。マイメロの魂が、体から抜けそうになるのも構わずに。

「う～た～ちゃ～ん……」

「歌、そんな乱暴にしたら、マイメロが」

奏に腕を掴まれ、歌は腕の中のマイメロを見た。まさに魂が抜けかけている。

「きゅ～～ん」

「ゴメンゴメン、マイメロ……だって」

歌がマイメロを見つめ、今にも泣きだしそうにしていると、

「大丈夫だよ、歌ちゃん。ちょっとお家に帰るだけだから。王様とルミちゃんに許可をもらって、すぐに戻って来るよ」

歌の頭をなで、マイメロはニッコリ微笑んだ。

「すぐ帰るわけじゃないよね？」

歌がマイメロに顔を近づけて念を押すと、

「うん。明日だよ」

再びニッコリと微笑んだ。歌たちの『すぐ』とマイメロの『すぐ』は、だいぶ意味が

違っていて、ますます歌はガッカリした表情になった。
「歌、マイメロにも私たちと同じように家族や友達がいるんだ。きっと、みんなもマイメロと離れて、寂しがっていると思うよ」
その時、リビングで成り行きを見ていた三姉妹の父親の雅彦が諭すように言い、歌もハッとなって、
「そうだね。ゴメンね、マイメロ。私、自分勝手だったね」
素直に謝った。
「そうね。ずっと家族と離ればなれだったものね。ごめんね。私たち、マイメロに甘えすぎてたわね」
「マイメロ、また遊びに来てね。私たちのこと、忘れないでね」
奏と琴が代わるがわる抱きしめた。
「そんな寂しそうな顔すると、マイメロも悲しくなっちゃう」
マイメロまでしょんぼりしてしまい、歌は慌てて頭を下げた。
「ゴメンっ、マイメロ。私たちは大丈夫だよ。マイメロもママやパパにしっかり甘えて、リズムくんともいっぱい遊んで来てね」
「そうね。先に帰ったフラットくんやピアノちゃんも、マイメロが戻って来なくて、寂しく思っているはずよ。みんなによろしく伝えてね」

歌と奏が笑顔を作ってみせると、マイメロも笑顔を取り戻した。
「クロミやバク兄弟も、ケンカ相手がいなくて、つまらないかもね」
「違うよー、琴ちゃん。クロミちゃんとは、とーっても仲良しだよ～～」
それには賛成しかねる三姉妹だった。
「じゃ、今夜はお別れパーティーにしよっか。お父さんもいるし、バイト代も入ったばかりだから、ちょっと奮発しよっか。ピザでも頼む？」
落ち着いたところで、奏が提案すると、全員が賛成した。
「やったー！」
琴が飛び上がって喜んだ。
「奏、ピザ代は私が払うよ。琴と一緒に飲み物を買ってきてくれないか」
雅彦の申し出に、奏は頷き、
「歌、せっかくだから、美紀ちゃんや真菜ちゃんにも声をかけておいて。パーティーは人数が多い方が楽しいわよ。駆くん……は、寮だから無理かな。急な話だもんね」
さっそくスマートフォンを取り出した歌だったが、駆の名前を聞くと、ちょっと残念そうな顔をした。
桜塚美紀と藤崎真菜は、中学時代からの歌の親友で、同じ夢ヶ丘学園高等部に通っている。小暮駆は陸上部が有名な他の高校で寮生活を送っている、歌の彼氏だ。

「潤先輩も呼んでいいかな」
潤は柊恵一の弟だ。琴がおずおずと言い、歌は頷いた。
「そうだね。駆は無理だと思うけど、潤くんは大丈夫かな。呼んでみるね」
「残念だね、歌ねえ。突然じゃなければ、駆先輩も来られたのに」
「秋は大会があるから、どちらにしても、無理みたい。後でメールをしてみるね」
平静を装ってはいるものの、春から秋の大会シーズンは、一か月に一度と決めた約束の日も、丸一日駆とデート出来るわけじゃない。練習が厳しいからだとは、分かってはいるものの、メールも素っ気ないことが多くて、歌は悲しい気持ちになる。
「駆先輩、頑張ってるもんね。いつも記録を更新しているよね。オリンピックにも出ちゃったりして、有名人になったりして」
琴がわざと冷やかすように言い、歌は気持ちを切り替えて、美紀と真菜に電話をした。二人ともビックリすると同時に、すぐに参加の返事がきた。やはり、歌たち家族だけだとしんみりしてしまいそうだから、笑って見送りたいと思った。
急遽決まったお別れパーティーは、美紀や真菜や潤の参加もあって、楽しく過ごすことが出来た。マイメロの家族や友達のことを考え、歌たちも友人たちも、笑顔で送り出し

てあげようと思ったし、マイメロもとても喜んでいた。
あっという間に時間が過ぎて、夜になり、みんなは家に帰って行った。
お風呂に入ってからは、歌はマイメロと一緒にベッドに横になって、色んな話をした。
マイメロと別れるのは初めてではない。この春の事件の解決のためにマイメロが夢ヶ丘にやって来たのは、前回別れてから三年もたってからだ。その三年間は、まったくの音信不通で、歌は時折マイメロのことを思い出しては、寂しい気持ちになった。
事件がなければ、マイメロが夢ヶ丘の歌の家にいる必要もない。歌にもそれは分かってはいるものの、再び会ってしまうと、やはり別れの寂しさはぬぐえない。ただ、父の雅彦の言う通り、マイメロにも家族や友人がいる。歌の気持ちだけで、マイメロを引き留めるわけにはいかない。
ただ、嬉しい情報もあった。潤が言うには、恵一のクリスマスシーズンのコンサートツアーの中に、日本でのコンサートもあるという話だ。
「相変わらず兄貴は冷たいよな。オレが聞かなきゃ、何にも教えてくれないんだぜ。コンサートツアーは公式ページで知ったんだ」
潤は文句たらたらだった。ロンドンに留学していた潤は、この春から夢ヶ丘学園高等部に通うようになった。ギターと作曲の腕はますます上がり、練習は欠かさないものの、集中力はなかなか伸びていかない。最近は体力作りのトレーニングもサボりがち

だ。
「潤くんも、柊先輩が日本に来るとなると、張り切っちゃうね、きっと」
「そうだね～～」
歌が言うと、マイメロも頷いた。前回日本でのコンサートがあった時、盛大なパーティーが開かれ、潤もその場で演奏を披露したのだ。もちろん大好評だった。
幼い頃は何かと恵一に反抗的な潤だったが、最近は同じ音楽に取り組んでいる者同士として、認め合っている。ただ、恵一は無口な上に表情が少なく、潤は素直じゃない上に話し出すとハイテンションで、二人の話はちっともかみ合わない。本当に意思の疎通が図れているのかは、歌たちには分からない。
「柊先輩、元気かなあ」
駆と仲直りした歌は、以前のように恵一に話しかけられても、ドキドキはしないと思う。でも、ほのかな初恋の相手であり、恵一も歌に好意をもっていると分かっていて、依然気になる先輩だということは確かだ。
「マイメロ、ウサミミ仮面さんに会いたいなあ～」
ウサミミ仮面とは、柊恵一の変身した姿で、本人はとても嫌っている。しかも、今は全員にウサミミ仮面の正体が恵一だと知られているので、余計だ。
だが、マイメロは柊恵一の正体がウサミミ仮面だと誤解していて、どんなに説明して

も分かってもらえない。
その上ウサミミ仮面が大好きなマイメロは、ことあるごとに恵一を呼び出したのだ。もはや恵一はマイメロが疫病神にしか見えなくなっている。何度あのメロディ・タクトを破壊したいと思ったことか。なので、日本でのコンサートを潤に言わないのは、潤を嫌っているからでは全然ないのだ。
「マイメロ、ウサミミ仮面が出てくるのは、ピンチの時じゃない。次はメロディ・タクトを使わなくてもいい平和な時に、ゆっくり来てね」
「そだね～～、歌……ちゃん」
ちょっとばかりウサミミ仮面に未練を残しながらも、マイメロは眠気に襲われたのか、目を閉じた。
「マイメロ、元気でね」
そっと、話しかけると、
「うん。歌ちゃんもね」
マイメロはニッコリして、すぐに小さな寝息をたてた。歌も眠ってしまった。
翌朝は薄曇りの天気で、肌寒い朝だった。夢野家の庭には美紀と真菜、そして潤と執事

のセバスタンがやってきた。セバスタンはセバスチャンの双子の弟だ。
「マイメロ、お父さんやお母さんにしっかり甘えて、みんなと楽しく遊んだら、私たちのことも思い出してね」
歌が言うと、
「分かった〜〜。みんなに挨拶したら、また歌ちゃんのお家に戻って来るね〜〜」
みんなに見守られ、マイメロはふわふわと浮き上がり、やがて空に消えた。昨日のうちに、しっかり別れを告げていたので、歌は涙を見せなかった。
「マイメローーっ！　元気でねーーっ！」
マイメロの姿が見えなくなった途端、歌の目からは大粒の涙が零れ落ちた。大きく手を振りながら、空に向かって叫ぶ歌は、泣いていることに気づいていない。その姿を見て、
「歌、マイメロはすぐに戻って来るわよ」
「そうだよ。こんなに気持ちが通じ合っているんだから」
奏は歌を抱き寄せた。頷く歌に、雅彦が優しく頭をなでた。
歌たち三姉妹は母親を早くに亡くしている。末っ子の琴などは、その顔も思い出せないくらいだ。その上父親である雅彦も、旅行ライターをしていて留守がちのため、雅彦は歌たちには申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
マイメロが来てからは、歌たちを時折襲う寂しい気持ちが、吹き払われたような気がす

る。そのため色んな危険な目にも遭ったが、その経験が三姉妹を大人にしたり、結束を深くした。友達との絆も、より強くなった。
マイメロの姿が完全に見えなくなった途端、雲が消え、青空が現れた。

マイメロが夢野家を去って、まもなく一か月になる。歌たちは寂しいながらも日常を取り戻している。
「マイメロ、元気にしてるかな」
ふっと歌が呟くと、美紀と真菜が顔を見合わせ、
「案外私たちのことなんて、すっかり忘れていたりしてー」
「あのマイメロや。十分あり得る」
部活のない放課後、歌たちはファストフード店に寄り道をしていた。しょんぼり顔の歌を、美紀と真菜が励まそうとしていたのだ。
「だよねー。私もそんな気がする」
歌はため息をついて言う。マイメロとは長いつき合いの三人だ。マイメロの性格などは分かり過ぎるほど分かっている。
「ま、こっちから電話も出来へんし。なんか、通信手段でもあればええんやけど」

「そうね。マイメロたちがいないってことは、平和ってことだから、気長に待つしかないわね」

マイメロたちは可愛らしい外見とは裏腹に、かなり長生きのようだ。竜宮城のお話のように、地球上での一年は、マイメロにとって一か月くらいの感覚なのかもしれない。

そして、マイメロはとっても忘れっぽいのだ。

「そうだね」

歌も笑顔になった。

マイメロと別れてしばらくは、家に帰るたびに寂しくなった歌だったが、部活の軽音部での活動や、駆の大会での応援、父親の留守中の家事などの慌ただしい日常が訪れるとともにだんだんと寂しさも癒えていった。

大学生の奏は主に朝食を作っている。歌や琴の母親代わりもつとめていて、外見はオシャレで明るい美人女子大生だが、早くに母親が亡くなったこともあり、しっかり者の面もある。バイトにしているモデル業で、徐々に人気を上げていて、コラムを書き始めてからは取材が忙しい。当然モテるのだが、好きになる相手が必ずだめんずで、みんなに不思議がられている。

中学生になってテニス部に入った琴は、最初のうちは疲れ切っていたものの、体力がついた今はレギュラー目指して頑張っている。部活のない日は姉たちと連絡を取って、買い物や夕食作りを手伝っている。家事スキルは歌と同様、かなり上がっている。
父親の雅彦は、旅行ライターをしている。海外へ行くことも多く、留守の時間が長い。家に帰ると原稿をまとめたり、家事をしたりの毎日だ。
娘たちが大きくなり、家をあける時の心配は減ったものの、年頃の可愛い娘を三人も抱えた父親としての心配は尽きない。
マイメロは料理が得意だが、かなりののんびりペースなので、いなくなったからといって、歌たちの負担が倍増したわけではない。マイメロは慌ただしい毎日を送っている夢野家にとっては、落ち着ける存在だった。その上、超がつくほどの天然で、雅彦のオヤジギャグ同様、脱力系の笑いをもたらしてくれていた。
歌の親友たちの最近の様子をつづってみると、桜塚美紀は相変わらずポエム好きの不思議少女で、この春から潤の作った曲に歌詞をつけるように頼まれていた。
YeahTubeという動画投稿サイトに、潤が自作の曲の演奏をアップして一躍有名になったのだが、集中力がなさ過ぎてメジャーデビューどころか、一曲のレコーディングでさえ難しい。そのため、真菜と一緒に潤の体力づくりを手伝っている。
その柊潤は、有能な執事のセバスタンとともに、春から日本に帰ってきた。デビュー

する意思も、作曲やギターの才能も間違いなくあるのに、集中力が五分ともたず、レコーディングはまだ出来ていない。メジャーデビューの第一歩として体力づくりを始めたのだが、本来の飽きっぽい性格のためか、夏バテを理由にサボっていて、秋になってからも進んでいない。

藤崎真菜は関西弁を多用する、元気な女子高生で、格闘技のプロになろうとジムに通っている。運動神経抜群で、本気で目指せばオリンピック級だと思うのだが、絶対にコレ！というほどハマっていないため、迷走中だ。

可愛いものが苦手なので、マイメロたちとは仲良しではあるが、一定の距離を保っている。この場合の距離は、気持ちというよりも実際の距離のことで、よほど接近しなければ大丈夫だ。各地に溢れるゆるキャラは等身大なので、それほど苦手ではないが、好きというわけではないらしい。

そのマイメロはというと、歌たちの想像を裏切らない毎日を送っていた。マリーランドに戻って来た時こそ、歌たちや夢ヶ丘のみんなのところに、早く戻りたいと王様や王妃のルミちゃんにうったえてはいたものの、

「延長サービスは一回だけだゾウ」

王様は毅然と言い放った。そういう自分も、ちゃっかりテレビ局に潜入出来てラッキーと思っていたのだが、半分はドクロボウのせいなので、記憶もあいまいなままだった。
「マイメロ、あなたの家族や友人たちも、あなたがいなくて寂しい日々を過ごしていたのよ。その人たちの気持ちも分かってあげてね」
ルミちゃんに説得された。
「そうか、そうだよねー」
マイメロは頷き、
「うん。分かったー。しばらくはママやパパ、リズムくんと一緒に暮らすー」
笑顔で答え、王様たちをホッとさせた。
それから、家に戻ったマイメロは、マイメロママやマイメロパパ、弟のリズムくんと毎日を過ごし、
「ピアノちゃーん、フラットくーん、あそぼー」
仲良しのピアノちゃんやフラットくんの家を行き来して、お馴染みのメンバーと楽しく過ごしていた。そう、歌たちのことは、すっかり忘れていたのだ。
昼間は公園や広場でピクニックを兼ねたお出かけや遊びに夢中だ。
「あっ、クロミちゃんだー。一緒にあそぼー」
マイメロはクロミーズ5のメンバーと三輪車に乗っているクロミを見つけると、手を振

った。通り過ぎようとしたクロミは、二度見して、

「げっ、マイメロ！　本当に戻ってきやがったのか」

義理と人情には厚いが、口の悪いのが欠点のクロミだった。マイメロを見ると、心底いやーな顔をした。

「これからバクくんたちも来るよ。みんなでかくれんぼしよ。おねがい♥」

その、とっておきの笑顔で『おねがい♥』されると、たいていの人は逆らえない。大事な用事でさえ後回しだ。その中で、唯一といってもいいだろう。

「やなこった」

ノーと言えるのは、クロミとクロミーズ5のメンバーだけだ。といっても、嫌っているとか憎み合っているというほどではない。

馬が合わない。何となく、苦手。マイメロにお願いされて、ロクな目に遭ったことがない。そんな経験がクロミにはあるのだ。時々クロミノートを見返しては、憤慨している。

「えー？　この前は協力してダークパワーをやっつけたよねー。仲良しさんだよねー」

「それは、ニャンミのことがあったから……」

嫌な顔と雰囲気を全面に押し出しているのに、マイメロは完全無視だ。

言いさして、クロミはハッとなってニャンミを見た。

「す、すまん。ニャンミ……思い出させちまって」

黒猫のニャンミはクロミの気遣いが分かっていて、
「やだなあ、リーダー。もうしっかり反省しましたよ。もう、あんなバカな真似はしませんよ。心配しないでください」
「そうだな」
クロミとニャンミに、二人を励ますように黒犬のワンミ、黒狐のコンミ、黒鼠のチュウミが輪になるように集まった。
「リーダー、そろそろ行きましょうぜ」
ワンミが促すと、クロミも頷き、三輪車にまたがった。
「えー、一緒に遊ぼうよー」
「だからやなこったって、言ってるだろ」
イラっとした口調と態度を全面に押し出しているのに、マイメロには通じない。フラットくんたちもドキドキしながら成り行きを見ていた。
「せっかくマイメロ戻って来たのに」
マイメロがしょんぼりした顔をしてクロミを見ている。悪いことなど何も言っていないのに、まるでこっちが悪人のように思えてくるから不思議だ。しかし、そんな雰囲気に流された結果は、たいてい散々なものだった。長いつき合いのクロミにはよーく分かっている。ロクなことにはならないと。

「そのうち遊んでやるよ。またな」

そうはいっても、目の前のしょんぼりしたマイメロに、クロミは仕方なく心にもないことを言った。その辺が根っからの悪人になれないクロミだった。

クロミたちは連れだって三輪車で走り去った。巻き起こる風と砂ぼこりに目を閉じたマイメロが、再び目を開けた時には、五人は遠くに去っていってしまった。

「いっちゃった」

「まあまあ、マイメロ。クロミたちが言った通り、来週から学校でも会えるじゃないか」

フラットくんが慰めると、

「そだね。かくれんぼ、しよっか」

早くもクロミたちのことなど忘れ去って、笑顔で振り向いた。

(切り替え、はやっ！)

「……なーに？」

不思議そうな顔をしているマイメロに、フラットくんたちは、慌てて首を振った。

マリーランドの正確な面積は、王様でも分からないだろう。地球のどこもかしこも幸福で溢れていたら、相当に大きくなるのかもしれない。しかし、住人は地球の比でなく

少ないので、必然的に固まって住んでいることになる。

だから、クロミがどんなにマイメロを苦手としていても、狭い行動範囲の中では無視しようのないくらいのニアミスが発生する。

当然、今日もまたマイメロはクロミを見つけて、

「あー、クロミちゃんだー。学校が終わったらあそぼ♥」

昇降口の廊下から、マイメロなりの速さで駆け寄って来られて、クロミはギクッとしたが、

「あー、悪い悪い。今日もクロミーズのみんなとツーリングする予定に……」

話の途中から、マイメロの耳がよろよろと倒れた。

「マイメロ、寂しいな。マリーランドに帰って来てから、一度も一緒に遊んでないよ」

クロミは「？」となった。マイメロと遊んだ記憶はかなり子供の頃しかない。前にも言った通り、クロミはマイメロを嫌いというより苦手なだけで、友人はクロミーズ5の他にバク兄弟など、マイメロ以外にもちゃんといるし、特別な必要性を感じないだけだ。むしろマイメロの方が交友関係は広いと、クロミは思っている。

「いやっ、あたいもこっちに帰ってから、何かと忙しいしっ。マイメロには他に友達がいるじゃないか……あっ、ほら」

クロミはこちらに向かって歩いて来るピアノちゃんを指差し、

「マイメロを探しに来たんじゃないか？」
（ていうか、何であたいが罪悪感にかられなきゃいけないんだよ）
またまた心の中で思ったが、そこはグッとこらえたクロミだった。
「わっぱ、め〜〜」
マイメロが声の方向に振り向くのを見て、クロミはとっとと逃げることにした。しかし、マイメロはかつてない速さでクロミの前に来て、
「じゃあじゃあ、一緒に帰ろうよ。ね♥」
「はあ〜〜？　あたいに何か用でもあるのか？」
珍しく食い下がるマイメロに、クロミが尋ねると、瞳を輝かせながら真っ直ぐにクロミを見て、
「ううん、ぜんぜん」
「だーーっ！　うぜーんだよ」
話にならないとばかりに、クロミはマイメロの脇をすり抜けた。
「そんな、クロミちゃ〜ん」
うるうるした目でクロミの背中にうったえる様子を見ていたピアノちゃん、フラットくん、リスくん、クマくんが、明らかにクロミに非難の目を向けている。
周りの子供たちも、二人の声が聞こえたのか集まって来て、ヒソヒソ話をしている。見

た目が黒いのがまずいのか、どうみてもクロミが悪人である。

（くっそー、これじゃどうみてもあたいの方が悪いみたいじゃないかよ！　家に帰ったら、クロミノートに書いてやる。絶対に書いてやる～～）

心の中で叫ぶと、先に外に出て待っていたワンミたちのところに走って行った。

それから毎日のようにマイメロはクロミの顔を見ると、「あそぼー」とか、「一緒に帰ろー」などと声をかけてきた。そのたびにクロミは断るのだが、あまり何度も誘ってくるので、

（待てよ。何か企んでいるのかも）

などと考えてはマイメロの顔をまじまじと見るのだが、当たり前だが表情は変わらない。

（そうだよな。マイメロのお母さんじゃあるまいし、裏なんてあるはずないよな）

もう一度まじまじと見た。

「どしたの、クロミちゃん？　一緒に帰ろ。ママがお菓子作ってくれるって」

「うっ……うん」

ママという言葉に少しばかりびびったクロミは、ハッキリと断れなかった。このまま拒

否し続けたら、より恐ろしいことが待ち受けているのではと、なぜか疑心暗鬼になってしまい、思わず頷いた。
「ホント？　良かったー。じゃあ、一緒に帰ろうねー」
「あっ……ああ」
歯切れの悪い返事を繰り返して、クロミはマイメロの後に続いた。その様子をクロミーズ5のメンバーは、不思議そうな顔で見ていたが、後に続くのはためらわれた。その上、どういうわけか、いつもマイメロと一緒にいるフラットくんやピアノちゃんも、さらに二人から離れて後に続いて行く。
マイメロはいつものペースでニコニコ顔だが、クロミは挙動不審な感じで歩いていた。マイメロに対しては、抜けきらないトラウマがクロミの中にあって、クロミーズ5のメンバーや、マイメロの友達の前では、厳しい態度を貫けるのだが、一対一になると及び腰になってしまう。
「あ……あのな、マイメロ」
「なーに？」
マイメロは無邪気にクロミに笑いかけた。
「あっ、その……本当はあたいに何か用事があるんじゃないのか」
クロミに言われ、マイメロは考え込む顔になったが、もちろんあまり考えてはいない。

「ないよ。あのねー、クロミちゃんとたまには一緒に帰りたかっただけだよー」
「へー、そうなんだー」
話が続かない。
「あっ、そういえば、潤くんたちは元気にしてるかい？　ほら、あたいは先に戻ってきちまったから……」
こんな話題を振るのは本意ではなかったが、何よりも沈黙が怖いので、クロミは無理やり話を始めた。
「……んー、元気だったよ。マイメロ、また歌ちゃんたちのおうちに行きたいナ」
歌たちも、当然マイメロが戻って来ると信じて待っているのだが、
「でもね、ルミちゃんが、しばらくはマリーランドにいるようにって。お家の人や友達も寂しがっていたっていうから、マイメロ、もう少しマリーランドにいるの」
思えば、マイメロの口から夢ヶ丘の話題が出たのは戻ってきてから初めてだった。あんなに仲が良さそうに見えた歌のことも、クロミは聞いたことがない。恵一のことが一番気になるが、マイメロに聞くのはプライドが許さないクロミなのだ。
やはり、マイメロの住むマリーランドと歌たちの住む人間界では、時間の感覚が違うようだ。
成長した歌たちは、のんびりとしたマイメロの性格については、三年ぶりにマイメロ

マイメロの「もう少し」が、歌にとっての「数年」だったとしたら、次にマイメロが歌のところに行く時には、歌は大学生かOLになっているんじゃないだろうか。歌たちもそれを心配していたのだが、歌の方からマリーランドに行く手段はない。

「ママやパパも、リズムくんもいるし、ピアノちゃんやフラットくんたちにも毎日会えるから、今はとっても楽しいよ。クロミちゃんも明日は一緒にあそぼ♥」

相変わらずの、マイメロの切り替えの早さに、クロミの方がビックリしてしまう。

「へ……へえ。だよねー」

クロミとしては、マイメロだけが勝手に行き来するのは、断固として反対だ。でも、隙があれば夢ヶ丘に行きたいと思っている。今は事件が解決して間もないため、お城の警戒も厳重になっているだろうし、我慢しているところだ。

もちろん、地上ではすでに、三か月以上も経過している。だが、マリーランドの感覚だと、一か月くらいにしか感じられない。マイメロに至っては、もっと短いのではないだろうか。

突然、マイメロが思いついたように立ち止まり、クロミに向かって、

「あっ、そうだ。えーっとね、クリスマスの頃に、柊せんぱいのコンサートが日本であるんだって、潤くんが言ってたよ～」

「なんだってーーっ！」

「マイメロ、ウサミミ仮面さんに会いたかったんだけど、我慢することにしたんだよ～。マイメロ、ホントは寒いの苦手だし。マリーランドの方があったかいし」

　マイメロはニッコリ笑って、

「春になったら、歌ちゃんに会いに行きたいナ。ウサミミ仮面さんにもその時会えるといいナ」

　クロミの顔色が変わったが、マイメロは気づかない。といっても、元々の色が真っ黒なので、誰も気づかないかもしれない。

「春にウサミミ仮面さんに会えたら、お話し聞かせるね、クロミちゃん」

　熱心に話しかけるマイメロだったが、「聞いちゃいねえ！」という態度丸出しのクロミには、全然気づかない。

（はあー？　マイメロを通じて話を聞いても仕方ないだろ。柊しゃまのこと思い出しちまったぜ……日本に帰るとなったら、ここはやっぱり、無理にでも行くっきゃないな……まずはお城の警備をちょっくら調べて……）

「どしたの、クロミちゃん？」

（そうだ、バクは……今はバイトか？　じゃあ、終わった頃に行ってみるか）
クロミはマイメロが心配そうな顔でクロミを見つめているのに気づき、
「いやっ、何でもないよ。いこいこっ」
わざと笑顔を作り、クロミは家に続く道を、マイメロと一緒に歩き出した。その道すがら、マイメロは何かと話しかけて来る。
「あのねー、今日はママが得意なオヤツ作って待ってるって言ってたよー。クロミちゃん、何だと思う～？」
「へっ？　いや～～、分かんないな～～」
適当に話を合わせ、分かれ道に着くと、
「楽しみだね～～。クロミちゃんもオヤツ食べたいよねっ♥」
なぜ、突然マイメロが自分に近づいて来たのか、全然分からないクロミだったが、夢ヶ丘の話をするつもりだったのだろうか。どっちにしろ、柊恵一の名前を聞いてからは、クロミの脳内は恵一のことで、いっぱいになっていた。
クロミーズ5のメンバーと一緒の時は、恵一のことなど、ちっとも気にならなかったのだが、マイメロに振られると、反応が過敏になってしまうクロミだった。
「あっ……イタタ」
クロミはお腹を押さえて、大げさに声を上げた。

「どーしたの？　クロミちゃ〜ん」
不思議そうな顔で見つめるマイメロに、
「いや、ちょっと腹が痛くなっちまったよ。オヤツどころじゃないな」
「ええ？　大丈夫？　パパとママを呼んで来ようか？」
後ろからついて来たピアノちゃんとフラットくんも、二人に駆け寄って来る。
「いやいやいや、心配ないから。昼ご飯の食べ過ぎだから。家に帰って休めば、すぐに治っちまうよ」
クロミは三人に手を振って、背を向けた。
「心配すんなって、じゃあなー！」
作り笑顔をしつつ、仮病がバレないように、ことさらにゆっくり歩いて自分の家の方向に向かった。心配そうな顔をしているマイメロたちに、よろよろと手を振ると、振り向かずに家に歩いて行った。
「よしっ、三人ともいなくなったな」
家に着いて、こっそり窓から外を見ると、マイメロの家に向かう三人の姿が遠くに見えた。クロミの頭の中で、恵一の姿とともに、むくむくと野望が湧き上がってきた。

夕方になって家を出たクロミは、真っ直ぐにバクの家に向かった。窓から中を覗くと、バク一家はご飯を食べ終わった様子で、後片付けをしている姿が見える。
（おい、バク！　バクったら！）
窓をコツコツ叩いて、クロミはバクを小声で呼んだ。しかし、バク一家は十五人兄弟という大人数だ。口々に何かを喋っていて、楽しそうな雰囲気を醸し出している。割って入るのはためらわれた。あの中に加わって、出来るような話でもない。
「ちぇっ、しょーがないな」
クロミは諦めてバクの家を後にした。
「あれ？」
バク兄弟の末っ子で、ただ一人の女の子、バコが窓の方に飛んで行った。
「どうしたゾナ？」
バクが気づいてバコのところに行くと、バコは窓の外を指差した。
「誰かいたような気がしたでちゅ」
「誰ゾナ？　誰もいないゾナ」
バクが窓を開けて外を見るが、誰もいない。窓を閉めようとしたバクに、突然ブルッと震えが来た。
（この感じは……まさか、クロミ様が来ていたゾナか？　いやいや、ナイナイ）

自分でノリツッコミをした。
「どうしたでちゅか？」
バコが不思議そうに真ん丸な目をして、バクを見つめている。その可愛らしさに、バクはすっかりクロミの顔を頭から追いやり、
「何でもないゾナ。窓の近くは寒いゾナ」
そう言って、バコの手を引いて、兄弟のところに戻って行った。
クロミは家に戻ってから、バクの兄弟たちが寝静まってから出かけるか、それとも明日の朝にするかと考えていたが、
「まいっか」
あっさりと眠りに落ちた。

翌日の昼間は、何食わぬ顔で学校に来ていたクロミだったが、マイメロが具合を心配して尋ねても、何ともないと繰り返すだけで、どこかソワソワした様子に見えた。結局夕方になって、クロミはバクのバイト先に行き、
「よう、バク。今ちょっといいかい？」
突然背後から話しかけられたバクは、ドキッとしたものの、

（やっぱり、昨日家に来たのはクロミ様だったゾナ……）

「どうしたんだ？　あたいの顔に何かついてるのかい？」

「い、いやっ、何でもないゾナ。突然話しかけられたから、ビックリしたゾナ」

クロミの用事など、ロクなことではないと予想はついた。その予想は常に当たっているのだが、懲りないのがクロミとバクだ。

バクも、元々悪人ではないけれど、マリーランドの生活が平和過ぎて、物足りなく感じてしまうのだろうか。事実、あんまりオオゴトになるとビビってしまうあたり、小物臭が漂っていて、憎めないキャラだと言える。

「ふ～ん。なんか引っかかるけど、まあいいや。いくぞ、バク」

「どこへ行くゾナ？」

黙ってついて来いとばかりに、クロミはずんずんと歩いて行く。バクは仕方なく後を追いかけるが、人気のない公園の片隅に着くと、

「人間界に行くんだよ。まずはお城に忍び込んで、警備の状態を探ってみないとな」

「ええーっ、また行くゾナか！」

大声になるバクをクロミが張り倒し、

「声が大きいんだよ。毎度毎度驚くんじゃないよ」

「そりゃ、無理というものゾナ～」

ここ数年はクロミーズ5の仲間と遊ぶことで満足していたクロミだったが、久しぶりに柊恵一や人間界の知り合いに会ってからというもの、次なるチャンスがあったら人間界にまた行ってみたいという思いが強くなっていった。

特に、中学生だった潤たちが高校生になり、恵一は大学生になっていて、外見も雰囲気も変わっていた。クロミも精神的には多少の成長はあったものの、自分たちとは明らかに時間の流れが違っていることに驚いてしまった。そこへきて、マイメロの発言だ。

(今度こそ、柊しゃまと……)

完全に自分の野望だけで、人間界に行こうと思っていた。そのためにはバクの力とたくましさとコミュニティ能力が不可欠なのだ。

「じゃ、行くぞ!」

色んな説明をすっ飛ばして、クロミはバクの背に乗り、

「早くお城にいくんだよ」

「分かったゾナ~~」

下僕体質がしっかり身についているバクは、クロミの言う通り、お城の上空を注意深く飛び回った。

いっそ、厳重な警備態勢が敷かれていれば良かったのだが、

「ふふふっ、すっかり怠けちまってるな」

クロミの睨んだ通り、ニャンミの大事件勃発の際は、久しぶりに城内に緊張が走ったものの、無事解決しクロミたちやマイメロが戻って来た頃から、お城の警備はゆるくなっているようだ。それでも、各出入り口には近衛兵が警備に立っていたが、そのうち昼寝をしたり、仲間とゲームやおしゃべりに興じたりするだろうと予想はついた。

「あちゃ〜ゾナ」

「なんか言ったか？」

バクは慌てて首をすくめた。背中のクロミがほくそえんでいると分かっていたからだ。

一回りして元の公園の隅に降り立つと、

「よし、決行は次の新月の夜にするよ」

「け、決行って何ゾナ？」

震える声でバクが聞き返すと、

「メロディ・キーを盗んで、柊家に行くんだよ」

（やっぱりゾナ〜〜）

バクはガックリとうなだれた。こうなってはクロミを止めることはできない。なんだかんだ言っても、マリーランドでのバクは、劣等感の塊で、負け犬感がハンパないのだ。

モテ期はいつまでたっても訪れる気配はない。いわゆる種族の問題だと言い訳をしていたが、妹のバコが可愛がられていることで、バクの心は複雑だった。

それに比べ、人間界はそれなりに楽しいし、柊家は裕福で自宅にいるよりもプライベートが保たれる。新聞配達のバイトはきついが、働くことには慣れているバクだった。

(どうせ、すぐに連れ戻されるゾナ。今回は大した事件にはなりそうにないゾナ。大した罪にもならないゾナ)

反省室の暮らしにも、慣れきった二人だった。

「次の新月まであと半月だ。それまではいつも通りにしてるんだよ」

クロミはカマボコのような半月を見上げて言った。月明かりは慣れるとかなり明るく感じる。お城の警備の具合も見てとれるくらいだ。

「……はいゾナ」

クロミは満足そうに頷いた。

きまぐれなクロミの気が変わってくれる可能性もゼロではない。バクは行っても行かなくても、マリーランドでも人間界でも、平常運転なのだった。

「何事もなく済むことを祈るだけゾナ……」

二人は別れて、それぞれの家に戻った。

予想通り、ザルのような警備を突破して、クロミとバクは城内の秘密の部屋に、たや

すく入り込むことが出来た。

「なんだよ、これ！」

思わずクロミが声を上げた。

城内の秘密の部屋は、いつもの通り煉瓦の壁で覆われていて、それっぽいマークが堂々と残っていてた。

「一応押してみるゾナ」

クロミが頷き、バクは『鍵』のマークのついた煉瓦をそっと押した。すると、周囲の煉瓦が動き、奥に箱が置いてあった。その中に、メロディ・キーが入っていた。

「簡単すぎるゾナ……」

「どんだけゆるいんだ……」

楽に目的を果たしたことは嬉しいが、スリルもサスペンスもかけらもなかった。二人は達成感も半分くらいの気分で、お城を出て、人間界に向かった。

「とにかく行くよーっ！」

「行くゾナーッ！」

朝になっても、お城の近衛兵はクロミ達の侵入にも、メロディ・キーの盗難にも気づかなかった。

クロミとバクの姿がないと訴えた家族と、マイメロから柊恵一の話を聞いた後、クロ

ミの様子が変わったことを不審に思ったフラットくんと、ピアノちゃん。クロミに呼び出されたバクを見かけたバイト先の同僚からの話を総合して、マイメロたちは王様と王妃のルミちゃんのところに行った。

「パオ〜ン！　王様に命令されたドリアン大臣、すぐに秘密の部屋を調べるんだゾウ！」

ドリアン大臣が、近衛兵に命じると、ブルブルと震えながら、秘密の部屋を調べ、ようやくメロディ・キーが無くなったことが分かった。

「クロミたちめ！　ここはわしがすぐに連れ戻しに行くゾウ！」

王様が立ち上がったところに、ルミちゃんが立ちはだかり、王様のマントをガバッと開いた。

「いや〜ん、ルミちゃんったら〜〜」

マイメロは思わず目を手で覆ったが、ドサドサッと音が聞こえ、見てみると、王様の足元にはカレンダーが落ちていた。

「なんですか、これは！」

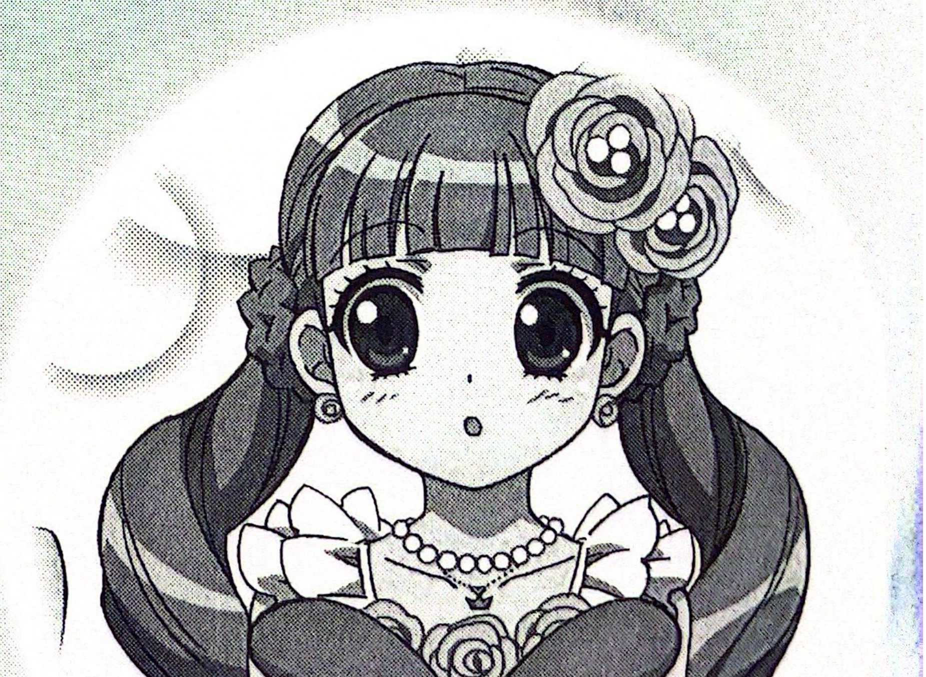
「こ、これは……大江戸佳奈子アナのカレンダーだゾウ」

王様は人間界のテレビを見るのが大好きで、特に美人局アナやお天気お姉さんのファンだった。最近は大江戸アナに鞍替えしたのだろうか。

「それは分かりましたが、どうして同じものがいくつもあるんですか」

ルミちゃんがカレンダーを三部、王様に突き付けた。
「こらこら、これはようやく手に入れたレアなカレンダーなんだゾウ。寝室用とリビング用と保存用にするんだゾウ」
王様はカレンダーを慌てて奪い取った。なんでも大江戸アナは、赴任していたロンドンから日本に戻って来たばかりらしい。ルミちゃんはピンときて、
「あなた、クロミにかこつけて、またテレビ局に行く気ね」
「……そ、そんなことはないゾウ」
ルミちゃんに詰め寄られて、王様はじりじりと後ずさり、マイメロたちにぶつかりそうになった。明らかに迫力負けしている。ルミちゃんは王様をドンと脇に追いやり、
「クロミたちが何をしようとしているのかは、分かりませんが、王様を行かせるわけにはいきません。また人間界に行ってくれますね」
ルミちゃんはマイメロにメロディ・タクトを渡した。
「はい、マイメロ。これを使ってクロミとバクを連れ戻してくださいね」
「は～～い！」
マイメロとフラットくんとピアノちゃんは、ルミちゃんに笑顔を返した。

# 第三章　付き合えたらイイナ！



そんなわけで、人間界に到着したクロミとバクは、柊家に居候を頼み込んだ。今は潤が日本に戻って来ていたので、あっさりと家に招き入れられたが、バクがまた新聞配達のバイトを始め、家賃を払うことが条件だった。そして、新聞配達をするバクを、夢ヶ丘の住人は温かく迎え入れてくれたのだ。

柊恵一が日本に戻って来るまではまだ半月もありフライング気味だったが、クリスマスのイルミネーションが三年前よりもバージョンアップした夢ヶ丘の街並みは、クロミの乙女心を揺さぶった。キレイなものやキラキラしたものが好きなのはクロミだけではなく、全世界の女性共通なのだろう。

「しょーがねえな。兄貴のネットの映像でも見るか？」

幻想的な街並みに、クロミの妄想も膨らんでいく。恵一の近況が知りたくてたまらないのがバレバレのクロミに、潤はパソコンを開いて電源を入れた。

「悪いね。その代わり、潤くんのトレーニングの手伝いするよ」

「まーねー、よろしくー」

しおらしく言うクロミに、潤は親指を立てて見せた。

そう、潤は集中力を伸ばしている最中だが、実はなかなか進んでいないのだった。

しかし、恵一が日本に帰って来るとなれば、またパーティーが開かれることになる。せめて二曲は演奏しなくてはと思うようになった。兄と招待客に自分の本来の実力を見せ

て、存在感を示したいのだ。
「今度こそ、最低でも二曲は演奏してやるぜ！」
「……二曲って、目標低すぎないか……」
およそ三か月しか過ぎていないとはいえ、もう少し集中力が伸びているものと思っていたクロミはボソッと呟いた。
「日本の高校生は大変なんだよ。テストとかテストとかテストとか……」
「ふ～～ん」
なぜか潤に対する態度が大きくなっているクロミだった。
「るせーな……画像見せてやんねーぞ」
ブツブツ言いながら、お馴染みのYeahTubeを開いて柊恵一の名前で検索すると、ものすごい件数がヒットしていた。潤はビックリして、
「マジ？」
「そりゃあ、柊しゃまのことだから、当然じゃないのかい？」
クロミが当然のような顔をしているのと反対に、パソコン画面に見入っていた潤は、複雑な顔をしている。
「しかも、なんかタイトル変じゃね？　最近兄貴はライブなんてほとんどしてないし」
クロミも覗き込むと、恵一がヨーロッパで演奏しているテレビの紹介や中継、ＤＶＤ

よりもプライベートっぽい服装の写真が並んでいる。

柊恵一はヴァイオリニスト、つまり演奏ジャンルはほとんどがクラシックだ。海外や国内でヒットしたミュージシャンやアイドルのプロモーションビデオの映像に比べると、さすがに地味なはずだった。

そして、世界ツアーは大学が休みの期間に行っている。つまり、この数か月は大学生活が主で、小さなホールやゲストで演奏した程度だ。そういう意味で、恵一はネームバリューからいっても自分と同等くらいに思っていた潤は、不信感をあらわにしながら、適当な画像をクリックした。

「なんだよ、コレ！」

潤が選んだ映像は、タイトルが日本語で「ウスラ&恵一」という、ユニット名みたいな画像で、カフェでコーヒーを飲みながら喋っているだけだった。演奏すらしていない。

「潤くん、誰だいこの男は」

クロミは恵一と一緒に映っている男を指差し、

「潤くんは知っているのかい？」

「いや、全然……」

潤はますます不審に思いながらも次の画像をクリックすると、大学の構内だろうか、小さなホールでの演奏会のようだった。先ほどの男と二人で演奏していて、拍手をもらっ

た二人は笑顔で顔を見合わせている。続いてクリックすると、二人がヴァイオリンを練習しているところだ。
「げげげっ、何だ、こいつは！」
クロミよりも憤慨している。
「二人揃うとイケメンも倍増ゾナ……」
黙って見ていたバクが、後ろでボソッと呟いた。潤は次々にクリックしては、
「ストーカーかよ！」
イライラした声を出した。プライベートに近い映像が明らかに多い上に、再生回数もアイドル歌手並みなのだから、自作の曲を演奏している映像をアップしている潤が怒るのも無理ないと思い、
「なんだい、気にしてんのか？　潤くんの演奏の方が全然再生数は多かったじゃないか」
クロミが慰めると、
「許せねー！　俺の兄貴とイチャイチャしやがってー！　誰だよ、ウスラ・バッカ・ウラノスっていうふざけた名前の男は！」
「……そっちゾナか？」
「イチャイチャって……そういう時に使うんだっけ。どうしたんだい、潤くん？」
女性とデートしている映像だったら、クロミも憤慨するところだが、友達の話を聞いた

ことのなかった恵一が楽しそうにしているのだから、話も合うのだろうと思い、微笑ましいくらいに思っている。
ウスラ・バッカがイケメンのせいかもしれないが、むしろ、潤の思いがけぬ怒りの方向が理解できない。エキサイトする潤をクロミもバクもハラハラしながら見ていると、潤がいきなり立ち上がった。
「セバスタン!」
大声でを呼ぶと、瞬時に声とともに潤の執事のセバスタンが現れた。
「どうしましたか、潤様」
潤はセバスタンにパソコンの画面を見せ、
「すぐにこのウスラ・バッカという男を徹底的に調べてくれ。兄貴に急接近しているようだが、どうも胡散臭い。明日、学校から帰ったら報告するんだ」
「かしこまりました。では、すぐに」
目にも止まらぬ速さで、セバスタンの姿が見えなくなった。潤は椅子に座ると、再び画像をクリックし始めた。この分だと全部見るつもりなのかもしれない。この集中力を演奏に活かせないのが不思議だ。
「じゅ、潤くん……あたいらはもう休むよ。ほら、明日はバクが新聞配達で早いからさ」
「すまんゾナ。明日からクロミ様と一緒にトレーニングを手伝うゾナ」

二人は潤の背中に向かって言うと、返事も聞かずに自分たちの部屋に走った。
クロミとバクは部屋に戻ると、
「潤くんは何を怒っているゾナ？　今は柊様とは和解したはずゾナ？」
バクは布団を敷きながら、不思議そうな顔でクロミに尋ねた。
「ああ。前は色々あったみたいだけどさ、今は同じアーティスト同士だし、普通の兄弟に戻ってたよ。でも、潤くんの怒りの方向があたいには分かんないよ」
潤の本心は、ヴァイオリンの技術も素晴らしいと思っている。また、恵一も潤の音楽を理解しているし、潤を嫌ったことはない。しかし現在、自分よりも仲良くしているウスラ・バッカに嫉妬のような気持ちを感じているのだろう。潤は結構面倒くさいタイプなのかもしれない。

そして、クロミたちがそんな会話をしている頃のパリはお昼時で、
「王子、まだ映像を撮り続けるのでございますか？」
最新式超小型ビデオカメラでウスラ・バッカ王子の執事、ウノは延々と恵一とウスラの映像を撮り続けていた。大学の講義中こそしないものの、二人でいる時間のほとんどが撮影されていて、ウスラ・バッカはその映像をホテルのパソコンで編集しては

YeahTubeにアップしていたのだ。

「ああ、今度ケイイチの演奏会に同行することになったし、そろそろいいだろう」

映像作家並みのこだわりと、魔力を使っての近距離撮影、まさに自作自演だった。潤がストーカー呼ばわりするのも間違いではなかった。興味のあるものにはトコトンこだわるウスラ・バッカだが、その効果は確かにあった。日本でのコンサートのチケットはすでに完売状態だ。

「それにしても、ウサミミ仮面のことをケイイチに尋ねた時のあの微妙な顔はなんだったのだ」

ウスラ・バッカはパソコンの画面から目を離してウノを見た。

「……何かを知っているようでしたね」

いきなり柊 恵一を名前呼びするウスラ・バッカに怪訝な顔をしていたウノは、平静を保って答えた。

当然ウノはその時も撮影をしていた。夢ヶ丘の暮らしや学生時代のことは、聞けば話してくれるのだが、マイメロとウサミミ仮面という言葉をウスラ・バッカから聞いた途端、サッと柊 恵一の顔色が変わった。

(ヒイラギケイイチは知っている!)

ウスラ・バッカは確信したものの、ひどく嫌がっているように見えたため、その時は追

及しなかった。
「ひどい目に遭ったとか、そういうことじゃないか？」
「それでは、柊恵一を利用すれば良いではないですか。ちょっと痛い目に遭わせてやれば、すぐに口を開くでしょう」
ウノが言うと、ウスラ・バッカは慌てて、
「いや、いかん。ケイイチに無理はさせたくないからな」
「……そうですか。王子は押しが足りないのでは？」
「夢ヶ丘に堂々と乗り込むことが出来るのだ。向こうに着いたらちゃんとやる！　あまりしつこく迫ると不審に思われるからな」
（そういう時こそ魔力でしょう？）
僅かな期間に人間っぽくなってしまったウスラ・バッカに、ウノは納得のいかない気持ちだったが、表面には出さず引き下がった。
ウスラ・バッカは再び映像の編集に取りかかっている。ホテルではヴァイオリンが弾けないというと、恵一はパリの自宅をリハーサルの場所に選んだ。そこで今日はカメラを一台増やして撮影したのだった。
（柊恵一コレクション……？）
新たに買い入れたパソコンのデスクトップには、恵一の映像フォルダが所狭しと並ん

つめるのだった。

でいた。クロミが潤のことを心配したように、ウノも複雑な顔をしてウスラ・バッカを見

クロミとバクから遅れること一週間、マイメロは突然歌の家にやって来た。何の前触れもなかったので、歌は驚いて大声を上げた。

「マイメローーッ!」

「う〜たちゃ〜〜ん♥」

玄関先で歌はマイメロを強く抱きしめた。歌の声にキッチンで夕食の支度をしていた姉の奏と父の雅彦、お風呂の掃除をしていた妹の琴がそのままの格好で駆けつけた。

「マイメロー!」

「みんな〜〜マイメロきたよ〜〜元気……だっ……きゅうう〜〜」

家族が驚きと喜びの声を上げ、マイメロは歌の腕の中で笑顔で答えたが、語尾がヘロヘロになった上、顔色が真っ青に変わっていった。魂まで抜けてしまいそうだ。

「歌っ、マイメロの息が詰まっちゃうわよ!」

奏に言われ、歌は慌てて力を緩めた。マイメロの顔色が戻り、笑顔を浮かべ、

「歌ちゃんは相変わらずだね〜」

「マイメロー」

「玄関は寒いから中に入ってね。フラットくんたちは一緒なの？」

奏が尋ねると、マイメロの後ろからフラットくんとピアノちゃんがピョコンと顔を出して、揃って頭を下げた。

「こんばんは。またお世話になります」

「わっぱ、めーめー」

「すごいね。すごいクリスマスプレゼントだね、歌ねえ」

三人を部屋に招き入れた琴も嬉しかったんだろう。高揚しているのが声で分かる。

「歌、美紀ちゃんと真菜ちゃんに連絡してね。私、料理をたくさん作るから、マイメロの歓迎会しよう。琴、お風呂の掃除が終わったら手伝ってね」

奏はテキパキと指示を出すと、キッチンに戻り冷蔵庫から食材をどんどん出し始めた。

歌は美紀と真菜に連絡を取り、マイメロたちが来たことを告げ、一緒に夕ご飯を食べようと誘った。電話の向こうから嬉しそうな声が聞こえてきた。

イキイキしている三人の様子を雅彦も微笑ましく見ていたが、

「じゃあ、お父さんは飲み物を色々買って来るよ。今日はビールが美味しくなりそうだナターシャ・キンスキー」

と、久しぶりにダジャレを言ったのだが、娘たちは笑ってくれなかった。マイメロだけ

が顔をこちらに向けて、
「パパさん、何か言ってたよ〜」
「いいの、いいの」
歌が言い、マイメロを料理の支度の輪に入れた。
「父は寂しく一人で去るル・アズナブール」
シャルル・アズナブールを知らない世代にはまったく受けないと知りながら、つい口にしてしまうのは、中年オヤジの性であろうか。
雅彦はコートを羽織り、財布を持って玄関を出ると、家の中からマイメロや歌たちの笑い声が聞こえて来た。冬の道をコートの襟を立てて急いだが、心はポカポカ温かい。マイメロが帰って来たお蔭だなと、雅彦は心底思った。

フラットくんが来たので歌は小暮駆にも連絡してみたが、呼び出し音が鳴るだけだったので、仕方なくメールで伝えることにした。潤にはすぐに連絡がつき、セバスタンが美紀、真菜ともに迎えに行き、三人は車で到着した。
「よう、マイメロ！　元気だったか？」
「ちょっと会わなかっただけなのに、懐かしく感じちゃうわね」

潤と美紀がマイメロたちに近づいて行くのに対し、積極的には近づいて行かなかった。
「みんな、元気そうで何よりや」
顔は笑顔だが、可愛いものが苦手な真菜は、積極的には近づいて行かなかった。
「みんな～、久しぶりだね～～」
マイメロが笑顔で答え、ピアノちゃんは美紀のところに走って行った。
「クロミたちは、潤くんのところにもう来ているのかな？」
フラットくんが一人冷静に尋ねると、
「ああ、いるよ。バクも一緒にな」
普通の調子で潤が答えた。実際、以前来た時と違っていて、クロミの素行に怪しいところは何もなく、バクも普段通りだった。潤が学校に行っている間は、セバスタンが二人の行動を見ているので、間違いはなさそうだ。
「ほら、歌、みんなに飲み物を配って」
奏に言われ、歌はペットボトルを開けてグラスに飲み物を注いだ。奏が次々に美味しそうな料理を運び、雅彦が自分のグラスにビールを注ぎながら、
「この間の事件が解決して間がないのに、マリーランドで何かあったのかい？」
直球で尋ねた。もちろん、全員がマイメロを歓迎しているものの、気になっていたことだった。マイメロに注目が集まった。

「ううん、なーんにも」
笑顔で首を振ったが、そのあたりは通常運転なのでみんな心得ている。全員の目はフラットくんに注がれた。
「クロミのヤツがお城からメロディ・キーを盗み出したんだよ。多分、柊先輩がクリスマスの時期に日本でコンサートをする予定なことを、マイメロから聞いたからだと思うんだよね」
フラットくんがピアノちゃんの方を向くと、
「わっぱめー」
同意するようにピアノちゃんが頷いた。
「柊先輩に会いたいって、そ、それだけ？」
逆に拍子抜けした声で歌たちが聞くと、
「そだよー。クロミちゃんたら、わがままなんだから～～」
話の流れからいっても、その原因を作ったのはきっとマイメロだと、歌たちは瞬時に理解した。フラットくんを見ると。マイメロからは見えない位置にいて額に汗を浮かべながら盛んに頷いていた。
「俺と一緒にトレーニングしてるぜ。案外つき合いいいんだぜ、あいつ」
潤が気楽な感じで言い、歌たちもやっと安心した。本当に同居しているだけらしく、

歌たちは気づかなかったが、バクはすでに新聞配達を始めていた。
「クリスマスコンサートの前に、うちでパーティーを開く予定なんだ。俺もそれに向けてトレーニングしてるってわけ。みんなにも招待状を送るぜ」
潤は歌を見てウインクし、
「駆も今はヒマだろ。招待状送っておくから、みんな俺の演奏も期待してくれよな」
「ありがとう、潤くん」
駆と歌は今も毎月一度デートをしている。秋の大会が終わり、この時期は室内トレーニング中心になっていた。
本当なら歌は毎週デートをしたいくらいだったが、駆の方からは絶対に言ってくれなくて、不満に思っていた。でも、パーティーはいいチャンスだ。駆も恵一がいるとなれば来るに違いない。
「歌ちゃん、ママが言ってたよ。『このままだと、今年も駆くんのヘタレ・オブ・ジ・イヤーは決定ね』って」
「ちょっとー、ひどいよー」
マイメロママも毒舌オブ・ジ・イヤーに違いない。みんなはクスクス笑った。
「『もうすぐ殿堂入りだわね』って、ねえ、歌ちゃん、でんどういりってなーに？」
「知らないわよ！」

ますます笑いが広がった。
「まあまあ、マイメロ、それくらいにしときぃ。駆はドン引きするほどシャイなんやから」
「そうね。ヘタレなことは間違いないけど、駆くんはそこがいいのよ、ね」
真菜と美紀がすかさずフォローして、歌の機嫌が直った。
「歌、いいの、それで？」
奏が小声で言い、雅彦と顔を見合わせた。よーく聞いてみるとフォローになっていないが、ヘタレ・オブ・ジ・イヤーのインパクトが大きすぎたので、少なくとも歌は気づいていなかった。
「お父さんにはそれくらいの方が好感持てるな。それに、駆くんは今や短距離陸上界のホープじゃないか。歌も自分の都合ばかり言わずに、駆くんの応援をしないとな」
「はーい」
雅彦が父親らしくまとめ、再びなごやかな雰囲気になった。食欲も旺盛なメンバーが揃っているせいか、あっという間に料理がなくなり、奏は再びキッチンに戻り、
「デザート、買っておいてよかったわ」
奏がロールケーキをカットして全員に配った。
「ところで、柊恵一と一緒に来日するヴァイオリニストって、すごいイケメンよね？話題になっているわよ」

情報通らしい奏が潤に尋ねた。潤はすぐにその話題に飛びついて、クロミとともに見たYeahTubeの映像の説明をした。
「へえー、柊恵一にも一緒にコンサートに出演するくらい親しい友達が出来たんだ」
奏だけじゃなく、全員が突然出来た恵一の友人に興味を持った。
「柊先輩に親しい友達が出来るなんて、初めて聞いた気がする」
歌たちも奏と同感らしい。
「とにかく、後で映像を見てみろよ。すっごくイチャイチャしてるから」
（イチャイチャ？？？）
クロミと同じように、全員がツッコミたくなったが、面倒なのでスルーした。
「まあ、そいつもうちに来るだろうから、パーティーで会えるだろうな。駆にも話しておくよ。兄貴とイケメンの男が一緒だと聞いたら、あいつ、絶対慌ててやって来るぜ」
恵一はともかく、もう一人のイケメンまで歌に興味を持つかは疑問だった。そして、駆と交際を始めた今となっては、歌は恵一にもイケメンにも興味がない。恵一もコンサートの前日がパーティーということで、ゆっくり話す機会もないだろう。
歌は恵一をダシにして駆け引き出来るようなタイプではなかったし、駆が誤解して面倒なことになるのも困る。
歌たちが行くということは、当然マイメロもパーティー会場に行くわけで、ウスラ・

バッカの目的がいきなりリアルに迫ってくる。マイメロはいつものようにぬいぐるみのふりをするだろうし、もちろん、ウスラ・バッカの計画など誰も知らない。
「歌、琴、またオシャレなパーティードレスを探さなきゃね」
奏が言い、姉妹は笑顔でこたえた。読者モデルをしている奏のファッションセンスは、全員が認めるところだった。
「奏さん、私のドレスも探してもらいたいなー」
「うちもうちも、パンチの効いたカッコいいヤツ頼むで」
美紀と真菜も手を挙げた。
「分かったわ。二人にもピッタリなドレスを調達してくるわね」
ファッション業界で知り合いも増えた奏が、頼もしく請け負った。
「ところでさ、マイメロ。潤くんにも確認したいんだけど」
歌は話題を変えてマイメロを見た。
「なーに？　歌ちゃん」
「クロミは柊先輩に会いたくて、潤くんのところに行ったんだよね」
マイメロたちと潤が頷いた。
「じゃあさ、日本でのクリスマスコンサートが終わるまで、クロミのことを見逃してあげない？」

歌は同じ恋する者同士、柊のことが好きなクロミの気持ちに共感している。恵一はクロミのことに興味はあまりなく、完全にクロミの片想いだと思うと、クロミがいじらしくさえ思えてしまうのだ。
「ええんとちゃう？　そしたらマイメロもゆっくり出来るし」
「そうよねー。ついでにフラットくんには駆くんへのアドバイザーもお願いしましょ」
真菜と美紀も歌に賛成した。マイメロはちょっと考えるふりをしたが、顔を上げ、
「……そだねー。マイメロ、歌ちゃんと一緒にクリスマスするー」
笑顔で答えた。結果的にこの選択が良かったのか悪かったのかは分からないが、マリーランド同様に、歌たちもゆるくなっているのは確かだ。
事件があったのは、ほんの三か月ほど前のことなのに、歌たちも夢ヶ丘も何も変わらずマイメロたちを受け入れてくれているのだから、太っ腹なことは確かだ。慣れとは怖いものだ。
そんなワケで、王様たちにはクロミが見つかったことはナイショにしたまま、マイメロはしばらく夢野家で暮らすことになった。もっとも、王様は地上の様子に詳しいので、すぐにバレてしまうだろう。むしろ、ルミちゃんを振り切って自分で探すなどと言い出しかねない。
「あのね～、大江戸佳奈子っていうアナウンサーのグッズを買って行けば、王様は許して

くれそうだよ～」
その晩、マイメロが歌にこっそり打ち明けた。
「じゃ、クリスマスが終わったら買いに行こうか」
クスクス笑いながら二人は眠りに落ちた。

柊恵一はウスラ・バッカと共に日本に戻ってきた。
コンサートのスケジュールはビッシリではあったが、日本国内の移動は欧州数か国のコンサートに比べたら楽なものだ。それに、両親やこの日のためにトレーニングを重ねてきた弟の潤のことを思い、渋々パーティーに参加することにした。
国際空港にも出迎えのファンがいたが、サービス精神旺盛というか、注目されるのが大好きなウスラ・バッカに任せ、難なくスルーして迎えの車に乗り込んだ。自宅へと移動する車の中で、執事のセバスチャンがタブレットの画面を見せた。
「恵一様、スケジュールはこのようになっております」
「コンサートの日程が増えてないか？」
恵一が怪訝な顔で尋ねると、セバスチャンは真顔で、
「チケットがあっという間に完売してしまったため、追加公演が行われることになりまし

た。移動も無理のない日程にしております。恵一様、コンサートのたびに動員数が増えていくようで、セバスチャンは嬉しゅうございます」
涙も流さんばかりの様子にほだされた恵一は、ため息をつきながらも了承した。セバスチャンはウスラ・バッカの存在もチケット完売の一因となっていることもあり、ウスラ・バッカに対しても礼を尽くしている。
「見ろ、ウノ、あれが執事のあるべき姿だ」
セバスチャンの自分への待遇に、すっかり気をよくしているウスラ・バッカは皮肉っぽい顔でウノを見た。
「ウスラ・バッカ様、私の見たところ、あの主従関係は行き過ぎでございます」
とっとと任務を終わらせて、母星でゆっくり温泉旅行でもしたいと考えているウノには、セバスチャンに見られるひたむきな忠義心は生まれず、主人の仕事の手助けをして事件を
「執事というものは、主人に毒舌でダメ出しをしたり、
解決したりするものだと思っておりますが」
「それはどこの国の執事ルールだ？　最近のお前は増長気味だぞ」
外見こそ執事の中の執事というウノだが、中身についての知識は、書物やテレビの影響だろうと考えられる。しかし、ウスラ・バッカを怒らせると怖いので、表面上ではおとなしく言うことをきくしかない。

「努力いたします」
と言うにとどめた。
そうこうしているうちに、四人の乗った車は柊家に到着した。出迎えに出たのはセバスタンと潤である。
「おおっ、恵一様。お元気そうでなによりです」
セバスチャンそっくりのセバスタンを見たウスラ・バッカとウノは、驚きのあまり声が出ないでいる。すかさずセバスチャンが二人の違い、頭の上の一本の毛を見せて説明するが、二人を見比べ頷くばかりだった。
「柊しゃま……」
「お邪魔しているゾナ」
家の中に入ってみると、不思議な生き物が二体。ぬいぐるみにしか見えない上に、ぬいぐるみの割に可愛くない二人が喋っているではないか。
「ミステリアス……」
「摩訶不思議ですな、王子……」
ウスラ・バッカとウノはほぼ絶句状態だ。
潤が訝しがるウスラ・バッカたちに、クロミやマリーランドのことを簡単に説明した。恵一自身がウサミミ仮面であることと、それを極端に嫌がっていることは、恵一に

口止めされたこともあって、もちろん話してはいない。
元々恵一は、ウスラ・バッカがマイメロやウサミミ仮面を知っていたことを不思議に思っていて、その後は追及されなかったことで、ようやく警戒を解いた経緯がある。
クロミとバクを前にして色々聞きたくなるだろうと思い、潤には余計なことを喋らないようにと言い渡してあり、クロミとバクにも同じことを潤が告げてある。
「柊しゃまが言うのなら……」
クロミは素直に言うことを聞き、
「我々は日陰の身ゾナ。色々ばらされたら困るゾナ。口チャックゾナ」
と、バクも元々説明する気などなかった。
もっとも、潤は聞き出されるままに喋ってしまい、恵一は頭を抱えた。しかし、そこは潤クオリティ。重要なことなど何も覚えてなく、恵一は安堵した。他の従業員や街の人たちに尋ねたところで、ウノが最初に調べた通り、何も詳しく知らないのだった。
「はあ〜〜」
ウノは情報量の少なさにため息をついた。
夢ヶ丘の住人はウノの報告通り、あまりに自然に受け入れていて、疑問にも思っていないことにウスラ・バッカは驚いたが、
「なんでこんな簡単なことに時間がかかったのだ？」

突然クロミが出現したことで、潤からも聞き出せたのだが、ウスラ・バッカが厳しい目でウノを見た。
「私が調査した時は、影も形もありませんでしたので……」
ウノは慌てて首を振った。クロミたちに続いてマイメロたちが夢ヶ丘に来たのは、つい最近のことで、その間ウノは恵一とウスラ・バッカの撮影に忙しく、調査をしていなかった。もちろん、分厚い調査書にも載っていない出来事だ。ちなみに二人ともセバスチャンに用意された客間で喋っていたので、聞いている者はいない。
客間といってもウスラ・バッカの滞在していたホテルと遜色ない部屋だ。
「さっそくマイメロを倒しますか？」
それぞれの部屋のクローゼットに荷物を片付けていたウノが、ソファに座っているウスラ・バッカのところに戻って来て、物騒な言葉を口にした。
「外見は説明してもらったが、まだ何か隠しているかもしれない。パーティーにも来ると言っていたからな。その時にじっくり観察することにしよう」
「では、私は夢野家について調べて参りましょう」
お互いの意見が一致した頃、タイミングよくコーヒーが運ばれてきた。ウスラ・バッカがコーヒー好きなことを知っている恵一のはからいによるものだった。
「さすが、ケイイチは気が利くな。お前の分もあるぞ」

セバスチャン自らが運んできたコーヒーの香りに、ウスラ・バッカはすっかり機嫌をよくしている。ウノはワゴンを受け取ると、二人分のコーヒーを淹れた。
恵一もマイメロたちも夢野家に来ていることは、セバスタンと密に連絡を取っているセバスチャンから聞いていた。クロミの目的こそ聞かされてはいなかったが、今回は事件絡みでないことも知っている。
どちらにしろ、バレるのならいっそ本人たちを見せてやればいいと思っていた恵一自身も、自覚はないものの慣れきってしまったのかもしれない。

いよいよパーティー当日になった。セバスチャン、セバスタン兄弟は張り切って働いていて、潤はより長時間演奏が出来るように前日までトレーニングを重ね、恵一とウスラ・バッカはリハーサルを前日にみっちり行っていた。
一応客扱いになるウノは普通のスーツを勧められたが、執事ルックの方が慣れていることもあり、裏方としてセバスチャン兄弟の手伝いをすることになった。恐縮するセバスチャンに、
「ウスラ・バッカ様と違い、私は根っからの使用人でございまして。働いている方が楽なのでございます」

などと言い訳した。準備をしながらセバスチャンやクロミから色々と聞き出すことにしたのだ。

　お蔭でクロミがマイメロを嫌っていることや、マイメロがいつも夢野家では歌と行動を共にしていること、歌たちが学校に行って不在の時は、家事をしていることなどを突き止めていた。部屋の間取りも抜かりなくチェック済みだ。

「王子、案外簡単に済みそうです」

　パーティーの直前、ウスラ・バッカの着替えを手伝いながら、ウノがほくそ笑んだ。

「そうか。では、今夜のパーティーで実際のマイメロとやらをよく見てみよう。お前の言った通り、簡単そうなら、パーティーが終わった後に決行するぞ」

　ウスラ・バッカと恵一は明日の朝には柊家を出て、北海道から始まるコンサートに出かけることになっている。パーティーの終わる時間は遅く、翌日は休みということで、歌たち家族もマイメロも、疲れ果ててぐっすり眠っているはずだ。

「我々は明日の早朝立つことになりますし、疑いをかけられることもないでしょう」

「まあな。お前も普段通りに行動するのだぞ。怪しまれないようにな」

　柊家の客間でワインならぬコーヒーを飲みながら、物騒な話をしている二人だった。

「これで何の心配もなく、コンサートが出来るというものだ。ケイイチのためにも、素晴らしい演奏をしてやらねばな」

ウスラ・バッカは恵一とリハーサルを行った際、恵一の技術がまた上がっていることに驚いた。それはライバルとも友人ともいえるウスラ・バッカのお陰でもあるのだが、コピー能力と元々の才能と努力の差ともいえる。
お金を生み出すやり方はノウハウをコピーしたことで財を成せたウスラ・バッカだったが、芸術分野は複雑なものだと認識を改めた。母星にも各種の音楽はあるが、地球ほどバラエティに富んでいない。
「ジュンとかいうケイイチの弟が弾いているギターも、音はうるさいが曲も歌もなかなかいいものだ。今夜はそっちも楽しめそうだな」
「……そうでございますね」
ウノとしては、マイメロを片付けた後は、すぐさま地球を乗っ取る行動に出るものと考えていたのだが、ウスラ・バッカは余計な血を流すことはしたくないらしい。多分、コンサートが終わった後になるのだろう。
そして、今の自分の姿が地球上ではかなりカッコいい部類だと分かっているので、元の姿になって地球を征服するのでは不満なようだ。
「宇宙一のイケメン・ハイスペック王子の私に従わない者などいるものか……ふふふ」
――イケメンな悪役は人気があるらしいぞ。
ウスラ・バッカが以前言っていたことをウノは思い出した。

フランスでは日本製のアニメは人気があり、テレビでもよくやっている。ウスラ・バッカが日本製のアニメや映画、ドラマなどを熱心に見ていたこともウノは思い出し、頭を抱えた。

(確かに、我々本来の姿を見たら、中ボスくらいにしか認識出来ないかもしれない……)

ウノの方も、何やら影響を受けているようだ。

ただし、ウスラ・バッカの今の姿と地球上での能力は、元がコピーなのだ。ヴァイオリンの演奏技術も恵一のコピーである。コピーはいいとこどりの重ねづけは出来るが、完全なる魔力を発揮するには元の姿に戻らなくてはいけない。

だからこそ、思いのほかあっけなくマイメロをやっつけられそうなので、大きな魔法の能力を使わずとも、今の姿を保ったままで使える魔法の力だけで、世界に君臨出来ると信じきっている。

今の段階で、ぬいぐるみとしか見えないらしいマイメロと、マイメロよりは多少は厄介と思われるウサミミ仮面を倒しただけで、本当に地球征服できるのだろうかという疑問は、都合よくなかったことにしている二人だった。

(万が一本来の姿に戻る事態になっても、見た者にあれは他人ということとすれば良いだろう……ウノを使うか)

(王子は何か都合の良いことを考えているに違いない……)

生まれてこのかた困難に立ち向かうという経験をまったく持たなかったウスラ・バッカだが、日本に来てクロミたちに会い、マイメロという生き物について多少の知識を得た今は、完全になめきっているのだった。

ウサミミ仮面だけは未知数の存在だが、脅威には思っていないようだ。

「どうも、クロミと名乗る生き物は、マイメロに敵対しているようでございますし、利用するのも手かと」

「まあ、そこまでの小細工はいらないだろう。何にしても楽な仕事だ」

ウスラ・バッカはさっさと地球を征服出来ることに、むしろ残念な気持ちすら持ち始めているようだ。よほど地球が気に入っていると見え、ウノは気が気ではないが、飽きっぽい王子のこと、すぐに母星に帰りたくなるだろうと楽観している。

「王子、そろそろパーティーが始まる時間でございます」

コーヒーのセットを片付けたウノが声をかけた。手にはヴァイオリンケースがあった。そのヴァイオリンはつい先週手に入れたばかりで、地方都市なら家一軒が買えるほどの価値を持っているものだった。もちろん、今のウスラ・バッカにとってははした金だ。

「分かった。では、行こう」

ウスラ・バッカはもったいをつけて立ち上がり、ウノとともにパーティー会場に向かった。

パーティー会場に着くと、セバスチャンがすぐに近づいて来て、ウスラ・バッカを恵一の隣に案内した。進行役の男性が挨拶に立つ招待客の紹介をしている。
「盛大なパーティーなんだな」
ボソッとウスラ・バッカが呟くと、
「すみません。家族が派手好きなもので……僕は苦手なのですが」
恵一が恐縮して答えたので、ウスラ・バッカは慌てて、
「いやいや、批判しているわけではないよ。さすがは柊家だと、感心していたんだ。それに、キレイな女性もたくさん来ているようだし」
取り繕うように答えた。実際デザイナーをしている母親の関係もあり、客はモデルやデザイナー、女優など女性の方が多い。当然、恵一のファンもいるだろうし、ウスラ・バッカに関心を持った人も多いはずだった。
挨拶が終わり、舞台にライトが当てられると、潤がその真ん中に立っていた。
「兄貴の演奏の前に、俺の曲も聴いてくれよー！」
明るく切り出すと拍手が起こり、潤はノリノリで演奏を始めた。今年の春に流行った曲の他に、頑張ってもう一曲続けて演奏を続けた。

間近で聞くと、確かに音量は大きいが、YeahTube再生数はダテではない。一発屋ではないクオリティの曲と演奏に、ウスラ・バッカも驚いて舞台を見つめた。

「さすがはケイイチの弟さんだ。デビューが待ち遠しいね」

ウスラ・バッカに言われて、恵一もまんざらではない様子だった。しかし、演奏が終わって舞台から引っ込んだ途端、潤は倒れ込み、セバスタンに抱えられながら恵一の脇を通り過ぎ、パーティー会場から引っ込んだ。

「大丈夫なのか？　ずいぶん顔色が悪かったようだが」

「はあ、いつものことです。今回は大分頑張ったみたいですが」

恵一はため息まじりに言い、さほど心配していないようだった。歌たちもパーティー会場にいて、拍手をしていた。

「頑張ったね、潤くん」

「ああ。前の時は見られなかったけれど、潤も進歩したんだなあ。俺も頑張らないと」

今回はすんなり入ることが出来た小暮駆が、歌の隣にいた。ちなみにマイメロは歌に抱かれていて、フラットくんは駆が、ピアノちゃんは美紀のバッグの中にいた。そして、

「次は柊しゃまだよ。ああ～～今日もカッコいい……」

「クロミ様、そんなに身を乗り出すと、マイメロたちに見つかるゾナ」

クロミは舞台の隅に隠れながら、パーティーの様子を見ている。マイメロに見つからな

いようにしていたのだ。
一応、潤から歌たちの提案を聞いたのだが、クロミは一〇〇パーセント、マイメロを信じていない。絶対裏があるはずだと思い込んで、隠れていたのだ。そして、ドラマチックにクルミ・ヌイとして登場するタイミングをねらっているのだ。そのためにも、まだ連れ戻されるわけにはいかない。
「奏ねえ、潤先輩カッコ良かったね」
「そうね。夏の頃に比べたらずいぶん進歩したわね。いよいよデビューかしらね」
歌と駆とは少し離れた場所にいた奏と琴も、舞台を見ていた。琴は相変わらず潤のファンで、奏は弟を見るような気持ちで潤の演奏を聴いていた。姉妹と美紀、真菜は奏がコーディネイトしたドレスに身を包んでいる。人気の読者モデルをしているだけあって、奏の選んだドレスはそれぞれのキャラクターにピッタリと合っていて、
「駆くんも何か言ってくれたらいいんだけど……」
オシャレして現れた歌に、駆はドキドキしてしまって、気の利いたことなど何一つ言えなかった。
「おっ、歌ちゃん、相変わらず可愛いね～今日のドレス、すごく似合ってるよ～。奏さんもいつも以上にキレイだし、琴ちゃんも可愛く決まってるねー」
なんて、サラっと潤に言われてしまい、歌だけでなく、その場の全員にガッカリされた



てもいいだろう。

駆だった。空気を読まない潤を差し引いても、『キレイ』や『可愛い』の一言くらいあっ

——このヘタレが！

その場にいたみんなが心の中で叫んでいたに違いない。歌は駆をチラチラ見ていたが、舞台に再びライトが当たり、そっちに目を移した。

「あっ、始まるよ」

クロミが言い、一段と高まる拍手の中、恵一とウスラ・バッカがヴァイオリンを手に舞台の上に立った。お互い顔を見合わせ頷くと、ヴァイオリンの演奏が始まった。

「ひゃあ～～ステキ～～」

「カッコ良すぎるゾナ。ずるいゾナ」

間近で見ているクロミの目が♥になっている。それくらい息の合った演奏だった。それはクロミたちだけじゃなく、

「うわ～～カッコいいね～、歌ちゃん」

「ホント、柊先輩はますます上手くなったね、マイメロ」

マイメロと歌が、思わず口に出してしまい、歌は駆をチラッと見た。駆もその演奏は素晴らしいものだと思っているが、歌や周囲の女性たちの目が舞台の二人にくぎ付けになっているのを見ると、何となく落ち着かない。

大学に入ってからの恵一はコンサートを重ねるたびに人気が上がり、大人っぽさを増している。今日はウスラ・バッカと一緒なので、恵一は若く見えるのだが、駆にはそうは思えない。

恵一が演奏の時に大人に見えるのは、ヴァイオリンに対する自信と努力の現れだ。駆も恋愛に関してヘタレなだけで、今ではオリンピック候補と言われるほど、陸上界では期待されているのだが、いつまでもコンプレックスがぬぐいきれずにいる。

「駆、先輩の演奏が終わったよ。何か食べに行こう」

歌の拍手にハッと目を上げると、恵一とウスラ・バッカは舞台から降り、関係者に囲まれていた。恵一はまだ歌たちには気づいていないようだ。舞台には別の演奏者が現れ、セットを整えていて、やがて静かなクラシック音楽の演奏が始まった。

「そうだな。潤のところは後に回すか」

駆は歌に続いた。潤は当分ベッドから起きられないだろう。

柊家のパーティー会場は広く、料理もたくさん並んでいる。琴や美紀も歌たちに続き、真菜はすでに料理の前にいた。

「歌、琴、あんまり食べ過ぎないようにね」

歌たちの背中に声をかけると、奏は料理とは違う方向に歩いて行った。食事も楽しみなのだが、毎月書いているコラムのネタを集めるために、ファッション関係の人たちが集まっているところに行こうとしていたのだ。大学を卒業した後は、やはりファッション系の仕事に就こうと思っている奏だった。だが、足を止め、
「やっぱり、まずは柊恵一とご両親にお礼を言わなきゃね」
そう思い直し、夢野家代表のつもりで招待状のお礼を言うことにした。
奏はまず恵一の前に行き、
「今日はお招きありがとう。柊恵一……くん、久しぶり。あ、そうでもなかったかしら？」
いたずらっぽく笑った。普段なら恵一のことは、『柊恵一』とフルネームで呼ぶ奏だったが、よそ行きに『くん』付けで呼んでみた。
恵一の脳裏にドクロボウの悪夢が甦ったが、すぐに気を取り直して周囲を見回し、
「歌くんたちも一緒かい？　僕らは明日早いので一通り挨拶が終わったら休むつもりだが、最後まで楽しんで……」
「ケイイチ、この女性は？」
割り込むようにしてウスラ・バッカが入って来た。恵一は驚きながらも奏を引き合わせ、ウスラ・バッカを紹介した。

「高校まで同級生だった夢野奏さんだ。今は大学生で……」
「美しい！　まさか、ケイイチの彼女じゃないだろうな？」
今度はさらにグイっと間に入って来た。今日の奏はクリスマスが近いこともあって、落ち着いた優雅なデザインのドレスを着ている。
「残念ながら彼女じゃないわ。でも、ウスラ・バッカさんのことはネットのニュースで拝見しました。今の演奏も素晴らしかったわ。コンサートには行けないけれど、楽しみにしています」
日本の女性はフランスに比べると子供っぽく見えるので、普段の奏なら高校生にしか見えないだろう。だが、今日は妹たちとは違い、大人っぽいドレスを着ているため、年相応に見える。奏が大学生と分かると、ウスラ・バッカは俄然興味を持った。
「ドレスも良く似合っていますよ。とても美しい」
「どうもありがとう。嬉しいわ」
歯の浮くようなセリフを言うウスラ・バッカに、奏はニッコリと笑いかけた。
「ケイイチ、彼女と少し話をしてもいいだろうか？」
「あ……ああ」
恵一とウスラ・バッカの周囲には、キレイな女性がたくさんいて、話をしたがっていたように見えたため、奏は自分の目的のところに行こうとするが、

「ミス・カナデ……名前まで美しいですね」

と、奏の手を取り、手の甲に軽くキスをした。欧米風だ。普通ならこれだけで多くの女性がメロメロになるのだが、奏は素直に手を戻すと、

「……あなたの名前も素敵よ」

社交辞令とともに余裕の笑みを浮かべ、去ろうとする仕草を見せた。周囲の女性たちが奏に対して嫉妬の目を向けるが、それにたじろぐ気配もない。その様子を舞台の陰からクロミとバクが見ていて、

「あのウスラ・バッカという男は、奏さんが好みのタイプゾナか」

「あんなにいい男に言い寄られた上、周囲の視線にもたじろがないとは……恐るべし奏さん。いや奏姐さんと呼ばせてもらうよ」

クロミのところからは喋っている内容は分からないが、何となく雰囲気が読み取れる。ウスラ・バッカがいるために、今回は恵一に群がる女性が少なくて安心していたクロミだったが、クルミ・ヌイの姿になってウスラ・バッカに言い寄られたら、舞い上がってしまい、奏のような態度はとれそうにない。

イケメンに弱いクロミと違い、万年モテ期の奏にとっては、言い寄られることなど日常茶飯事だ。そして、残念なことに奏は『だめんず』好き、つまり面食いじゃない上に、どこかダメダメな男が好みなのだった。ウスラ・バッカのスペックが高いほど、好み

から離れていくことになる。
「コンサートが終わったら、ぜひ私とつき合ってください」
当然、そんなことは知らず、ウスラ・バッカはグイグイやって来る。この積極性の半分でもいいから駆くんに欲しいものだと、奏は思いながら、
「ごめんなさい。私、あちらの皆さんとお話をしたいの。それに今つき合っている人がいるので、ウスラさんとはつき合えないわ」
「じゃあ、コンサートの後、ここに戻って来たら食事をご一緒しましょう。連絡先を教えてもらえないだろうか」
スマートにかわそうと思っていた奏だったが、へこたれないウスラ・バッカにだんだん辟易してしまった。
「どうしてもというなら、恵一くんから聞いてね」
面倒なので恵一に丸投げして、奏はスッとウスラ・バッカをすり抜けて、恵一と話している彼の母親のところに向かった。
「くう……この私の誘いを断るとは……」
ウスラ・バッカに一瞬怒りの表情が浮かんだが、奏が他の男性ではなく、恵一の家族のところに行ったのを見ると、
「日本女性はシャイだと聞くが……きっと大勢の前で恥ずかしかったのだろう。そうに違

いない」

すぐに自制心を取り戻したウスラ・バッカは、何事もなかったように取り繕い、他の女性たちの中に入って行った。しかし、心の中は煮えくり返っていたのだ。

そして、そんな二人の様子はその場のちょっとした話題になっていた。遠くで早くもデザートに手を出している歌たちや、クロミたち、セバスチャン兄弟も何気ない様子で見ていた。

ウノもハラハラしながら成り行きを見守っていたが、奏が去り、普段通りの様子に戻ったウスラ・バッカを見てホッと胸をなでおろした。

「さすが、お姉ちゃん……私なら今の彼氏よりもずっといいと思うのになあ」

歌が呟くと、

「歌ちゃん、奏ちゃんはモテるねえ～～」

マイメロは呑気に言い、駆は相手が歌じゃなくてホッとしていた。

「奏ねえはいつもあんな感じみたいだよ。でも今は別の学部の人に夢中なんだって」

それはいわゆる理系、研究者タイプの大学院生で、学校に寝泊まりするような男らしい。奏とのデートよりも新しい発見やデータを選ぶような男で、奏は時々研究室に得意

な料理を持って行くこともある。他の院生や教授からは大人気らしいが、本人は鈍くて気がつかない。それで不満な様子だった。
「また、新しい彼氏が出来たんだね〜〜」
「今度はうまくいくといいな」
マイメロと駆は前向きなことを言ったが、歌にとって自慢の姉だけに、どうせならもう少しハイスペックなイケメンの彼氏を見てみたいと思っている。
「あんなイケメンに迫られてもダメやなんて、奏さんって、ほんま、だめんず好きなんやな」
「すごいお金持ちだって聞いたわよ。ほんと、もったいないわ」
多少でも気持ちが動くのが当然のことと思っていたのに、ここまで徹底しただめんず好きとは思っていなかった真菜と美紀も、驚くと同時に残念がっていた。

やがて、ダンスタイムとなった。
パリ同様に、恵一とウスラ・バッカの周りには、ダンスのパートナーの指名を受けたい女性たちが先より多く集まっていた。
「フン！　どうして、あの二人にだけに女の子が集まるゾナ！　不公平にも程があるゾ

ナ！」

とバクが負け犬オーラを放ちながらボヤいていると、いきなりクロミのハリセンが飛んできた。

「い、痛いゾナ！　バクはボヤいただけゾナよ」

バクが不満顔で言うと、クロミはその手を引っ張って、

「ついにあたいの出番だよ！」

「ゾナ？」

「あたいたちが人間界に来た目的を忘れちまったのかい！」

その言葉に、バクはようやくクロミがクルミ・ヌイになろうとしているのを理解した。

パートナーを次々に替えて踊るウスラ・バッカと違い、恵一は誰とも踊らず、退室のタイミングを計っていた。

恵一は歌をパートナーに選ぼうとしたのだが、ヘタレの駆が察して歌と踊り出してしまったのだ。ひどい踊りだった。

「よくあんな踊りに付き合うものだ」

歌にフラれていた経験のある恵一が、負け犬オーラが出るのを懸命に抑えながら会場

を出ようとした時だった。
ドアが開き、ゴスロリ調の黒いドレスに身を包み、小悪魔的な魅力を醸し出した美少女が入ってきた。クロミが黒魔法によって人間の姿になったクルミ・ヌイである。
黒髪をツインテールに束ね、真紅のバラの髪飾りをつけている。情熱的な目と真っ赤な唇。その目に見つめられたら、大抵の男は一瞬のうちに魅了され、その唇を奪いたくなる衝動にかられるだろう。
「クルミ・ヌイ……さん！」
心の中のどこかでクルミ・ヌイが現れるのを期待していた恵一は、すぐにその手を優しく掴み、
「僕と踊って下さい」
「はい、喜んで」
踊り出すと、会場にいる人々の目が二人に釘付けになった。
クルミ・ヌイは、いやクロミは幸せの絶頂を感じていた。
（このまま時間が止まればいいのに……）
恵一も軽やかにステップを踏みながら、自分が以前より強くクルミ・ヌイに惹かれているのを感じていた。
お色気むんむんの女性と踊っていたウスラ・バッカも気がついて寄ってきて、

「ケイイチも隅に置けないな」
とウインクした。
だが、曲が終わると、楽団員たちが楽器を片付け始めた。
まだ踊りたい恵一だったが、明日のコンサートのために、ダンスの演奏は五曲だけにしていたことを思い出した。クルミ・ヌイもまだ踊りたいといった表情をしている。
恵一は理由を話して謝ると、その耳もとで呟いた。
「コンサートから帰ったら、もう一度お会いできますか？」
クルミ・ヌイは天にも昇る想いをグッと堪えて、
「……もちろん喜んで」
と言うのがやっとだった。
「君の連絡先を知りたいのだが」
クルミ・ヌイは思わずクロミのケータイの番号を教えそうになったが、寸前に気がつき、
「私の方から連絡するわ」
そう言い残して、会場を後にした。

ウノはダンスタイムの途中からクロミとバクの姿がなくなっているのに気づいていた。
おそらくマイメロたちに発見されるのを恐れ、部屋に戻ったのだろうと考えた。
（あの二人には、役に立ってもらわないと）
ウノは三枚の皿に何種類かの料理を載せると、柊家の使用人二人に手伝ってもらい、クロミの部屋を訪ねた。
すでに、クルミ・ヌイから元の姿に戻ったクロミとバクが出迎えた。
二人はウノたちが運んできてくれた料理に飛びつき、凄い勢いに食べ始めた。
「あんた、ほんと気が利くねえ」
「美味しいゾナ。嬉しいゾナ。でも、クロミ様はさっきから『腹がいっぱい』って言ってたくせに、よく食べられるゾナね」
「腹じゃなくて、胸がいっぱいって言ってたんだよ！　ボケなすびが！」
ウノはバクが小突かれるのを見ながらニヤリと笑い、
「マイメロとやらに見つかるとまずいので、会場の料理が食べられなかったのですね。お可哀想に。それにしても、マイメロはそんなに恐ろしいのですか？」
「ああ、とんでもなく悪いヤツだよ。あんなにのほほんとした顔をしてるのにさ」
クロミが料理をつまみながら早速悪態をつき始めた。
「クロミ様、それは言い過ぎゾナ」

「いやいやいや、マイメロのお蔭で、何度苦しめられたことか思い出してみな」
「……そうだったゾナ？」
半分以上はクロミが原因で起こった逆恨みじゃないかとバクは思ったが、口に出すのはとどめた。
ウノはそばにいる使用人二人にわざと聞こえるように、
「そういえば、明日は出立が早いのでした。ケイイチ様も退出されたことですし、私もウスラ・バッカ様をお迎えに行くことにします。時差ボケもなかなか治りませんし」
「明日からのコンサート期待しているゾナ」
「料理ありがとな。コンサートは柊しゃまがいるから大丈夫だと思うけどな」
二人は口々に礼を言った。
ウノは二人に軽く頭を下げて、使用人二人とパーティー会場に戻って行った。
実は、これはウノの考えた作戦だった。
料理を二人に届け、何気なくマイメロの話を振ったのだ。すでにクロミがマイメロに恨みを持っていることは、ウノも聞き出していた。
本当ならマイメロや歌たちのいるところで言わせたかったが、クロミはマイメロの前に姿を現そうとしないし、パーティー客に紛れて飲食することもなかった。直接対決が無理と分かったウノは、クロミを見慣れている使用人の前でマイメロの悪口を言うように、

計画を変えたのだった。
ついでに、明日早いことを強調し、ウスラ・バッカと自分の部屋に誰も来ないように牽制した。これから会場に入って、ウスラ・バッカと話している相手や、恵一家族などにも同じように言えば、さらに計画通りとなる。
ウノはニヤリと笑い、ウスラ・バッカを捜した。
しかし、十分に根回しをしていたにもかかわらず、ウノの計画はあっさりとつぶれてしまった。
ウスラ・バッカは奏にフラれたことを根に持ち、アルコール類をガバガバと飲み、ヘロヘロ状態でベッドに倒れ込んだ。ウノはウノで、ウスラ・バッカの介抱で力尽きて、同じくベッドに入るとすぐに寝てしまった。
あろうことか、二人揃ってその晩ぐっすりと眠ってしまい、夢野家には行けなかったのだ。

# 第四章　声が届いたらイイナ！



「ああーーっ！」
目覚めた途端、ウノは大声を上げた。なんと、朝日が昇っているではないか。
「なんだ、騒々しいな」
ウノの大声で目覚めたウスラ・バッカが、あくびをしながら隣のベッドルームから出てきた。
「申し訳ございません！」
こうなったらひたすら謝るしかないと、ウノは平身低頭、五体投地でウスラ・バッカの前にひれ伏した。その状況を理解したウスラ・バッカも、
「何で起こしてくれなかったんだ」
と、怒ったものの、まだ酒が十分抜けていないようで、ホテルにあるような小さな冷蔵庫の中からミネラルウォーターを出すと、グイグイ飲み始めた。
「しょうがない。作戦変更だ。時間はまだたっぷりあるさ」
ウスラ・バッカはシャワールームに向かった。あまり怒っていないウスラ・バッカに気が抜けたウノだったが、とりあえず胸をなでおろし、ウスラ・バッカの着替えを出しながら、次の作戦を練ることにした。
「今度こそ成功させなくては」
ウノとしては、一旦うまく行くと思っただけに、この失態は残念でならない。

「私の老後のためにも、早く地球を征服してもらわねば」
それが本音だった。フランスや日本での生活も予想以上に楽しんでいるが、昨日のパーティーで柊家の様子を見て、ウノは少し気持ちが揺らいだ。別の方向にだったが。
柊家ほど経済的にゆとりはなく、妻は恵一の母親のように社会的に活躍しているわけではなく、子供は恵一や潤ほどの才能がないという、ないない尽くしというか、ごく普通の一般家庭であることをウノは思い出し、心配になってきたのだ。こうして地球で時間を費やすごとに、のんびりとした老後の計画のための資金が妻と子供たちに使われていっているに違いないと確信している。
地球のニュースやバラエティー番組に影響を受けているだけで、もう少し家族を信じてやれよと言いたいところだが、地球の常識は宇宙の常識のような気がしてならないウノだった。
「失礼します」
ノックの音がして、ウノが慌てて部屋のドアを開けると、朝刊とコーヒーポットをワゴンに載せて持って来たセバスチャンの姿があった。早朝なのに自分たちが起きたことを察して、自らワゴンを運んで来るとは。ウノはセバスチャン兄弟が自分たちを信用していることに良心がとがめた。
自分の叫び声が遠くまで響いたのかとひやひやしたウノだったが、そんなことはなく、

恵一もまだ休んでいるらしい。

「先程バク様が新聞配達から戻って参りまして、どうも、マイメロ様と一緒のようでございましたが」

ごくごく普通にセバスチャンが話しかけて来た。渡りに船とか鴨葱とかの言葉が頭をよぎったが、あくまでも顔には出さず、

「昨夜は楽しいパーティーでした。主人も少しお酒を飲み過ぎたようで、ぐっすりと眠ってしまいました」

にこやかに言うと、

「出発までまだ時間がございます。間もなく朝食をご用意しますので、ゆっくりと召し上がってください」

セバスチャンの丁寧な言葉遣いに、気が引けるウノだったが、そこは平常心を保ち、

「ありがとうございます。主人のウスラ・バッカにもそのように伝えておきます」

ドアを閉め、セバスチャンが遠ざかっていく気配に、嬉しさを隠せないウノだった。

早速コーヒーをセットしていると、ウスラ・バッカがシャワールームからタオルを頭にかぶったまま出てきた。ソファに腰かけ、コーヒーカップを口に運んだ。

「王子、チャンスでございます」

「なんだ、いきなり」

ウノの目がキラキラ輝いている。
「先程バクと申す者と一緒に、マイメロがこの屋敷に来た模様です。しかも、まだケイイチ様は起きていない様子。チャンスです、ウスラ・バッカ王子」
「そうか……」
ウスラ・バッカはそれほど喜んだ様子もなかったが、
「では、ウノ、様子を見て来い。マイメロが人気のないところに出てきたところで、私を呼ぶのだ。いいか？」
「分かりました」
ウノは瞬時に姿を消した。ウノの魔力でも、この程度の距離移動なら問題はない。ウノは姿を隠しながらマイメロの気配を探った。

「あっ、クロミちゃ〜〜ん♥　みーつけたっ♥」
「げげげっ、マイメロ！」
二人の声にウノが気づいて、気配を消して近づいた。
「なんだよ、こんな朝早くから何の用だよ」
クロミはバクからマイメロが来ていると言われ、慌てて隠れようとしたが間に合わなか

ったようで、

「まさか、気が変わって連れ戻しにきたのか。あたいはまだ戻らないよ」

プイとそっぽを向いた。

「ううん、違うの～～♥」

「いちいち♥出すんじゃねえよ！」

まるで見えているかのようにクロミが言うと、

「クロミちゃん、柊先輩に会いに来たんでしょ～？」

「ち、ちげーよ」

みんなに知られていることだが、マイメロに指摘されてクロミは慌てて否定した。

「もうもう、クロミちゃんったら♥　照れることないよ～～」

「うっせえな。だったらほっとけよ」

少なくともクロミは恵一との約束通り、恵一がコンサートを終えて柊家に戻るまでは絶対に帰らないつもりだった。

ところで、二人が話をしているのはウノには好都合な柊家の庭だった。といっても広大な庭の隅の方で、マイメロがクロミに寄って来たため、じわじわと隅に追い込まれた格好になっていた。

ちょうど大木が近くにあり、ウノにとってはさらに都合が良かった。話はまだ続きそう

なので、ウノは自分のいる場所をウスラ・バッカに告げ、戻ってきた。
「だ〜か〜ら〜、違うよ〜」
「だーーっ、もっとちゃっちゃと話せよ。イライラするぜ」
長いつき合いのクロミである。今は負い目もあるクロミである。だが、やはりマイメロの独特のスピードには慣れないでいる。
「あのね、歌ちゃんたちとみんなで明後日の夜、クリスマスパーティーするの。クロミちゃんとバクくんも来ない？　これから潤くんにも伝えに行くんだ〜」
「はあ〜〜？」
予想外の言葉に、クロミの目が点になった。
「クロミちゃん、柊先輩がコンサートに行ってる間はヒマでしょ？　だから一緒に遊ぼうよ〜〜♥」
「なんだって？」
クロミの顔が険悪になったが、マイメロは構わず続けた。
「あのね〜〜潤くんから聞いたと思うけど、歌ちゃんとも相談して、柊先輩が戻って来るまで、クロミちゃんのこと、王様には黙っていることにしたの〜〜♥」
「……」
クロミの顔が真顔になった。

「マイメロも、もうちょっと歌ちゃんと一緒にいたいし～～♥」
マイメロはニコニコ顔で話している。
その時、大木の陰で聞き耳を立てているウノの横にウスラ・バッカが現れた。
（二人は何の話をしているのだ？）
ウスラ・バッカの魔力によって、二人の姿は見えないようになっていた。
マイメロとクロミが小さいので会話はハッキリとは聞こえないが、内容も大したことはなさそうなので、問題はなかった。
（マイメロは、クリスマスパーティーの招待のために来たようですが……）
一連の流れをウノがウスラ・バッカに説明した。
「明日は奏お姉ちゃんと、歌ちゃんと駆くんはクリスマスデートでいないから、明後日にしたの～～♥　マイメロも料理いっぱい作るよ～～♥」
（なにっ！　ミス・カナデがクリスマスデートだとーーっ!?）
かつてないほどウスラ・バッカが動揺した。ウノにも分かるくらいに。
（……クリスマスデート……）
呪文のようにウスラ・バッカが繰り返した。
（クリスマスにデートをするのは特別な関係ということか？）
テレビからの情報だろうか。ウスラ・バッカの脳裏に激甘ラブラブなカップルがイル

ミネーションを背景にイチャイチャしたり、夜景の見えるホテルのレストランで食事をしたりする風景が浮かんだ。
奏は確かにクリスマスにデートの約束をしているが、前述した通りの相手なので、研究室でケーキを食べるくらいだろうと思われる。奏のためにも、せめて二人っきりになれると良いのだが、相手はそこまで気が利くタイプではない。
（表情は見えませんが、クロミはあまり嬉しくなさそうですね）
ウノの言う通り、笑顔のマイメロに対し、クロミは黙ったままだ。
（今までの情報と本人の話によると、クロミの方が一方的にマイメロを嫌っているらしいですが、本当のようです）
マイメロはクロミが何も言わないことにも気づかず、
「マイメロも柊先輩とウサミミ仮面さんにも会いたいし～～♥」
ニコニコ顔で話しかけるマイメロに対して、クロミの顔は能面のようだ。ウサミミ仮面という絶好のキーワードが出て来たのだが、
（……クリスマスデートか……明日も私はコンサートだ。会場にはきっとカップルが大勢いるのだろう……ケイイチとのコンサートも悪くはないが……）
（王子……王子？）
ウスラ・バッカはブツブツと独り言を言いつつ、たそがれていったが、ウノに話しかけ

られ、ようやく平常心を取り戻しマイメロに目を移した。しかし、ウサミミ仮面という言葉を聞き逃したのは失敗だったかもしれない。もし聞こえていたら、二人も計画を変更しただろう。

　クロミはずっと黙ったままだが、実はふつふつと怒りが湧いてきていたのだ。クロミは低い静かな声で、

「……かい？」

「え？　クロミちゃん、何て言ったの？」

　マイメロが真ん丸な目をして近づいてきた。クロミは後ろ手に、どこから湧いて出たのかハリセンを隠していた。

（あっ、あれは有名なハリセン！）

　ウノが言うと、

（なんだ、ハリセンとは？　私にも分かるように説明しろ！）

　ウスラ・バッカに聞かれ、ウノは手短にハリセンの説明をし、クロミがこれからマイメロをハリセンで張り倒すつもりだと教えた。ウスラ・バッカはすぐに了解し、

（チャンスだ！）

　ウスラ・バッカはサッと右手を出し、二人の様子に注目し、タイミングを計った。

「それは同情かい？　あたいをバカにしてんのかい！　そんな情けはいらねえんだよ！」

「違うの〜〜」
クロミの迫力に、マイメロは首を振った。
「どっちにしろ、お前をぶっ飛ばすだけさーーっ！」
クロミがハリセンを振り上げた。同時にウスラ・バッカが指を鳴らした。ハリセンが瞬時に木槌に変わったが、一瞬のことでクロミは気づかず、そのままマイメロをぶん殴った。
再び、ウスラ・バッカが指を鳴らすと、木槌はハリセンに戻った。
「や〜〜〜ん！」
マイメロは柊家の塀の外まで飛ばされて、倒れ落ちてしまった。
「ふん。これでしばらくはおとなしくなるだろうさ」
塀の向こうに飛んで行ったので、クロミからマイメロの様子は見えなかったが、満足げにパンパンと手を叩くと、自分の部屋の方に戻って行った。
（よし、行くぞウノ！）
（はいっ）
ウスラ・バッカはシュッと瞬間移動した。
二人が塀の外に現れると、マイメロは目を回して気絶していた。
ウスラ・バッカはマイメロを抹殺しようとしたが、さすがにその可愛らしい姿に気が引

けた。

一瞬ためらっているうちに、マイメロの体から青白い塊のようなものが出てきた。マイメロの魂である。

ウスラ・バッカとウノは瞬時に魔力で姿を消したので、魂になったマイメロは気づかない。

なかなかトドメを刺さないウスラ・バッカを、ウノは不思議に思った。

すると、ウスラ・バッカは魔力を使い、ぬいぐるみ状態になっているマイメロの体にバリアを張り、マイメロの魂が戻れないようにしてしまった。

魂となったマイメロから青白い光が消え、無色透明になってしまった。

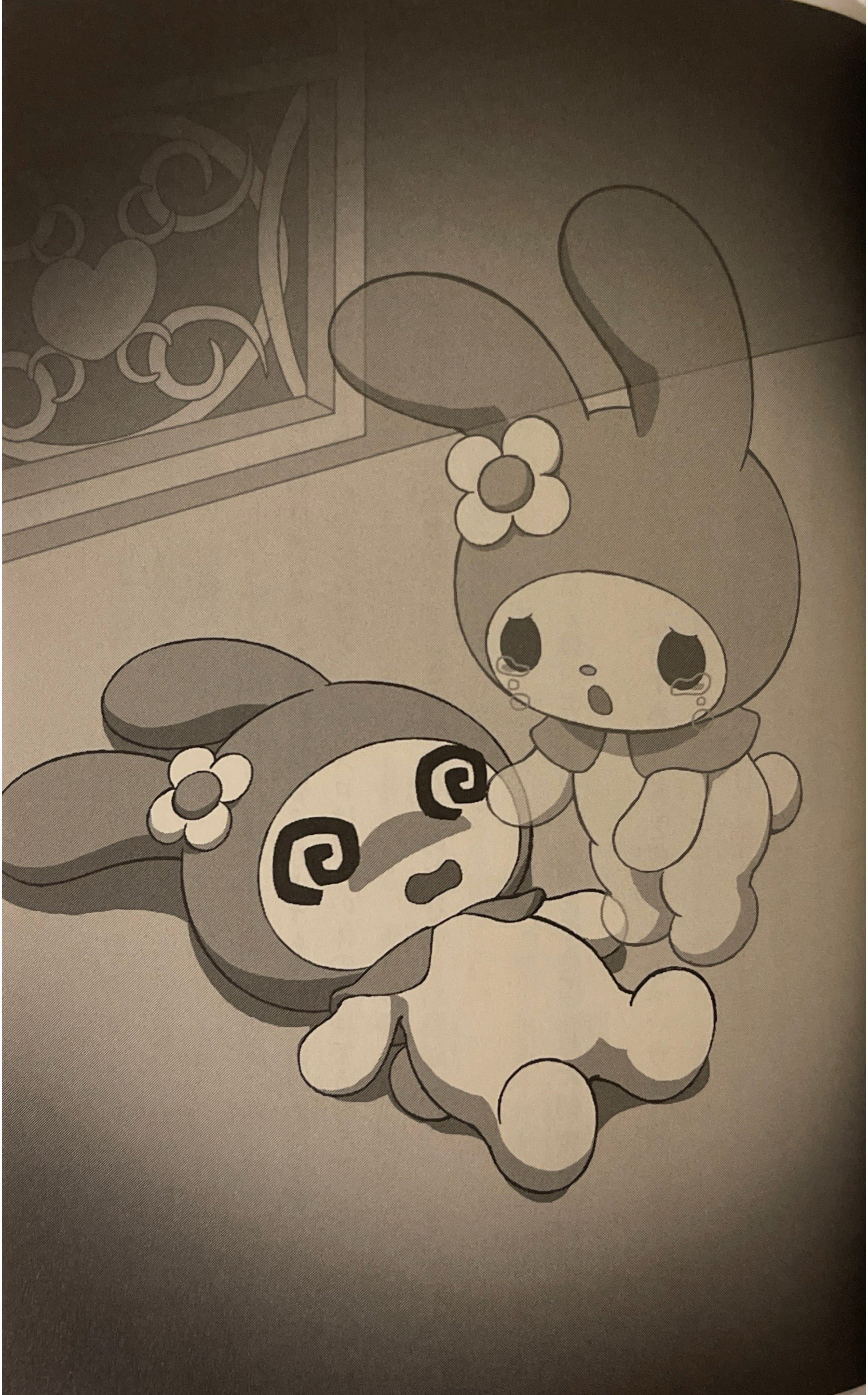
それでも、自分の経験から横たわっている自分の体に入り込めば、元通りになるのを知っており、すぐに戻ろうとしたが、バリアに弾き飛ばされてしまった。

『や～～ん、戻れないよ～』

マイメロは何度も試みたが、やはり戻れなかった。

ウスラ・バッカとウノには、マイメロの魂は見えなくなっていたし、声も聞こえなくなっていたが、体に入ろうとする度に、微かにぬいぐるみ状態の体が揺れるので、思わず笑いそうになってしまった。

『どうしよう～～誰か～～歌ちゃーん、助けて～～』



ついにマイメロは泣きだしてしまった。
二人は満足して、その場を立ち去った。
泣き疲れたマイメロの魂は、冷静になった。
今は戻れないが、しばらくしたらすんなり戻れるに違いないと、楽観的に思っていた。
ただ、戻るにしても、元の体がちゃんとなければどうしようもない。自分のことを知っている誰かに見つけてもらわなければと、マイメロは自分の体のそばでうろうろしていた。
なにしろ、魂だけでは本体を動かすこともできないのだから。

客間に戻ったウスラ・バッカとウノは、セバスタンが運んできてくれた朝食を、満足した表情で食べていた。
一旦はダメだと思った計画が、思いがけずあっさりと成功したので、ウノは嬉しくてたまらない。
「後はウサミミ仮面とかいうものの正体を調べ上げ、倒すだけですね」
ウノが朝食を片付けながら言うと、ウスラ・バッカは食後のコーヒーを飲みながら、
「マイメロ同様、正体さえ分かってしまえば他愛もないことだ」

マイメロ襲撃が、魔力も大して使わずに簡単に終わったことで、ウスラ・バッカは自信をつけている。引っかかることはただ、自分が奏にあっさり振られたことだけだ。しかし、デートの相手がウスラ・バッカ同様ハイスペックな男ならともかく、だめんずだと知らなくて良かった。マイメロだけじゃなく、夢ヶ丘まで被害が達しただろう。

もちろん、十分気にしてはいるが、プライドの塊であるウスラ・バッカは、出来るだけ顔に出さないようにしていた。

ウノの方は、この調子でとんとんと進めたいと考えている。口の軽そうな潤を誘導するか、バクにお金をチラつかせながら聞き出せば、簡単に喋ってくれそうだと確信が出来たのだ。そして、本当に簡単に済みそうな気がするから恐ろしい。

ウスラ・バッカの魔力は今までマイメロが敵対していたものとは種類が違う。こんなに、身近に脅威があるのに、まだマイメロたちも歌たちも、誰もそのことに気がつかないでいる。

ウスラ・バッカは立ち上がり、ウノに声をかけた。

「準備はいいか」

「はい、王子」

二人は朝食を食べ終えると、荷造りを終えたウノと一緒に、ヴァイオリンケースを手に部屋を出た。

門の前に車が横付けされていて、ウスラ・バッカは恵一と挨拶を交わした。
「おはよう、ケイイチ。昨夜は少し飲み過ぎたようだ」
「大丈夫ですか」
心配そうな恵一に軽く手を振ると、ウスラ・バッカとウノ、恵一とセバスチャンがリムジンに乗り込んだ。まだ眠そうな顔をしている潤とセバスタン、恵一の両親に見送られ、四人を乗せた車は空港へと向かった。
「あ〜、また寝直そうかな〜〜」
「潤様、クロミ様も起きているはずです。せっかく昨夜は二曲も演奏出来たのです。朝食を終えたらトレーニングを始めましょう」
「そーだな」
まだ、マイメロのことを知らない潤たちは、家の中に戻って行った。

その頃ベッドにも、キッチンにも姿の見えないマイメロを、歌たち家族が捜していた。
「マイメロ〜〜！」
ウノの予想通り、歌たちは休みということもあり、いつもよりも起きるのが遅かった。何事にものんびりしているマイメロは、きっと朝食の支度を始めているのだと思い、い

つも通りに着替えて一階に降りてみると、マイメロの姿はどこにもなかった。

買い物かと思い、しばらく待っていたが、帰って来る気配はなかった。突然いなくなることなど考えもしなかった歌は、家族や美紀、真菜、自宅に戻っていた駆にも連絡をして行方を捜すことにした。

潤も連絡を受けてすぐに家を出て、歌たちと合流することにした。クロミは新聞配達から帰って仮眠していたバクを起こして、こっそり潤の後を追いかけた。

マイメロは人間でいう、亡くなった状態にいる。歌たちが捜している頃、王様と王妃のルミちゃんもマイメロの気配が消えたことを察知し、夢ヶ丘に向かうことにした。公園に全員が揃い、歌はクロミから朝マイメロと会ったことを知らされた。

「ちょっと、張り飛ばして放置ってあんまりじゃない？」

歌に責められクロミもたじろいだが、

「マイメロがうるさいこと言うからだよ。それに、いつものことじゃないか」

クロミは利用された形になるのだが、もちろん自覚はない。ただ、最後に会ったのが自分だと思うと後味が悪い。マイメロが気を失ったところに、運悪く通りかかったネコか犬にでも連れ去られたのだろうか。悪人ではないクロミなので、自分もマイメロ捜しに参加することにした。人手は多いにこしたことはなく、クロミのお陰で捜す範囲も決まった。

「マイメローーッ！」
クロミの言ったことを手掛かりに、柊家の周りを探し始めた歌は、倒れているマイメロを発見した。
「マイメロっ、マイメロっ、しっかりしてっ！」
歌がマイメロを揺さぶるが、ピクリとも動かない。
「ちょ、なんや、マイメロ。どないしたん？」
「マイメロ、寝てるの？　早く目を覚まして」
真菜と美紀が駆け寄って、マイメロの頬を叩いたり、手を握ったりする。
「マイメロ、どうしたんだよ」
駆も近寄りマイメロに触れた。
「わっぱめー、めー、めーー！」
ピアノちゃんも大パニックになっている。
「おい、なんだってんだよ、マイメロ。早く目を覚ませよ！」
潤もマイメロの耳元で怒鳴るが、目を閉じたままだ。まるで、マイメロそっくりのぬいぐるみが置いてあるようだ。
「いったいどうしてこんなことに……」
フラットくんは呆然自失になっていた。クロミとバクもマイメロに向かって叫んだ。

「マ、マイメロ。ウソだろ、何か言えよ！」
「しっかりするゾナ！　傷は浅いゾナ！」
みんなの叫びもむなしく、マイメロはピクリとも動こうとはしなかった。
『歌ちゃ〜〜ん。みんな〜、マイメロはここにいるよ〜〜』
マイメロの魂は本体に戻ろうとして、何度も試みるが無駄に終わっていて、せめてと思い必死に声を出している。もちろん誰も気がつかない。
「何事ですか！」
「マイメロはどうしたんだゾウ？」
気球に乗った王様と王妃様のルミちゃんがマリーランドから到着した。マイメロを見て、歌たちと同じように声をかけるが、マイメロはピクリともしない。
「困ったゾウ。大変だパオーン！」
ドタドタと周りを駆け回りうろたえる王様を無視して、ルミちゃんはマイメロを抱き上げ、立ち上がった。
「まずは医師に見せるのです。行きますよ」
ルミちゃんは歌たちに王立病院に連れて行くことを告げ、
「優秀な医師が揃っていますから、心配することはありません。回復したらすぐにみんなに伝えますからね」

そう言い置くと、王様に先だってマリーランドに戻っていった。フラットくんとピアノちゃんも一緒にマリーランドに戻ることにし、慌てて王様がその後を追いかけていく。マイメロの魂もルミちゃんたちについて行った。
「大丈夫だよ、歌。マイメロはきっと治るよ」
駆が涙目で空を見つめる歌の肩に手を置いた。
「そうよ、歌。後はお医者様に任せましょう。私たちに出来ることは、治るように祈ることと、マイメロが戻ってきた時笑顔で迎えることよ」
同じく涙をぬぐった奏に言われ、歌は何度も頷いた。
「歌、琴、とりあえず家に戻りましょう。お父さんも心配していると思うわ。みんなも、マイメロの無事を信じて連絡を待つことにしましょう」
奏が気丈に言い、みんなはそれに従って、それぞれの家に戻った。
王様とルミちゃんの気配を感じて、とっさにその場を離れたクロミとバクも、呆然と空を見つめていた。
潤とクロミとバクがいきなり出て行ったと思ったら、全員がガッカリと肩を落として柊家に戻って来たので、セバスタンは何事かと慌てた。

「潤様、クロミ様とバク様も、いったいどうしたのです？」
潤は真っ赤な目をして、セバスタンに、
「マイメロが倒れちゃってさ、目を覚まさないんだ。さっき、王様と王妃様が来て、マリーランドの病院に連れて行ったんだ」
普段からそれほど仲が良いとは思えないクロミとバクまでしょんぼりしているので、セバスタンもよほどのことがあったのだと理解した。
「そうでしたか。あちらの病院で見てもらえば、きっと良くなりますよ。何しろマイメロ様たちは、私どもとは体の作りが違いますから」
落ち着いた声でセバスタンが言い、
「大丈夫ですよ、潤様」
優しく声をかけた。潤は何度も頷いて、家の中に入り、クロミとバクもぼんやりと部屋に歩いて戻った。マリーランドに戻ることも考えたが、真っ先に疑われるのは自分だと思うと申し開きが出来ない。また、どこにいても落ち着かないことは確かだ。
「あいつ、すぐに治るよな」
部屋に戻ったクロミがポツリと言うと、
「そのうちいつもの調子で戻って来るゾナ」
と、バクが慰めるように言った。

マイメロの異変は恵一には伝えないことにした。元々恵一はマイメロに興味がないこと、コンサートの妨げになってはいけないと考えたことと、すぐにマイメロが治ることも考えられるからだった。

マリーランドに戻った王様とルミちゃんは、すぐに王立病院にマイメロを運び込んだ。

「先生、マイメロの容態は？」

知らせを聞いてマイメロママとパパ、弟のリズムくんが病院に駆けつけた。マイメロは面会謝絶状態で、数人の医師が周りを取り囲み、色んな治療をしている。

「分かりません。今までに見たことのない状態です。このまま動かないとなると……」

部屋から出てきた医師は、マイメロの家族と王様、ルミちゃんに向かって、沈痛な顔で言った。

「マイメローーーッ！」

「どうしてマイメロがこんなことに……」

「お姉ちゃーん！」

マイメロの家族の悲痛な叫び声が、病院内に響いた。マイメロが夢ケ丘で倒れたという情報は、マリーランドに一気に広まり、みながマイメロの回復を祈った。

そんなみんなを魂だけになったマイメロが、悲しそうな目で見ている。
『パパ、ママ、リズムくん……みんなー、マイメロはここにいるよーー』
必死に叫んだり医師や家族のところに行くのだが、誰もマイメロの魂が近くにいることが分からないでいた。
マイメロもどうしていいか分からず、家族を見ていた。
まる一日を過ぎたが、マイメロの状態に変わりはなく、わずか一日でげっそりとなっている家族の前に、医師が再び現れた。
「手を尽くしましたが……」
医師によるとマイメロは亡くなったとしかいえない状況であり、原因も病名も何も分からないという。
家族が病室に入ると、お城にある色んなアイテムも試してみたが、何の変化もない。
マイメロはベッドの上にいた。顔色も変わっていないし、眠っているようにしか見えない。だが、手や体はひんやりとしている。
「ああーーーっ！」
マイメロママは崩れ落ちるように倒れ込み、パパが支えた。そのパパも涙を流し、
「どうしてマイメロがこんなことに……」
「お姉ちゃーーん」
同じく駆けつけた王様やルミちゃん、フラットくんたちがマイメロを囲み、悲嘆にくれた。
病室の前では、マイメロの友達、近所の人たち、バク兄弟も集まっていて、みんな

涙を流している。

マイメロが亡くなったという知らせは歌たちにも届けられた。誰もが信じられない気持ちで、ひたすら涙にくれた。

「マイメロの葬儀は国葬になることが決まったよ」

涙の跡がハッキリと残るフラットくんが伝令に現れ、歌、琴、奏と、美紀、真菜が、そして潤、駆が特別にマリーランドでマイメロの葬儀に参列することになった。クロミとバクは容疑者ということで捕まり、お城の反省室送りが決まった。

抵抗するかと思われたクロミだったが、

「あたいはそんなつもりじゃなかった。いつものようにハリセンで張り倒しただけだったのに……」

「バクもそう思うゾナ」

原因が分からない以上、クロミは自分に嫌疑がかけられるのも仕方ないと観念し、おとなしくマリーランドに戻って行った。

夢野家に一人残った雅彦も、歌たちを見送ったまま呆然としていた。

「なんてことだ……まさか、こんなことがもう一度起きるとは……」

歌たちの母親は歌が子供の頃に亡くなっていた。末っ子の琴はほとんど母親の記憶がないが、歌と奏は覚えていた。あまりにも早い母親の死だった。

「あんなに辛い思いを、再びさせることになってしまった」

雅彦はソファに座り、涙をこらえた。母親が亡くなってから奏は長女ということもあり、歌や琴の母親代わりを務めてきた。三姉妹は母親のいない辛さを、慰め合い、助け合って今までやってきたのだ。

今は三人とも主婦並みの家事が出来るようになり、母親がいないことなど感じさせないほど明るく成長した。時にはケンカもするが、夢ケ丘でも美人姉妹として有名で、もちろん雅彦にとっても自慢の娘たちだ。

「マイメロは夢野家の家族も同然だ」

マイメロが来てからは、事件も起きて、色々心配させられることも増えたが、留守がちで寂しい思いをさせていた娘たちの心の支えでもあったのだ。

雅彦は一人静かにマイメロの冥福を祈った。

歌たちはマリーランドに着くと、マイメロの棺に駈け寄った。

「マイメロ……」

「マイメロー！」

ガラスケースに入ったマイメロは、眠っているとしか見えず、今にも目を開けそうに感

じられ、歌と琴はぼろぼろと泣き出した。その肩を、やはり溢れる涙を堪えきれない奏が抱いていた。

「ほんとうなの？　マイメロ」

「絶対治ると思ったのに……」

美紀と真菜も抱き合って泣き、潤と駆は声もなく立ち尽くした。

『歌ちゃーん、マイメロはそばにいるよー』

マイメロの魂は歌にピッタリとくっついた。

「マイメロ……？」

マイメロの声が聞こえた気がして、歌が顔を上げ周囲を見た。しかし、どこにもその姿はなく、棺の中のマイメロは静かだった。マイメロの魂は今度は美紀と真菜のところに行った。美紀は何も気づかなかったが、真菜は急に寒気を覚えて後ずさった。もともと真菜は可愛いものが生理的に苦手ということもあり、棺に入ったマイメロはともかく、マリーランドの住民からは離れた位置にいた。

『真菜ちゃんなら気づいてくれるかもって思ったのに～～』

真菜がどんどん遠ざかって行ったので、マイメロの魂は諦めて、再び歌のそばに寄って行った。

「どうしたの、歌？」

奏が歌を見た。歌は奏と琴に首を振り、
「マイメロ、遠くに行っちゃったなんて、今でも信じられないよ。私、マイメロのこと絶対に忘れないよ。私たちのこと、ずっと見守っていてね」
歌たちの様子を見ていたマイメロママと家族の泣きはらした目から、再び涙がこぼれた。マリーランドでは子供がこんな形で亡くなることはまずないことで、王様と王妃のルミちゃんも初めての経験だった。
『歌ちゃーん、みんなー。マイメロを助けてーーっ』
マイメロは自分の体に戻ろうと、必死で頑張った。ガラスのケースはすり抜けられるのに、体の中にはどうしても入れないのだ。
やがて、王様により弔辞が読み上げられ、ドリアン大臣を始め、整列するマリーランドの住人と家族、歌たちの前を、ガラスの棺がゆっくりと進んでいった。
『やーーーん！』
「マイメローーっ！」
マイメロの魂が泣きながら自分の棺を追いかけて行く。歌たちも涙をぬぐうことも忘れて、マイメロの棺を追いかけた。
マイメロの棺はお城の広間に入った。そこが最後のお別れの場で、王様と王妃のルミちゃん、大臣や諸侯たちと家族、特別に入ることを許された歌たちだけになった。

「まるで眠っているようですね」
王様が、棺をなでながら言った。
「本当だゾウ。今にも目を開けそうだゾウ」
もちろん、マイメロの魂は自分の体に戻ろうと、奮闘中だった。家族も歌も気づいてくれないと分かった今は、自力で頑張るしかない。すでにお城のアイテムは医師たちが試した後だったので、このまま埋められてしまったら、マイメロにはなす術がなくなってしまうので必死だ。
「マイメロはどこに行っちゃうの？」
琴が不安そうに尋ねると、ルミちゃんが前に来て、
「普通なら埋葬するのですが、マイメロはあまりにも生前と変わりない姿で、とても可哀そうでできません。それで、お城の地下室に安置しようと思っています」
「そこならマイメロの魂も安らかに眠れるゾウ」
王様とルミちゃんに言われ、地面に埋められないと知った家族や歌たちと同様、マイメロの魂もホッとした。だが、ウスラ・バッカの魔力は何としてもマイメロには破れない。せめて誰かの力を借りることが出来ればと、諦めきれないマイメロだった。

マイメロの葬儀が終わった翌朝、歌たちは夢ヶ丘に戻ってきた。
「春になったら、マイメロにお花を摘んであげたいのですが、いいですか？」
歌が尋ねると、ルミちゃんは頷いた。ルミちゃんの目もまだ真っ赤だ。
「春になったらぜひマリーランドに来てください。歌ちゃんとマイメロの絆は、家族と同じように深いものですから」
ルミちゃんは歌の手を取った。その手はお互いに震えていた。奏や美紀、真菜も、二人の姿を見て、また涙が出てくるのだった。
「では、またこちらに来ることもあるだろうが、みんな元気でな」
「私もみなさんのことは忘れませんよ」
王様とルミちゃんは手をつなぎ、気球に乗り込むと、空へと昇っていった。
駆と潤はまだ夢から覚めていないような気持ちで、マリーランドに帰っていく王様とルミちゃんを見送っていた。
雅彦が出て来て、
「大変だったな。疲れただろう。みんなも、今日はとにかく家に帰って休みなさい」
優しく声をかけた。それぞれが数日前とはまるで違う状況に順応できず、体も心も疲れ果てていたのだ。
「歌、琴、家に入りましょう」

奏が二人の肩を抱き、玄関へと歩いて行く。その後姿を見て、
「またも奏に負担をかけてしまったな」
雅彦は寂しそうに呟いた。

潤がマイメロの葬儀から帰って来た翌日の夜は、恵一とセバスチャンがコンサートを終えて戻る予定の日だった。ウスラ・バッカとウノはフランスに戻るまでの休暇を、都内のホテルで過ごすといい、別行動になる。
マリーランドから戻った日は、全員が何もする気になれなかった。そして、翌日になっても気持ちは変わらない。
歌たちにとっても長い一日となった。目が覚めてもマイメロがいなくなったことが信じられず、思わず名前を呼んでみたりして、朝から泣いてしまった。
奏はクリスマスデートをやり直す気もなく、日課にしていたスマホすらチェックもしていない。ただ一日ぼんやりと家事をしながら過ごした。
琴は泣きはらした目をしたまま、部活の素振りを庭で始めたり、リビングで宿題をしたりと、気持ちが落ち着かない様子だった。
歌は駆と外で会ったもののマイメロの思い出話しか出て来ず、お互いしんみりするば

かりだった。駆も出来るだけ歌を励まそうとは思うのだが、いい言葉が浮かばず、歌の話に何度も頷くばかりだった。
姉妹の寂しそうな後ろ姿を見るに堪えない雅彦は、部屋にこもって原稿を書き始めるも文章にならず、コーヒーを淹れても味がまるでしない。経験上、時間が解決してくれると分かってはいるものの、そう簡単ではないということも知っていた。
真菜は気持ちを切り替えるためにもジムに行き、トレーニングをするがすぐに動きが止まってしまい、コーチに怒られてばかりだったし、美紀はマイメロとの思い出をポエムに書こうと思い、ノートを取り出すが、涙でにじんで何度もページを破り捨てた。
潤は今夜帰って来る恵一とセバスチャンには自分から報告をしなければと思い、ぼんやりとギターをつま弾いて憂鬱な気持ちになっていた。その様子を見ていたセバスタンも潤の前では普段通りにしているのだが、元気が出てこない。

恵一たちが何も知らずにコンサートの日程をこなしていた時も、ウノは夢ヶ丘にちょくちょく来ていたので、状況は分かっていた。クロミとバクが予想通り捕まり、マイメロの葬儀まで行われたと知ったウスラ・バッカは、柊家を避けることにしたのだ。
空港で恵一とセバスチャンと別れたウスラ・バッカたちは、例によってホテルのゴージ

ヤスな部屋を取って、荷物を片付けた。ウスラ・バッカはウノにルームサービスのコーヒーを頼むと、ソファに腰かけた。

「予定通りでございますね」

「ああ。ケイイチには済まないと思うが、これも私の野望のためだ」

コンサートで一緒になったウスラ・バッカは、恵一が無口で表情が少ないものの、家族や友人を大切にしていること、ヴァイオリンにかける努力や情熱を知った。

マイメロについてのコメントはほとんど聞かなかったが、長年の知り合いであることは確かであり、さすがのウスラ・バッカも良心が痛んだのだ。

ウノにしてみると、まだまだ甘いところもあるが、とことん厳しくなれないところもウスラ・バッカの良いところだと思うようにしている。しかし、奏に軽くあしらわれ、クリスマスデートの話を聞いたあたりからは、やる気を出してきたようだ。

再び恵一と長く過ごすと、ますます地球征服から遠ざかってしまうと考えたウノにとっては、奏が救世主にさえ思えたくらいだ。

ウスラ・バッカは母星にいても、ちやほやされてばかりだったし、イケメンハイスペックを装備した今も、恵一に一度は人気を奪われたものの、イケメンヴァイオリニストとして人気になったことで、自信を取り戻した。現に日本で開かれたコンサートでは、恵一の人気をしのぐようにも思われた。

そのため、奏に振られたことは相当なダメージだったのだろう。顔には出さないようにしているが、人生経験の長いウノには丸分かりだった。

（奏さん、グッジョブです）

ウノの心境はこんな感じだろうか。

「では、クリスマスも終わったことだし、仕上げに入るとするか」

奏など手に入らなくても、母星に帰ればモテモテのウスラ・バッカなのだ。ウノはその辺をうまく強調した。とっとと全部終わらせたかったのだ。

夜になり、柊家に戻った恵一とセバスチャンは、真っ先に出てきたセバスタンの様子がいつもと違うことに気づいた。家の中が妙に暗い感じがして、

「潤、どうした？　セバスタンまで元気がなさそうだが」

リビングでアコースティックギターをつま弾いていた潤を不思議そうな目で見ると、尋ねた。

「兄貴、お帰り……」

実は、と、潤はマイメロが亡くなったいきさつを話した。

「なんだって、それは本当なのか！」

恵一とセバスチャンは驚いた。
「なぜ、私に言ってくれなかったのだ」
恵一は潤に、セバスチャンはセバスタンに迫ったが、二人が悲痛な顔で、コンサートに影響が出てはいけないと思い、苦渋の判断をしたと伝えると、
「そうだったのか……」
「葬儀は国葬になったんだ。俺もみんなと一緒に出たんだけど、マイメロはまるで生きているみたいでさ……俺、今でも信じられないよ……」
見れば潤の目は泣きはらした跡がくっきりと分かり、恵一に説明しながらも涙が溢れだしていた。
「辛かっただろう。責めてしまって済まなかった……」
恵一は潤の肩に手を置いて言うと、
「すまないが、私も疲れが出たようだ。休ませてもらうよ。潤も今夜はゆっくり休むといい」
そういうと立ち上がり、自分の部屋に向かった。セバスチャンは恵一の荷物を持つと、先に立って歩いた。その肩もガックリとうなだれていた。そして、恵一のダメージは自分で想像したよりも大きかった。

お城でも葬儀の翌日はまだ、王様を始めみんながぼんやりと過ごしていた。捕まえてはみたものの、クロミがそれほどのことをするとは思えず、大臣たちも途方に暮れていた。

しかも、クロミは自分じゃないと否定するだけで、おとなしく捕まったままで抵抗はしなかった。お城の反省室に入れると言われても静かに従っていて、連れて行く方が気が咎めるくらいだった。

反省室では二人ともずっと黙っていた。

「ハリセンを使ったのはやり過ぎだったと思うかい？」

沈黙を破り、独り言のようにバクに尋ねるクロミに、

「バクはいつも張り倒されているけど、何ともないゾナ」

「お前は丈夫だから、参考にならないんだよ！」

思わずハリセンで張り倒そうとして、その手を止め、ハリセンをまじまじと見た。

「クロミ様……」

「なんでこんなものでマイメロが死んじまったんだ？」

自分の左腕を手加減なしで、ハリセンで叩いた。

「いてっ！」

「クロミ様、何をするゾナ?」
クロミは自分の左腕を振った。痛いと瞬間感じたことは確かだが、思ったよりもダメージが少ない。
「こんなもので……打ち所が悪かったのかもな……」
ハリセンを後ろに放り投げ、クロミは突っ伏した。
「マイメローーーっ! なんで死んじまったんだよーーっ!」
「ク、クロミ様」
バクの目からも涙が出てきた。
「ぜってー、信じないからなーーっ! ここから出たら、お前の棺を壊してやる!」
クロミは大泣きした。あれほど嫌っていたマイメロだったが、嫌いは好きの裏返しみたいなものだと気づいた。
「クロミノートにこれから、何て書けばいいんだよーーっ!」
クロミノートとは、クロミが小さい頃よりつけていた日記のようなもので、マイメロによって心をズタズタされたエピソードが書きつづられていた。エピソードにはナンバリングが打ってあり、その数は二万を優に超えていた。
バクも、クロミがこんなに泣くとは考えていなかった。見ていて思わずもらい泣きをしてしまった。

マイメロの天然さにイライラさせられていたクロミだったが、それもこれからはなくなってしまうと考えると、クロミは怒りと悲しみをどこにぶつけたらいいのか分からなくなっていた。

「くっそーーっ、マイメローーっ！」

クロミの叫びは地下室にいたマイメロの魂にも届いた。

『クロミ……ちゃん？』

マイメロは諦めずに自分の棺のそばにいたのだ。叫び声がクロミのものだと分かると、マイメロは声のする方に進んで行った。

いくつかの扉や壁をマイメロの魂がすり抜けて行く。やがて、クロミのいる部屋に到達すると、

『クロミちゃ～～ん！』

マイメロはクロミに抱きついた。抱きついたつもりだったが、歌たちの時と同じように、クロミの体をスカスカっとすり抜けてしまった。

『クロミちゃん、マイメロここだよ～～ここにいるよ！』

クロミの周りをクルクルと回り始めたが、

「ぞわ～～～っ！　んんん？　なんかこの部屋寒くないか？」

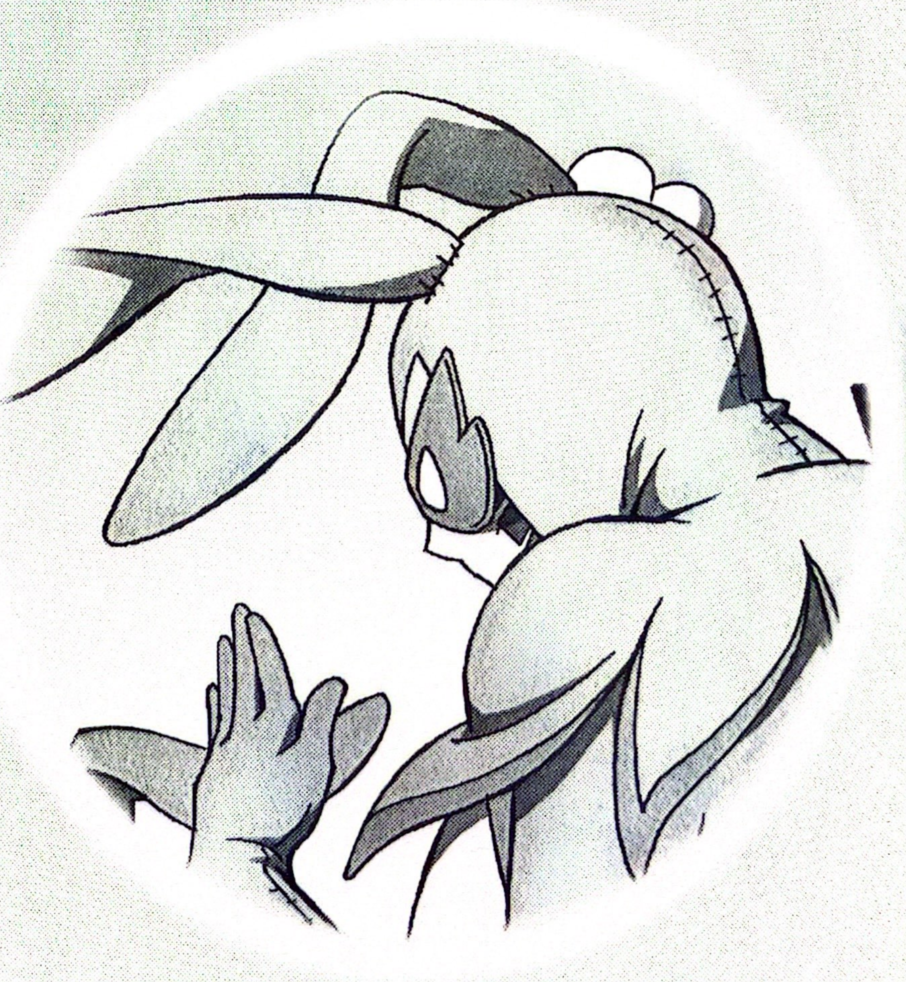
まだ泣き声だったが、クロミが体をブルッと震わせた。マイメロが必死にアピールする

が、その声はクロミには届かなかった。

それから、一週間後、再度クロミは王立警察で取り調べを受けた。
ハリセンを細部まで分析したが、とても凶器になるとは思えない。
王立病院の医師団も、マイメロの死因は頭の打撲ではないと結論づけた。
最後に、嘘発見器にもかけられたが、クロミは嘘をついていない事が判明した。
そして、マリーランドの法廷が下した判決は、クロミは無罪だった。
クロミとバクは、城の反省部屋から出され、釈放された。
その間、魂となったマイメロは、クロミたちの周りをふわふわ漂っていた。
「マリーランドにいても、まだクロミ様の無罪を信じていない者もいるゾナ。みんなの悲しみが消えるまで、また柊様のところに厄介になるゾナ」
「…………」
クロミは無言で頷いたので、バクは背中に乗せて、上空に舞い上がった。
『クロミちゃん、バクくん、待って〜〜』
魂となったマイメロがバクに掴まろうとしたが、間に合わなかった。
やむなく、マイメロは自力で上空に浮かぶホルンまで飛んでいくことにした。

クロミとバクが柊家に到着して、恵一や潤と正月の挨拶を済ませ、また屋敷に住まわせてもらえる許可を得た時、ウスラ・バッカとウノが戻ってきた。
ウスラ・バッカは都内の一流ホテル暮らしも飽きてしまい、日本の正月気分を味わいたいと思い、柊恵一に無理に頼み、舞い戻ってきたのだ。
まあ、それは表向きで、やはりウサミミ仮面を捜すには、夢ヶ丘にいた方が便利だったからだ。
初めは渋ったウノだったが、正月は都内の繁華街も閑散としていて、レストランも休みのところが多かったし、ホテルでワインとテレビ三昧のウスラ・バッカと違い、寒風の中、わざわざ夢ヶ丘まで来て、ウサミミ仮面の情報を集めるのもバカバカしくなっていた。
「ウスラ・バッカ様の我がままを聞いて頂き、恐縮至極でございます」
と、セバスチャン、セバスタンに頭を下げていると、ウスラ・バッカは手土産に持って来た一本百万円以上はするワインの栓を抜き、恵一と正月の祝杯をあげていた。
ウノは小さなため息をつくと、執事二人に手伝ってもらい、荷物を先日まで住んでいた二階の客室まで運んで行った。

# 第五章(だいごしょう)　ウサミミ仮面(かめん)に会(あ)えたらイイナ！



正月休みも終わり、ようやくおとそ気分も抜け、夢ヶ丘の街にも住民たちにも普通の日々が戻ってきた。

会社も学校も始まり、通勤通学する人々が通りを忙しそうに歩いている。

柊家の客室の窓からそんな光景を見ていたウノが振り返り、ベッドで朝食を食べるウスラ・バッカ王子に向かって言った。

「あまりにも簡単に行き過ぎましたからなあ」

ウノは地球征服のキーパーソンであるマイメロを葬ったことを言ったつもりだったが、ウスラ・バッカはそれには答えず、黙々と柊家特製の野菜スープを飲んでいる。

柊家での生活は、ウスラ・バッカにしてもウノにしても、パリや東京の一流ホテルのスウィートルーム暮らしと変わらない快適なものだった。いや、恵一と潤の執事であるセバスチャン、セバスタン兄弟がいるお陰で、自分は何もしなくていいので、ウノにとっては天国と言っていいだろう。

あの兄弟は、執事中の執事だとウノは思うのだが、自分が二人のようになろうとは微塵も思わない。こっちはもうすぐ年金暮らしが待っているし、地球征服が終われば、莫大な特別報奨金も期待出来る。

「あとは、ウサミミ仮面さえ葬り去れば……」

ウノは心の中で呟いたつもりだったが、どうやら声に出していたらしく、スープを飲み

終えたウスラ・バッカが、スプーンを空になったスープ皿に投げ込み、乾いた音がした。
ウノは驚き、ウスラ・バッカを見ると、怒りに肩を小刻みに震わせていた。
先程から黙っていたのは、ウサミミ仮面の行方が未だ分からないことに、ウスラ・バッカが怒っているせいに違いない。ウノはうろたえ、とりあえず、
「申し訳ございません」
深々と頭を下げたのだが、ウスラ・バッカが驚きの表情を浮かべて言った。
「何を謝っているんだ？」
「あ、いや、その……王子の機嫌がお悪いのは……」
「ああ、そうさ。ミス・カナデは、どうして私の誘いに乗って来ないのだ？」
「はあ？」
ウノは脱力した。ゆとりが～～っ！　喉元まで出かかった言葉をグッと呑み込んだ。
「パリでは百発百中女はなびいてきたのに……私のどこが気に入らないのだ⁉　金があり、恵一よりイケメンなのに……」
まだあんな小娘の尻を追いかけていたのか！　ウノは怒りを抑えながら、王子の朝食を片付け、部屋を出て行こうとした時、背後から声がした。
「まだウサミミ仮面は見つからないのか？」
「えっ⁉」

ウノは思わず朝食のトレイを落としそうになったが、何とか踏みとどまった。ちゃんと私の話を聞いていたんじゃないか。新たな怒りがこみ上げてきたが、これもグッと堪えて、

「ただいま捜索中でございまして……」

「ここでの生活も飽きてきた。とっととウサミミ仮面を始末して、ニューヨークへ行こう」

「な、な、何ですと⁉」

ウノは慌てて振り返った。

「ウサミミ仮面を倒した後は、ウラノス帝王に報告に帰られるのではないのですか？」

「私はこの星が気に入ったのだ。まあ、お前が帰りたいと言うのであれば、代わりの執事と交代してもいいがな」

「ぜひ、そうして頂けると……故郷で待っております妻も喜ぶと思います」

ウノは額に浮かんだ汗を手でぬぐいながら言った。

「ほう。お前がそんな愛妻家だったとは知らなかった。まあ、考えておくよ」

ウノは安堵して、小さく吐息すると、一礼して部屋を出て行った。

ウノが厨房まで朝食のトレイを持って行くと、セバスチャン、セバスタン兄弟が隅のテーブルで朝食を食べていた。
「これはウノ様、ご苦労様です。どうですか、ご一緒に？」
「有難うございます。では、お言葉に甘えて」
ウノはトレイを柊家の料理人の一人に渡すと、テーブルに着いた。
三人は食事の間、他愛のない雑談に終始した。執事中の執事、ザ・キング・オブ執事の兄弟はそれぞれの主人について何一つ話題にしない。
だが、セバスチャンが潤について注意や注文を付けるとすぐさまセバスタンが鬼の形相で反論した。その逆に、セバスタンが恵一の悪口を言おうものならセバスチャンはテーブルをひっくり返す勢いで反撃した。
「まあまあお二人とも。せっかくの朝食がまずくなりますぞ」
ウノが諌めると、兄弟は、さすがに反省したのか何事もなかったかのように食事を進めた。ところが、ウノが二人に向かって、
「この街にはウサミミ仮面という強い力を持った人物がいるという噂を聞いたのですが、一体どこにいるのでしょう？」
と尋ねると、セバスチャンは食べるのをやめて、
「ああ、恵一坊ちゃまの追加コンサートの衣装を用意しなければなりません」

そそくさと自分の食器を持って流しに置くと、厨房を出て行ってしまった。
その姿をウノは不審げに見ながらセバスタンに尋ねた。
「私、何か失礼なことを申しましたか？」
セバスタンが意味深な笑みを浮かべると、小声で言った。
「恵一坊ちゃんと兄の前でウサミミ仮面の話はやめた方が良いですぞ」
「と、申しますと？」
ウノも声を小さくして尋ねた。
「いやいや、これ以上話すと兄に何を言われるか。それじゃあ私もこの辺で」
セバスタンは食べ終わった食器を流しに持っていき、出て行った。
一人きりになったウノは、先日も感じたように、恵一とセバスチャンはウサミミ仮面に対して何か悪い印象、いや憎悪さえ持っているのではないかと推測したが、それ以上先に進めないことが分かり、考えるのを止めた。
食事を済ませたウノは、クロミとバクの部屋を訪ねてウサミミ仮面の情報を得ようとした。ちょうどバクが朝刊配達のアルバイトから帰って来て、部屋に入ろうとしたところだった。
「バク様、ちょっと伺いたい事があるのですが」
「何ゾナ？」

バクが振り返った時、いきなりクロミが、
「遅いよバク！　とっとと朝食を作りな！」
ハリセンでバクの頭を叩き怒鳴りつける。
「分かったゾナ！　すぐに作るゾナ！」
バクが頭を摩りながら厨房へ向かった。
「バク様、クロミ様は随分とご機嫌斜めみたいですが……」
厨房に着くまでの間、バクは小声で話した。
「マイメロが死んだせいゾナ……クロミ様はマイメロの悪口をクロミノートに書くことが生き甲斐だったゾナ。マイメロがいなくなった今、生き甲斐がなくなり、バクに当たり散らしているゾナ」
「なるほど……ところでバク様。バク様はウサミミ仮面をご存知でしょうか？」
「知ってるも何もウサミミ仮面とは、ある時は仲間、ある時は敵としてよく戦ったものゾナ」
「おお、そうですか！　で、ウサミミ仮面は今どちらに？」
「ウサミミ仮面はもう二度と現れないゾナ」
「え、それはどういう事でございますか？」
ウノが上着のポケットに手を突っ込み、小銭を掴んで尋ねようとすると、

「そんな事話してる暇はないゾナー　早く朝ご飯を作らないとクロミ様にもっと張り倒されるゾナ！」

そう言い捨て、バクは厨房へ駆け去ってしまった。

ウノは小さなため息をつくと、夢野歌を訪ねることにした。

ウノはスウィーツショップでイチゴのショートケーキを買い、夢野家を訪ねた。

呼び鈴を押すと、父親の夢野雅彦が出てきた。

マイメロの葬式以来、歌はふさぎ込んで寝込んでおり、学校が始まっても休んでいることを雅彦から聞き、ウノはケーキを渡して帰るしかなかった。

柊家に帰る途中、数人の通行人にもウサミミ仮面について尋ねたが、何の手がかりも得ることが出来なかった。

すべてが徒労に終わり、ウノは柊家の客間まで戻ってきた。

ウスラ・バッカはパソコンの画面を見ながら笑っていた。

「王子、何か面白い記事でも見つけたのでございますか？」

ウスラ・バッカはそれには答えず、

「『鳴かぬなら、鳴かせてみようホトトギス』だよ、ウノ」

「なんのことでございますか？」
ウノが尋ねると、ウスラ・バッカは手招きして、パソコンの画面の画面を見せる。
それはＹｅａｈＴｕｂｅのウサミミ仮面の登場シーンだった。派手な音楽が流れ、シツジ仮面が運転するウサミミカーに乗ったウサミミ仮面が登場し、やる気のない口上を言うものであった。
「これがウサミミ仮面⁉　まさかこんなものがネットにアップされているとは……」
ウサミミ仮面のあまりのダサさとやる気のなさにウノは脱力した。
「マイメロの時もそうだったが、こんな人物が地球征服のキーパーソンの一人だったとは……」
ウノはバカらしさを通り越して怒りさえこみ上げてきた。
その時、ウスラ・バッカが言った。
「このウサミミ仮面のコスチュームと車を調達してこい」
「コスチュームはなんとかなると思いますが、このような車は……」
「金ならいくらでも出す。明日までに頼んだぞ」
ウスラ・バッカの表情が厳しく、とてもノーと言える状況ではなかった。
「かしこまりました」
ウノはそう言って一礼すると、まずは銀行に行き、現金で一億円を用意した。そして、

夢ヶ丘中の自動車修理工場や洋服屋を訪ね回り、金に物を言わせて翌日までにウサミミカーとウサミミ仮面のコスチュームを調達することに成功した。

そんなことになっているとは知らず、夢ヶ丘に戻ってきていたマイメロは、魂のままふわふわ漂いながら歌の家にいた。

マリーランドのマイメロの葬式から帰って来てから、歌はふさぎ込んだままでほとんど家から出られない状態が続いていた。

マイメロは自分は死んではおらず魂になっているだけだと、歌や家族に知らせたいのだけれど、体は無色透明の上、声はいくら出して聞こえないし、最大限の力を発揮して、歌の髪の毛を引っ張るのだが、あまりに微力で歌には風のせいくらいにしか感じられないのだ。

一度、歌が風呂に入っている時、曇った鏡に自分の顔をくっつけて、顔型の跡を作ったことがあったのだが、

「ああ、マイメロの顔に見える……もう私ったら……」

歌はマイメロの顔型を掻き消し、泣きだしてしまった。

琴や奏が風呂に入った時も試してみたが、琴には気づかれずお湯であっさり消され、

奏には気味悪がられ、お経を唱えられる始末。
やむなく、マイメロは夢野家を離れて、美紀の家に行ったのだが、美紀はピアノちゃんとマイメロの追悼ポエムの制作に没頭しており、相変わらずの意味不明のポエムに、頭がクラクラになり、すぐに脱出した。
次に真菜の家に行き、真菜に必死で訴えかけたが、
「あかん。体がゾクゾクしてきたわ。風邪かもしれん」
真菜は頭から布団を被り、出て来なくなった。
またしても失敗したマイメロは、また歌の家に戻り、ベッドで眠っている歌の胸の上で眠った。
と、そこへ、駆から歌の様子を見てきてくれと頼まれたフラットくんがやって来た。
歌は目覚めると、フラットくんに言った。
「フラットくん、見舞いにきてくれたんだ。ありがとう。今ね、マイメロを抱いている夢を見ていたの……ずうっと夢を見ていられたら……」
マイメロの魂は懸命に叫んだ。
『歌ちゃん、マイメロはさっきから歌ちゃんの胸の上にいたんだよ～。夢なんかじゃないよ～』
でも、歌の耳にその必死な声は届かない。

「歌ちゃん、歌ちゃんの気持ちはよく分かるけど、歌ちゃんがしっかりしてないとマイメロは成仏できないよ」

フラットくんが歌の手を握って励ました。

『だから！　フラットくん、マイメロは死んでないの〜。成仏なんてしてなくて、ここにいるの〜』

マイメロの魂は泣きながら訴えたが、やはりフラットくんの耳には、その声は届かなかった。

だが、マイメロが泣いたお蔭で、その涙がベッドのシーツにじわっと染み込んだ。

「あれ？　どうして濡れてるのかしら？」

歌が涙の跡に指で触れた。

マイメロは泣くのを止め、二人に注目した。

フラットくんは自分の額のあたりに右手を当てると、

「急いでやって来たからきっと僕の汗が垂れたのかも」

『フラットく〜〜ん』

マイメロはずっこけた。

「とにかく歌ちゃん、この悲しみを乗り越えて強く生きて行ってよね。今のセリフは駆の言葉だと思ってさ」

「ありがとうフラットくん。そういえば駆から何度もメールがあったの忘れてた。これから返事を送るわ」

「それがいいよ。駆もものすごく心配してたから」

そう言うとフラットくんは傘を差して窓から舞い上がって行った。

マイメロはひょっとしたら駆なら気づいてくれるかもしれないと思い、フラットくんの後を追った。

その晩、マイメロは都内にある駆の高校の寮にいた。

駆の部屋に戻ったフラットくんは見てきた歌の様子を話し、駆も歌からメールの返信があったことを話した。

「あの様子だと歌ちゃんが元気になるまでもう少しかかりそうだよ」

「そうだよな。歌にとってマイメロは最高のドリームパートナーだったんだもんな……」

駆が大きなため息をついて言った。

『だった、じゃないよ駆くん～。今だって歌ちゃんとはドリームパートナーだもん』

と、訴えてみたところで二人には聞こえないのがマイメロは悲しかった。

しかし、マイメロはいつまでも悲しんでいるわけにはいかない。なんとしても自分の存

在を二人に知らせなくてはならない。
『何をすればいいの……』
部屋を見回したところ、男子高校生の部屋らしく色んなものが散らかっていた。
『そうだ、マイメロが片付けてあげれば二人が気づくかも』
マイメロは二人が眠った後、部屋の掃除を始めたのだが、やはり微力なために紙くずを五〇センチ動かすのがやっとだった。
そればかりか歌の部屋ではまったく感じられなかった男臭さが気になり始め、とても長居は出来ないと思い、窓ガラスをすり抜けて出ていくしかなかった。

修理工場のガレージで出来上がったウサミミカーを見たウスラ・バッカは満足そうに微笑んだ。
「これなら誰もが本物だと思うだろう」
それは違う！　とウノは心の中で思った。形は似てるが、一晩で仕上げたものであるから、ボディにはあちこちつぎはぎがあるし、塗装もいい加減であった。
しかし本当のことを言えばウスラ・バッカの怒りを買い、何をされるか分からない。
それに、徹夜でクタクタになっている修理工場の社長や従業員にこれ以上仕事をさ

せるわけにはいかないので、前の日に払った半金の他に、完成した時に渡すことになっていた残りの半金を渡した。
社長と従業員は大喜びで受け取った金を持ってガレージから出ていった。
「王子、この車とコスチュームで何をしようとしているのですか？」
「昨日も言っただろう？『鳴かぬなら鳴かせて見せようホトトギス』と。私たちが偽のウサミミ仮面とシツジ仮面となって暴れ回れば、本物のウサミミ仮面が現れるだろう」
「なるほど。それは名案でございますな」
いつも王子のことをゆとり野郎と陰口を叩いていたことをウノはちょっぴり反省した。

その日のうちに、『鳴かぬなら鳴かせて見せようホトトギス』作戦は実行された。
ウスラ・バッカがYeahTubeからダウンロードしたウサミミ仮面のテーマソングを流しながら、シツジ仮面に変装したウノが運転するウサミミカーは夢ヶ丘を疾走し、人が集まっている所へ到着すると、車の後部席に乗っている、ウスラ・バッカが変装しているウサミミ仮面がカッコよく飛び降りた。
「聞こえる聞こえる、愛に悩む人々の叫びが。悪に苦しむ人々の嘆きが。だってウサギの耳は長いんだもん。愛と正義の使者、ウサミミ仮面、参上」

ウスラ・バッカはすらすらと口上を述べ、オリジナルの決めポーズまでとった。
ウノは仕方なく、
「シツジ仮面もよろしく」
と、口上が書いてあるプラカードを群衆に向かって見せた。
偽ウサミミ仮面はあっけにとられて見ている群衆の中にソフトクリームを持っている五歳くらいの女の子を発見すると、素早く近寄った。
そして、ソフトクリームを奪うと一気に食べた。女の子は猛然と泣きだした。偽ウサミミ仮面は高笑いをすると、すぐにウサミミカーに飛び乗り偽シツジ仮面と共に走り去った。
走るウサミミカーの中で、ウノはサイドミラーに映るウスラ・バッカを見ながら言った。
「王子、なかなかの演技でございましたな」
「フフフフ……まだまだこれからさ。もっと悪さをしてウサミミ仮面が悪に転んだことをアピールしてやる。そうすれば怒った本物のウサミミ仮面は必ず私の前に現れる」
ウスラ・バッカがどんな悪さを働くかと思うとウノは少し怖気づいた。しかし、すぐに自分の杞憂が無駄であることに気づく。
ウスラ・バッカはカラオケ店に突入して、マイクを奪って歌い倒したり、交差点の真

ん中に車を止め口上を述べながら新たな決めポーズをとり渋滞を巻きおこしたり、女子高校生のスカートをめくったりするぐらいが関の山だったのだ。
二人は悪行を重ねているうちに、見ている人たちの反応がイマイチなのに気づき始めた。初めは、
「ウサミミ仮面がこんなことをするなんて」
「ウサミミ仮面、どうしちゃったんだよ」
などという声も聞こえて来たが、悪行を重ねていくうちに、
「帰れ帰れ偽者！」
「お前は絶対バッタモンだ！」
という罵声に変わってきた。
ウサミミカーを作ってもらった修理工場のガレージに戻り車を停めると、ウスラ・バッカはムスッとして、
「なぜすぐに偽者だと分かったんだ！　口上も覚えて完璧に言ったのに！」
その時、ウノは昨日見たＹｅａｈＴｕｂｅの映像を思い返して、ハッとなった。
「完璧すぎたのでございます、王子！」
「どういうことだ？」
ウスラ・バッカはウサミミ仮面のコスチュームを脱ぎ、後部座席に投げ込むと、私服に

着替えながら尋ねた。
「ウサミミ仮面はもっとやる気がなくて、口上も棒読みだったような……」
「うーむ……そういえばそうだったな」
「それに口上の後の決めポーズもカッコ良すぎたような気がいたします」
「なるほど……部屋に戻って研究し直した方が良さそうだな」
ウスラ・バッカは着替え終えるとさっさとガレージから出ていった。
「お、お待ちを！」
ウノは慌ててシツジ仮面のコスチュームから執事服へ着替え、後を追った。

二人が柊家に戻ると既に夕食の支度が整えられており、ダイニングルームにはウスラ・バッカたちが知らない人物が恵一と談笑していた。
恵一は今日もコンサートが上手く行ったのか、上機嫌であった。
恵一は立ち上がると、ウスラ・バッカを見ながらその人物とウスラ・バッカを交互に見ながら言った。
「永代橋先生、こちらがさっき話したウスラ・バッカさんです」
「ああ、そうだったのラララ」

永代橋は立ち上がり、
「初めまして、私は柊くんの才能を見出した永代橋文也と申します。お見知りおきをララ」
握手を求めて来たのでウスラ・バッカは作り笑いを浮かべ、握手した。
「こちらこそ」
小太りのこの男からは何も得ることはないと思ったウスラ・バッカはコピーもせずに手を離した。
すぐにセバスチャンがウスラ・バッカのために永代橋の向かい側の席に案内した。
「すぐにお食事の用意を致します」
ウスラ・バッカは黙礼して椅子に座った。
「私もお手伝いします」
ウノは部屋を出ていくセバスチャンの後に続いた。
三人の執事により、すぐに料理が運ばれてきた。前菜のサラダとローストビーフだ。
永代橋は料理に舌鼓を打ちながら今日のコンサートでの恵一の演奏の素晴らしさを褒めちぎった後に、
「先ほど柊くんから聞いたのですが、あなたのヴァイオリンの腕も相当だと聞きましたララ。食事が済みましたら私にも聴かせて欲しいファファファ」

面倒臭いやつだとウスラ・バッカは内心思ったが、愛想笑いを浮かべて頷いた。
その時、潤が部屋に入ってきた。
潤は三人からは離れた一番奥の席にドカッと座ると、いたずらっぽい笑みを浮かべながら言った。
「兄貴、聞いたか？　夢ヶ丘に偽者のウサミミ仮面が現れたらしいぜ」
「何？」
恵一の表情が急変し、潤を睨みつけた。
「それが笑っちまうんだよ～。例の口上をスラスラ言って本物よりずっとカッコイイ決めポーズをとったらしいぜ！　ホント見たかったぜ～」
恵一の右の眉毛がピクリと動いた次の瞬間だった。
「僕の前でウサミミ仮面の話をするな！」
ちゃぶ台返しならぬ、巨大なダイニングテーブル返しを潤に向かってした。潤は素早く逃げて、下敷きにはならずに済んだが、食べかけの料理や食器は台無しになった。
ウスラ・バッカはナイフとフォークを持ったまま椅子に座り、唖然として事の成り行きを見守っている。
恵一はムスッとしたまま出ていき、慌てて永代橋が後を追った。
よくある光景なので控えていたセバスチャン、セバスタンはテーブルを元に戻し、床に

飛び散った料理や割れた食器を拾い始めた。
「つたく兄貴にも困ったもんだぜ。セバスタン、部屋で食べるから持ってきてくれ」
潤は苦笑いしながら部屋から出ていった。
片付けを手伝っていたウノに、セバスチャンが申し訳なさそうに言った。
「ビックリなさったと思いますが、気になさらずに。食事の方は後で用意させますから、どうかウスラ・バッカ様とお部屋の方に」
ウノは頷き、まだ呆気にとられているウスラ・バッカに歩み寄り、ナイフとフォークを取り、セバスチャンに渡した。
「ウスラ・バッカ様、行きましょう」
ウノはウスラ・バッカを連れて客室へ向かった。

客室に戻ったウスラ・バッカは運ばれてきた夕食を食べながらウサミミ仮面の登場シーンをYeahTubeで繰り返し見ながら、自分の誤りを確認していた。
「このやる気のなさはなかなか難しいな」
ウノもプラカードを出すタイミングが実際やったのよりも早い事に気づいた。
「さり気なくウサミミ仮面の前に出るあたりは練習しませんと……」

それから二人でＹｅａｈＴｕｂｅを見ながら練習を繰り返した。
ようやく二人が納得したところで、ウノが食べ終わったウスラ・バッカの夕食の食器を持って厨房へ運んで行った。
すると、厨房の中からセバスチャンとセバスタンの声が聞こえて来た。
ウノは入るのを止め、聞き耳を立てた。
「私も噂で聞きましたが、ウサミミ仮面だけでなく、シツジ仮面の偽者まで現れるとは」
「偽者のウサミミ仮面はなぜ夢ヶ丘に現れたんでしょう」
「そんな事知るわけがありません。噂によれば困っている人を助けるどころか悪行の数々を重ねているらしいのだ」
「兄さん、まあまあ興奮せずに」
「これが興奮せずにいられるものか！　本物のウサミミ仮面が現れればそんな偽者すぐにやっつけてしまえるのに」
「兄さん、それは無理というものだよ。ウサミミ仮面はマイメロがメロディ・タクトを使い、くるくるシャッフルして呼び出してくれない限り、登場出来ないのだから」
「な、なんでマイメロ様は天国へ行ってしまったのだ〜！」
最後はセバスチャンの泣き声まで聞こえてきた。
ウノは、運んできた食器をその場に置くと、足音を忍ばせ客室へ急いだ。

「王子、本物のウサミミ仮面を呼び出す方法が分かりました」
客室に飛び込んでくるなりウノはそう叫んだ。
驚きの表情を浮かべるウスラ・バッカに、ウノは今聞いてきたセバスチャン、セバスタンの会話を話した。
「なるほど……マイメロしかウサミミ仮面を呼び出すことが出来ないとはな」
ウスラ・バッカが呟くように言い、腕組みをすると次なる作戦を考え始めた。
「マイメロしか呼び出せないとなると、マイメロを生き返らせるしか方法はないのでは」
ウノが進言すると、ウスラ・バッカが首を横に振った。
「魂となったマイメロを捜し出すのも面倒くさい。ここは、またあいつを利用するとするか」
「あいつ……？」
ウノはハッとなり、
「クロミでございますか？」
ウスラ・バッカがニヤリと頷いた。

その頃、マイメロの魂はようやく夢ヶ丘に舞い戻っていた。

夢野家に戻って、自分が生きてることを人間に訴えても無駄だと悟ったマイメロの魂は、一番の親友だと思っているクロミなら気づいてくれるかもと思い、柊家を目指していた。

柊家に到着すると、動物の勘なのだろう、庭に放たれていた番犬のドーベルマンに吠えたてられた。

池からワニの地獄のみっちゃんや横須賀のよっちゃんが這い出てきて、大きな口を開きながら唸り声を上げた。

そのたびに、

『や〜〜ん』

と言いながら逃げ出すマイメロの魂であった。

その騒ぎにセバスチャンやセバスタンが家の中から出てきて警戒の目を光らせたが、怪しい侵入者の姿を見つけることはなく、屋敷内に戻って行った。

マイメロの魂はセバスチャンの背中に貼りつくようにしてなんなく侵入した。

マイメロの魂がセバスチャンの背中から離れ、屋敷の向かいにあるクロミの部屋にフワフワと飛んで行くと、ちょうどウスラ・バッカとウノがクロミの部屋を訪ねるところだった。
『あの人、どっかで見たような……ああ、先輩さんのパーティーでヴァイオリンを弾いていた人だ』
バクに迎え入れられて入って行くウスラ・バッカに続いて、マイメロの魂も入って行った。
「ええ？　あたいに用があるんだって？　面倒臭い事ならお断りだよ」
クロミが不機嫌そうに言うと、ウスラ・バッカは笑みを浮かべた。
「マイメロがいないことが相当こたえているようだな」
「誰があんなやつのこと……悲しいもんか！　悲しくなんてないやい！」
そう言いながらもクロミの目には涙が浮かんでいた。
『クロミちゃん、やっぱりクロミちゃんはマイメロの親友だよね。こんなに悲しんでくれてるなんて』
マイメロはすり抜けないようにクロミに接近し、ほっぺをスリスリした。
「ぞわ〜〜〜〜っ。なんか悪寒が……風邪でも引いたのかな」
「そうゾナか？」

バクはすぐにクロミの額に手を当てたが、
「別に熱はないゾナ」
「そうか……」
クロミはマイメロの魂が自分の顔に貼りついていることも知らず、ウスラ・バッカを見て、
「で、あたいに何の用だい？」
「君の元気の源がクロミノートだという事は昨日バクくんから聞いたよ」
「バク、余計なことを言うんじゃないよ！」
すぐさまクロミがハリセンでバクをひっぱたいた。
バクは壁に激突し、悲鳴を上げた。
「ウノさん、余計なことを話さないでほしいゾナ〜〜」
バクが恨めしそうにウノを見て言った。
「申し訳ございません」
ウノは深々と頭を下げると、手を貸してバクを起こした。
そんな二人のやり取りを見ながらウスラ・バッカは言った。
「やはり君は元気な方が素敵だね」
「な、なんだよ急に」

クロミが少し照れながらウスラ・バッカを見た。
『マイメロもそう思う』
と、マイメロの魂も同意したが誰もそれには気づかない。
「私が思うに、マイメロの体が君のそばにあったらクロミノートをすぐに書けるんじゃないかと思ってね」
クロミの表情が一変した。
「そりゃそうだよ！　にっくきマイメロがそばにいれば昔の嫌なこともいっぱい思い出せるからね！」
だが、バクがすぐに首を横に振った。
「マイメロはマリーランドの城の地下に埋葬されてるゾナ。とても近づくことは出来ないゾナ」
「いや、私なら簡単にマイメロの体をこっちまで持って来ることが出来ます」
ウノが自信満々に言い放った。
あまりの展開にマイメロは驚いたままだった。
「どうやって持って来るゾナ」
「それにはまず私かウノのどちらかをマリーランドに連れて行ってもらわないと」
ウスラ・バッカが言うと、すぐにバクが片手を挙げ、

「それなら簡単ゾナ。バクが連れて行ってやるゾナ」
そう言ってウスラ・バッカに背中を向ける。
ウスラ・バッカがウノを見た。ウノは頷き、
「王子の手を煩わさずとも私が行って参ります」
「頼んだぞ、ウノ」
ウスラ・バッカの言葉に頷き、バクの背中にウノが乗った。
『マイメロもマイメロの体に会いた～い。ひょっとしたら中に入れるかも』
マイメロの魂もバクの尻尾につかまろうとした。
「なんかお尻のあたりがこそばゆいゾナ」
そう言うと、バクはオナラをした。
『や～～～ん』
マイメロは悶絶して床に落ちた。
「じゃあ行ってくるゾナ！」
ウノを乗せたバクは窓から飛び去って行った。
マイメロは目を回しながら見送るしかなかった。

二人が去ってから一時間もしないうちに、
「ただいまゾナ〜」
と、ウノを背中に乗せたバクが戻ってきた。
バクはウノを下ろすと待っていたクロミたちに興奮しながら言った。
「ウノさんはすごい魔術師ゾナ。お城の兵隊たちを一瞬のうちに眠らせてしまったゾナ」
「いやいや大したことはございません」
ウノは恐縮しながら言ったが、内心では、あんな弱小兵士たちなどウラノス帝国の子供でも簡単に始末出来るだろうと思った。
ウノの腕にはぬいぐるみ状態のマイメロが抱かれている。
『わ〜マイメロだ〜。入っちゃお』
魂のままのマイメロが入り込もうとしたが、
『や〜〜〜ん』
やはりウスラ・バッカがかけたバリアに弾き飛ばされた。
ウスラ・バッカはウノからぬいぐるみ状態のマイメロを受け取り、クロミの前に置いた。
「どうだい？　これならクロミノートを書けるんじゃないか」

クロミは目を閉じたままのマイメロを見たが、イマイチ乗り気ではない。

「目が開いてないとマイメロって気がしないんだけど……」

「ならば……」

ウスラ・バッカが指を鳴らした。すると、ぬいぐるみ状態のマイメロのまぶたがゆっくり開くではないか。

魂が抜け出ているので生気が感じられない分、一同には不気味に映った。

『こわい』

マイメロは自分でありながら自分でないぬいぐるみ状態のマイメロを怖がり、クロミに抱きつこうとしたが、すり抜けてしまった。

「ぞわ～～～っ。また悪寒が走りやがった。でも、なんか計算ずくのマイメロの可愛さを見て悪寒が走った時の感覚が甦って来たよ！　これなら一〇〇個は書けそうだ！」

そう言うとクロミは脇の下から分厚いクロミノートを取り出した。クロミノートNo.２１７３５！　あたいが……」

と言いかけた時、またウスラ・バッカが指を鳴らした。

すると、クロミの頭上に突然マイメロの頭を叩いた時と同じ木槌が現れ、クロミの頭を直撃した。

「ぎゃひ～～～ん！」

クロミはその場にもんどり打って倒れ、魂が抜けた。
「クロミ様ー！　何をするゾナ！」
バクが慌ててクロミの体を揺すったが、クロミは目覚めない。
魂となったクロミは、マイメロと同様に、徐々に無色透明になっていきながら、なにやら喚いているがその場にいるみんなには聞こえない。
その声が聞こえたのは、同じ魂になっているマイメロだけであった。
『クロミちゃん』
『ん？　マイメロ⁉』
消えかかったクロミが振り返ろうとした瞬間、またウスラ・バッカが指を鳴らした。
すると、魂になったクロミは青白い光に包まれたかと思うと、瞬時にクロミの体ではなく、バリアの消されたマイメロの体の中に吸い込まれた。
ぬいぐるみ状態のマイメロの目に正気が戻り、目が吊りあがって、クロミの目になった。
「今マイメロのような声が聞こえたと思ったんだけど……っていうかあたいに何をしたんだよ！」
「ゾナ～～～！　マイメロが生き返ったゾナ！」
マイメロの魂は何が起こったか分からず、ポカーンとしている。

「マイメロが生き返った？」
マイメロになったクロミが言うと、バクはさらに驚き、
「でも、声はクロミ様ゾナ」
「はあ？」
マイメロとなったクロミが自分の手足を見た途端、
「ギャ――――ッ!!　なんであたいがマイメロなんだよ！　一体あたいに何をしたんだい⁉」
ウスラ・バッカは笑い声をかみ殺しながら、
「くっくっくっく、私の言う事を聞けばすぐにお前の体に魂を戻してあげるよ」
「な、なんだって⁉」
マイメロの魂はようやく今の状況を理解し、
『だったらマイメロがクロミちゃんの体に入っちゃお』
バクが抱いているクロミの体に入ろうとした瞬間、ウスラ・バッカがぬいぐるみ状態のクロミを奪い取った。
マイメロは目標を失い、床に激突し、
『や～～～ん』
目を回して気絶した。

マイメロになったクロミがウスラ・バッカを睨みつけ、
「誰があんたなんかの言う事なんか聞くもんか！　さあ、早く戻しな！」
その時、ウスラ・バッカが持っているぬいぐるみ状態のクロミの体が一瞬にぶい光を放った。
「今お前の体にバリアを張ったよ。私の言う事を聞かない限り、お前は魂になっても自分の体には入れないよ」
「なんだって!?　く〜〜！」
マイメロになったクロミは歯ぎしりしながら悔しがったが、観念して、
「……分かったよ、あんたの言う事を聞いてやるから言ってごらん」
「まずはメロディ・タクトを出してもらおうか」
「メロディ・タクト？　そんなもんどこにあるんだよ」
マイメロになったクロミが言うと、バクが答えた。
「マイメロはいつも頭巾の中からメロディ・タクトを出していたゾナ」
「頭巾ねえ」
クロミは頭巾に片手を突っ込むと、簡単にメロディ・タクトを出すことが出来た。
ウスラ・バッカはニヤリと笑い、
「それを使って、ウサミミ仮面を呼び出してくれ」

「え、そんな簡単なことでいいのかい？　すぐやってやるけど、絶対あたいを元の体に戻してくれよ！」
ウスラ・バッカは無言で頷いた。マイメロになったクロミはメロディ・タクトをかざした。
「待つゾナ、クロミ様！　マイメロがくるくるシャッフルをしてもウサミミ仮面はなかなか出て来なかったゾナよ」
目を覚ましたマイメロも大きく頷き、
『クロミちゃんには無理なんじゃないかな～』
と、上から目線で言ったが、誰の耳にも届かない。
「なんとかなるさ！　いくよ！」
マイメロになったクロミがメロディ・タクトを再びかざして呪文を唱えた。
「メロディマーク！　くるくるシャッフル！」
空中にメロディ・コンパクトが出現すると、蓋がひとりでに開いて二〇枚ほどの裏返しのカードが飛び出してきて、くるくると円を描きながら回り出した。そして、回転が止まると一枚のカードがクルリと飛び出してきた。
なんと、ウサミミ仮面のカードだった。
「うそゾナ～～⁉」

『マイメロ、ショック〜〜』
バクとマイメロが同時に叫んだ。
「よし、いくぞ！　ウノ！」
ウスラ・バッカが叫んだが、ウノは首を横に振り、
「王子、いくらなんでも約束だけは守った方がいいのでは？」
「しょうがない。お前がそこまで言うのなら」
ウスラ・バッカはぬいぐるみ状態のクロミを放り捨て、指を鳴らした。
すると、クロミに張ってあったバリアが消え、マイメロの体からクロミの魂が抜けて、瞬時に自分の体に戻って行った。
「ふ〜〜、これだよこれ。あたいの体サイコー！」
クロミは嬉しくなって飛び跳ねた。
「クロミ様、良かったゾナ」
バクがすぐにクロミを抱き締めた。
「では行くぞ！　ウノ！」
「かしこまりました！」
ウノが頷くと同時に、二人の体は瞬時に消えた。
だが、このゆるさが後に大きな代償となって跳ね返って来ることを二人は知る由もな

かった。
「あの二人、どこへいったんだ？」
「さあ？　分からないゾナ」
その時だった。バリアが消されたぬいぐるみ状態のマイメロの体にマイメロの魂が飛び込んだ。
「わ〜い、マイメロ、元に戻ったよ〜」
「げげっ！」
「ゾナー！」
二人は抱き合って震え上がった。
「マイメロ、成仏してなかったゾナか」
「違うよバクくん、実は……」
マイメロは今まで起こった事をすべてを二人に打ち明けた。
二人がさらに驚愕したのはあらためて書くまでもないだろう。
夢ヶ丘のメインストリートにウサミミ仮面のテーマが流れて、本物のウサミミ仮面を乗せたウサミミカーが疾走してきた。運転しているのも本物のシツジ仮面だ。

「やりましたな！　これで、偽者のウサミミ仮面たちを倒せますぞ！」

シツジ仮面は興奮気味に言ったが、ウサミミ仮面は後部ドアの上に肘を突き、まるでやる気がなかった。

それもそうだ。マイメロが亡くなって、もう二度とこんな恥ずかしい格好をしなくて済むと思っていたのだから。

その時、前方の反対車線から、こちらの車線に入り込んできた車に気づいたシツジ仮面が、急ブレーキを踏んだ。

ウサミミ仮面はつんのめりそうになったが、なんとか踏み止まった。

「どうしたんだ⁉」

「坊ちゃま、あれを⁉」

シツジ仮面は前方を指差した。

反対車線から侵入してきたのは、偽ウサミミカーで、偽者のウサミミ仮面とシツジ仮面が乗っていた。

明らかに急造と分かる偽ウサミミカーも停まり、偽ウサミミ仮面が路上に飛び降りて、本物と変わらぬやる気なさで、口上を述べ始めた。

「聞こえる聞こえる、愛に悩む人々の叫びが。悪に苦しむ人々の嘆きが。だってウサギの耳は長いんだもん。愛と正義の使者、ウサミミ仮面、参上」

しかも本物と同じ棒読みだ。最後の決めポーズも耳を垂らしてさらにやる気なしだ。
続いて、偽シツジ仮面が絶妙のタイミングで、その前にプラカードを持って現れ、
「シツジ仮面もよろしく！」
ウノはすべて完璧だと思った。昨夜特訓した甲斐があった。
こうまで完璧に演じられると、本家本元のシツジ仮面も黙ってはいられない。
「坊ちゃま、こちらも負けるわけにはいきませんぞ！」
「あいつらがやったんだから、省いてもいいんじゃないか？」
本物のウサミミ仮面が面倒臭そうに言った。
「いんや！　本物の凄さを見せつけてやるのです！」
シツジ仮面の迫力に負け、ウサミミ仮面はやむなくドアを開けて降りると、偽者の遥か上を行くやる気のなさで口上を棒読みした。
「聞こえる聞こえる……愛に悩む人々の叫びが……悪に苦しむ人々の嘆きが……だってウサギの耳は長いんだもん……愛と正義の使者……ウサミミ仮面、参上」
声も小さく、耳だけではなく全身脱力状態でポーズをとった。
しかし、本物のシツジ仮面は偽者より声を張り上げ、
「シツジ仮面もよろしく‼」
とカッコよくポーズを決め、サッと身を引いた。

「ようやく会えたな、ウサミミ仮面！　君には何の恨みはないが、地球を手に入れるには、どうしても君を倒さなくてならないのだ。いくぞ！」

偽ウサミミ仮面は猛然とダッシュしてきて、パンチとキック攻撃を仕かけてきた。ウサミミ仮面は相変わらずやる気がなさそうだったが、脱力したまま攻撃をかわしていく。

「なかなかやるな。これはどうかな？」

偽ウサミミ仮面は気合の声もろとも、目にも止まらぬスピードの連続パンチを放って来た。ウサミミ仮面はすべてのパンチを見切っており、僅かに上体を左右させるだけでかわすと、

「ウザいヤツ」

最後に飛んできた左右のパンチを掌で受け止めた。

同時に、偽ウサミミ仮面のマスクの下の目が輝いた。

偽者に変装しているウスラ・バッカが得意のコピーを敢行したのだ。

「何っ!?」

瞬時に、ウサミミ仮面の全能力をコピーしたばかりか、ウサミミ仮面の誕生の秘密やその正体まで、ウスラ・バッカは理解した。

「なるほど、そういう事だったのか。まさか、君がウサミミ仮面だったとはね」

「お前、私の正体が分かるのか？」

「ああ、柊恵一くん」
「くっ！」
ウサミミ仮面が先程とは一変して、殺気を放ちながら反撃に出た。
だが、偽ウサミミ仮面もどんなパンチやキックも余裕をもってかわした。
少し疲れたのか、ウサミミ仮面がサッと後方へ飛び退いた。
呼吸を整え、周囲を見渡すと、野次馬も集まっており、後方や反対車線にも渋滞が起きているのに気づいた。
「まずい……早く終わらせないと」
ウサミミ仮面は大きく息を吐くと、いきなり必殺技を繰り出した。
「イケメンビーム！」
だが、同時に偽ウサミミ仮面も、
「イケメンビーム！」
仮面を外した二人のウサミミ仮面から同時に凄まじい勢いのピンク色のビームが発射され、二人の中間でビームがぶつかり合い爆発した。
爆炎が消えると二人のウサミミ仮面が何事もなかったように路上に立っていた。
「フフフフ、君の能力はさっき私のパンチを受けた君の両手からコピーさせてもらったよ」

「何⁉」
ウサミミ仮面の体に今まで感じたことない戦慄が走った。
『イケメンビーム』の爆発音は夢野家の部屋の自室にいる歌にも聞こえていた。
「なんなの今の爆発音は」
歌はすぐにパジャマから私服に着替えると、玄関から通りへ飛び出した。通りには近所の家々からも住人たちが飛び出しており、爆炎が上がる方を眺めていた。
するとそこへ、一方から制服姿の美紀と真菜が駈け寄ってきた。
「歌、大変よ！」
「二人のウサミミ仮面がすごい戦いを始めとるみたいや」
「なんですって⁉」
歌は一瞬驚きの表情を浮かべたが、すぐにハッとなって、
「ちょっと待って。ウサミミ仮面ってマイメロがくるくるシャッフルしなきゃ登場できないんじゃなかった？」
歌の言葉に美紀は大きく頷き、
「そうよね。てことは……」

その時、真菜が突然自分の両肩を抱いて身震いした。
「なんやこの寒い感覚は」
そう呟いた時、上空からマイメロの声がした。
「うーたーちゃーん」
三人が上空を見ると、クロミと共にバクの背中に乗ったマイメロが手を振っていた。
「マイメロ！」
飛んできたバクの背中からマイメロが飛び出してきて、歌の胸に飛び込んで来た。
「生き返ったんだね！」
「生き返ったんじゃなくて〜、マイメロはずっと生きてたの」
「やっぱり……」
真菜はそう呟くと三歩ほど後ずさりした。
「どういうことなのマイメロ」
美紀が尋ねると、マイメロはみんなに向かって言った。
「実はね、カクカクシカジカだったの」
「なんですって！」
と、叫んだのは歌だった。カクカクシカジカで分かるとは、さすがドリームパートナーである。

「どういうこっちゃねん！」
「だから、カクカクシカジカなのよ！」
と、歌が説明すると、
「へえ、そうだったんだ」
「ウスラ・バッカのやつ！　とんでもないヤツやったんやな！」
こちらもさすが歌の親友たちである。
「いつまで驚いてるんだよ！　ウサミミ仮面の元に行こうぜ！」
クロミの言葉で歌たちは夢ヶ丘のメインストリートへ急いだ。
途中、奏と琴も合流した。

マイメロや歌たちがメインストリートに到着すると、既に舗道は大勢の野次馬たちでごった返していた。
その近くの車道ではウサミミ仮面の必殺技『ウサミミジャイアント』で巨大化した二人のウサミミ仮面がパンチ、キック、チョップなどの攻撃を繰り広げていた。
明らかに偽ウサミミ仮面の方に余裕があった。
「君の攻撃はすべてお見通しなんだよ」

「うるさい。こうなったら……」
ウサミミ仮面は偽ウサミミ仮面と組み合ったまま、マントを翻し空へ舞い上がった。
そしていったん偽ウサミミ仮面から離れると、最終奥義である『ウサミミ素顔』を放とうと、仮面とマスクを取った。
これにはウサミミ仮面の巧妙な企みが潜んでいた。
「『ウサミミ素顔』も私には通用しない！」
そう言って偽ウサミミ仮面も素顔を晒した。
仮面とマスクの下から現れたウスラ・バッカの顔に、恵一の顔になっているウサミミ仮面は驚愕した。
「ウスラ・バッカ……あなただったのか！」
「し、しまった！」
ウスラ・バッカは一瞬動揺の表情を浮かべたが、
「まあどうせ君には消えてもらうから大したことないよ」
再び余裕の表情に変わった。
地上から見ているマイメロや歌たちには、米粒ほどにしか見えない二人のやり取りは



分からなかった。
「ウサミミ仮面さん、大丈夫かなあ」
「柊しゃまが負けるわけないだろ！」
クロミが怒鳴るとマイメロは口を尖らせていた。
「先輩さんじゃないもん。ウサミミ仮面さんだもん」
そんなやり取りをしているうちに、上空では大きな爆発が起こった。『ウサミミ素顔』によるものであった。
大音量の爆発の後、爆煙が上空を包む。
マイメロたちは息を飲み、風に流れる爆煙を息を潜めて見ていた。爆煙が流れ去ると、米粒大のウサミミ仮面は元の距離を保ったまま宙に留まっていた。
上空の二人のウサミミ仮面に変化が起こっていた。
明らかに本物のウサミミ仮面の方が息が荒い。さすがに最終奥義『ウサミミ素顔』を使っただけあって、疲労困憊していた
一方、偽ウサミミ仮面の方はケロッとしており、息も正常である。
「フフフフ、ウサミミ仮面究極の最終奥義『ウサミミテイルボム』を使えるパワーは

残っていないようだね」
素顔を晒したままのウサミミ仮面は唇を噛みしめて、偽ウサミミ仮面を睨んだ。
「私のコピーのはずなのに、なぜ疲れないいんだ」
「ははは！　私は別に君の能力のコピーをしなくても遥かに強力な魔力を持っているんだよ。まあ君を倒すぐらいなら、魔力は使わないけどね。それより私はウサミミ仮面のもっとすごい必殺技を思いついてしまったよ」
「なんだって!?　まだウサミミ仮面には必殺技があるということか」
「その通り。多分君にも使えるはず……いや、人一倍プライドが高い君には使えないかもしれないね」
そう言い放つと、偽ウサミミ仮面は瞬時に着ていたコスチュームを消し、全裸になった。
「な、何!?」
ウサミミ仮面が驚愕したその瞬間、
「裏必殺奥義『ウサミミすっぽんぽん』!!」
偽ウサミミ仮面の体から強烈なピンク色の光線が発射され、ウサミミ仮面の体を貫いた。『ウサミミ素顔』の十倍、いや二十倍は強烈な光線だった。
「うわあああああ」

悲鳴と共にウサミミ仮面のコスチュームは霧散し、『ウサミミジャイアント』から元の大きさに戻った全裸の柊恵一が落下していった。

ぐんぐん地上に近づくにつれ、見ていたマイメロたちにも戦いに敗れ、全裸となった恵一の姿が確認出来た。

「ひ…… 柊しゃま！」

「先輩さんが負けちゃった……」

恵一の体には無数の傷がつけられており、路面に血が雨のように降ってきた。

「ま、まずいんとちゃうか⁉」

真菜の叫び声に見ていた歌たちも顔から血の気が引いた。

どんどん落下してくる恵一の体から生気が失せていく。

「バク！ 何してんだ、助けるんだよ！」

クロミが叫んだが、バクは怖気づいていた。

「無理ゾナ！ あんなスピードで落下してくる柊様を受け止めたらバクも一緒に地面に叩きつけられてしまうゾナ」

「いいからクッションになるんだよ！」

それでもまだバクが躊躇していると、シツジ仮面が運転するウサミミカーが疾走してきて、地面に激突する寸前に恵一を後部座席でキャッチした。
そして、急ブレーキで停まり、シツジ仮面は後部座席を振り返った。
「恵一坊ちゃま！」
だが、恵一は虫の息でぐったりしている。
マイメロや歌たちが駈け寄っていくと、上空から偽ウサミミ仮面の笑い声が聞こえてきた。みんなが見上げると、元の大きさに戻った全裸のウスラ・バッカがゆっくりと降下してくる。
「み、みんなで柊しやまを守るんだ！」
クロミが泣きながら叫んだ。
その時、マイメロの耳がピクピクと動いた。マイメロの耳にマリーランドにいる王様とルミちゃんの声が聞こえてきた。
『マイメロ、メロディ・キャンディを飲ませるんだゾウ！』
『柊恵一は私たちが引き取ります』
「はいはーい」
マイメロは頷くと、脇の下からメロディ・キャンディを取り出し、一粒恵一の口に放り込んだ。

その瞬間、ウサミミカーごと恵一とヒツジ仮面の姿が閃光し、消えた。
全裸のままのウスラ・バッカがみんなの頭上近くまで接近してきており、驚きの声を上げた。
「何っ⁉　恵一はどこへ行った！　お前たち、何をしたんだ⁉」
マイメロはあまりの恐ろしい声に歌の背中に隠れた。
「し、知らないよ！」
クロミが睨み返して叫んだ。
「フフフフ、ならば力づくで言わせるまでだ！」
ウスラ・バッカが再び『ウサミミすっぽんぽん』を放つために体中にパワーを充満させた時だった。
そこにいた全員の体が閃光し、瞬時に消えたのだ。
王様とルミちゃんがテレビ中継を観ながら魔法を使って救出したのだ。
「な、何っ⁉」
ウスラ・バッカは攻撃を止めた。
すぐに野次馬たちから怒りの声が浴びせられた。
ウスラ・バッカは怒りの表情に変わり、サッと右手を野次馬たちに向けて突き出した。
その腕が人間から本来のウラノス星人の腕に変化した。

次の瞬間、手の先から青白い光が飛び出し、野次馬たちの背後の街路樹を一瞬のうちに燃え上がらせた。

そのあまりの光景に野次馬たちは悲鳴を上げて逃げ出した。

そこへ、バッタもののウサミミカーを運転したウノが走り寄ってきた。

「王子、これを」

全裸のウスラ・バッカに洋服を渡すと、

「私は見ておりました。マイメロの仕業です」

「なんだと！」

洋服を着替えながらウスラ・バッカはウノを見た。

「王子はお気づきにならなかったかもしれませんが、消えた人々の中にマイメロがおりました」

ウスラ・バッカは一瞬驚きの表情を浮かべたが、すぐに納得した表情になった。

「なるほど、そういう事だったのか」

「申し訳ございません。私がクロミを元に戻した方がよろしいかと進言したことが仇となってしまいました」

「まあ気にすることはない。また『鳴かぬなら鳴かせて見せようホトトギス』作戦を実行すればいいのだ。とりあえず囮を確保しないとな」

「囮？」
ウノはウスラ・バッカが何を言っているのか分からなかった。
連日の筋トレの疲れで騒ぎの間、夢ヶ丘学園高等部の教室で熟睡していた潤が目を覚ました。
「あ〜よく寝た。ん？　なんで誰もいないんだ？」
潤が伸びをしながら呟いた時、クラスメイトたちが戻ってきた。
「みんなどこに行ってたんだよー」
潤が尋ねると、クラスメイトたちは呆れ顔になった。
「お前知らないのかよ！　お前の兄さんが偽者のウサミミ仮面にボロ負けしちゃったの」
さらに別の生徒が続けた。
「あの様子じゃ助からないだろうな……」
「な、なんだって──っ！」
潤は愕然となったが、
「こうしちゃいられねえ！」
教室を飛び出して行った。

潤はとりあえず自宅に戻るために全力疾走した。いつもなら五分も走れば疲れ切って倒れるはずだが恵一のことが心配な潤はエネルギー切れすることも忘れていた。
「兄貴……なんでも完璧な兄貴が……偽者野郎に負けるなんて、俺は信じねえ！」
潤は独り言を言いながら走りに走り、柊邸の前まで来た時、立ち止まった。
門の前にはウスラ・バッカとウノが待ち構えるように立っている。
「潤様、待ちかねておりましたぞ」
ウノが言った。
「兄貴は⁉　……兄貴はどこだ！」
「おそらくマリーランドに連れて行かれたのかと」
「マリーランド？」
「潤様、私たちがお待ちしていたのは潤様にマリーランドへお連れしてもらうためです」
「ちょっと待ってくれよ。俺はマリーランドに何度か行ってるけど、いつもマイメロたちに連れて行ってもらってたから行き方なんて知らねえよ」
ウノは舌打ちした。実はウノもマイメロの体を取りに行く時、バクに頼りっぱなしだったため、マリーランドに続く入口がどこにあるか分からなかったのだ。
使えないやつ！　と自分のことを棚に上げ、ウノは心の中で呟いた。
「まあよい」

ウスラ・バッカがウノの肩を掴み、グイッと引っ張り自分が前に出た。
「潤君、君もケイイチに会いたいだろう」
「ああ、もちろんさ！」
「では、すぐにケイイチを連れ戻してあげるから、手伝ってもらおうか」
「手伝う？　手伝うってどうやんだよ」
潤が尋ねた時、ウスラ・バッカの目が妖しく輝いた。瞬時に潤は立ったまま眠りについた。
「フフフフ、こうやるのさ」
ウスラ・バッカの体が一瞬人間の姿から元のウラノス星人の姿に戻ったかと思うと、シュッと潤の体の中に吸い込まれるように入って行った。
次の瞬間、潤の体が昔ダークパワーの精のダーちゃんが取り憑いた時の悪魔の姿に変わった。
「この姿は⁉」
ウノが驚きの声を上げると、潤の体の中からウスラ・バッカの声が聞こえて来た。
「はっはっはっ、ウサミミ仮面をコピーした時、彼の記憶もコピーしておいたのだ」
ウスラ・バッカは滅びの雲で地球を覆いマリーランドに大打撃を与えるつもりでいた。

# 第六章（だいろくしょう）　クロメロディってイイナ！



その頃、マリーランドの城の敷地内にある王立病院の手術室の前にマイメロや歌たちはいた。
テレビ中継でウサミミ仮面のピンチを知った駆、フラットくん、ピアノちゃんも駈けつけていた。もちろん王様、ルミちゃん、マイメロの家族たちも心配そうに『手術中』の赤いランプを心配そうに見ていた。
ランプが消え、手術室から担当医が疲れきった顔で出てきた。
「先生、柊恵一は？」
ルミちゃんが尋ねる。
「命は取り留めました。これから集中治療室の治療カプセルに入れます」
みんなから歓声が上がり、セバスチャンはその場に座り込み、感涙した。
すぐに手術室のドアが開き、ストレッチャーに乗せられた恵一が医師団によって運び出され、隣の集中治療室に入って行った。
王様は依然として心配そうにしているマイメロや歌たちに向かって笑顔で言った。
「マリーランドの医療スタッフが作った治療カプセルはすごい効果があるんだゾウ！命さえあればどんなケガでも一時間もあれば治ってしまうんじゃ」
王様が偉そうに胸を張った時、突然集中治療室や廊下の明かりが消えた。
「えっ、停電？」

「どないなってんねん？」
美紀や真菜が驚きの声を上げると、集中治療室から医師の声が聞こえて来た。
「自家発電に切り替えろ！」
すぐに停電状態が解消された。みんなが一安心していると、ドリアン大臣がスマホを片手に血相を変えて駈け寄ってきた。
「王様、大変でございます！　これを見てください！」
「大臣、どうしたんじゃ？　そんなに慌てて」
王様とルミちゃんが大臣の差し出したスマホの画面を見ると、そこには人間界のテレビ中継が映し出されており、ウスラ・バッカに体を乗っ取られた潤が夢ケ丘の電波塔の上でダーク・ギターで滅びの曲を演奏している。
「なんじゃ？　大臣もスマホで人間界のテレビを観ておったのか、隅に置けんのう！」
「そっちかよ！」
ドリアン大臣がツッコミを入れた。
ルミちゃんが王様を突き飛ばし、スマホの画面を歌たちに見せる。
「じゅ、潤くん⁉」
歌に続き、駆が叫んだ。
「これって昔ダーちゃんに体を乗っ取られて操られていた時と同じじゃないか！」

続いて、奏と琴とピアノちゃんが同時に叫んだ。
「どういうことなの？」
「わっぱ、め〜め〜っ‼」
ピアノちゃんが説明したが、歌たちには分からない。ただ、その表情から相当まずい事になっているのは想像出来た。その時、ルミちゃんがハッとなって、
「ひょっとして今の停電は地球がまた滅びの雲に覆われ、マリーランドにも影響が及んだためでは……」
「そうかもしれません、王妃様！」
ドリアン大臣が同意すると、ルミちゃんと共に駆け出した。
マイメロと歌たちもその後に続き、マリーランドが一望出来る城のバルコニーまで一気に駆け昇って行った。
ルミちゃんの予感は的中していた。城から見えるマリーランドは既に四分の一ほど砂漠化が始まっており、見ている間にも急速に砂漠が広がっていく。
「なんというスピードでしょう……！」
その時、遅れてやってきた王様が叫んだ。
「おそらくウスラ・バッカの力に違いないゾウ」
「王様の仰る通りかもしれません」

ルミちゃんはさらに続けて、

「ウサミミ仮面をあそこまで痛めつけたのです。かつてのダーちゃんより大きな魔力を持っているに違いありません」

「みんな、早くウスラ・バッカを倒さないと大変なことになるゾウ！　柊恵一が回復するまでにウスラ・バッカを倒す準備を整えるのじゃ！」

緊張したマイメロや歌たちが大きく頷いた。

一方、人間界では、人々から夢を奪い取り、生きる屍にしてしまう滅びの雲が発生して、すごいスピードで地球を覆い始めていた。

NASAの地球の危険レベルを表すメーターも、『ヤバイ』、『激ヤバ』を超え、最高レベルの『マイメロちゃん』まで達しており、職員たちも既に夢を吸い取られ、真っ白になって気を失っていた。

ウスラ・バッカの凄まじい魔力を介して、滅びの曲を弾き続ける潤によって、滅びの雲はぐんぐん日本にまで迫ってきている。

だが、ウスラ・バッカには地球やマリーランドを滅ぼすつもりはさらさらなかった。滅びの雲が夢ヶ丘に近づく寸前でギター演奏を止めた。

「私がここまでしているのに、何をやっているんだ⁉　ウサミミ仮面とマイメロは！」

天を睨みつけた。

マリーランドは城の敷地以外はすべて砂漠と化してしまっていた。

王様は決断した。

「柊恵一の回復を待っている時間はないゾウ！　みんな、行くゾウ！」

王様の前に集まっていたマイメロ、クロミ、バク、フラットくん、ピアノちゃん、ハリネズミくん、歌、奏、琴、駆、美紀、真菜、ルミちゃんが大きく頷いた。

王様、ルミちゃん、ハリネズミくん以外はクロミのメロディ・キーの力でウサミミレンジャーの姿になっていた。バクだけは溜めに溜めた負け犬パワーで負け犬仮面に変身していた。

地球とマリーランドを救う最強の精鋭部隊と言ってよかった。

一同は次々と気球に乗り込み、ドリアン大臣や城に逃げ込んできたマリーランドの住民たちに見送られ、上空へ舞い上がっていった。

ようやくマイメロたちが乗った気球が夢ケ丘の上空に現れた。

「よし、みんな行くゾウ！」
王様の号令に一同はマントを広げ、ウスラ・バッカに体を乗っ取られた潤の元に舞い降りていった。
「やっときたか。待ちくたびれたぞ！」
そう叫ぶと、人間の姿のウスラ・バッカが潤の体から飛び出してきた。
潤は元の体に戻り、電波塔の上でバタリと倒れた。すると、滅びの雲も一気に引いていった。
意外な展開に、マイメロたちはその上空で唖然と立ち尽くしている。
「どういうことじゃや？」
王様はウスラ・バッカを睨みつけた。
だが、ウスラ・バッカはそれには答えず精鋭部隊の中にウサミミ仮面がいないのを確認すると、
「ウサミミ仮面はどうした？」
クロミが凄い形相で答えた。
「あんたのお蔭でまだ傷が治ってないんだよ！　柊しゃまの仇だ！　みんな、行くよ！」
「おお！」
一斉にウスラ・バッカに向かって急降下し、攻撃を加えた。

次々と繰り出されるパンチやキックをウスラ・バッカはいとも簡単にかわし、瞬時に上空に移動した。
「お前たちのような雑魚に用はない。さっさとウサミミ仮面を連れて来い！」
「わしより偉そうだゾウ！　ルミちゃん、ここはわしらのラブラブビームじゃ！」
「はい、王様！」
二人はヒシッと抱き合うと、サッと握り合った手をウスラ・バッカに向けて叫んだ。
「ラブラブビーム！」
凄まじい愛のパワーがこもったビームが発射されウスラ・バッカに襲いかかった。
ドッカーーーン！
「やったかのう？」
爆煙を見ながら王様が言った。
だが、爆煙の中からウスラ・バッカの笑い声が聞こえて来たかと思うと、煙が一瞬のうちに吹っ飛び、バリアを張ったウスラ・バッカが現れた。
「そんなビームでは私は倒せない」
「こうなったら『ウサミミテイルボム』や！」
真菜の声に頷き、歌が、奏が、琴が、美紀が、駆が、腰をフリフリして、尻の丸い尻尾をウスラ・バッカに向けて発射した。

見ようによっては実に恥ずかしい攻撃だった。
五人による『ウサミミテイルボム』は次々とウスラ・バッカに命中して爆発を起こした。だが、寸前で瞬間移動したウスラ・バッカが五人の背後に現れると、一瞬のうちに奏以外を衝撃波で地面に叩きつけた。
「ミス・カナデ、君だけは私のタイプなんで許してあげるよ」
馴れ馴れしく奏の肩を抱き寄せ、キスしようとしたが、
「冗談じゃないわよ！　私はあんたみたいなハイスペックイケメンは大嫌いなのよ‼」
思いっきりウスラ・バッカの頬をグーパンチで殴った。
「うっ……殴ったね……父上にさえ殴られたことはなかったのに……！　許さんっ！」
再び衝撃波一発で奏を地面に叩きつけた。
「よ、よくもやりやがったな！　バク、いくよ！」
「はいゾナ！」
クロミを背中に乗せ、バクはウスラ・バッカの頭上高く舞い上がると、Uターンして急降下してくる。
「行くゾナよ〜〜〜！　負け犬ビーーーーーーム！」
バクの口から凄まじい勢いの負け犬ビームが発射された。
ウスラ・バッカは素早く自分の前にバリアを張った。だが、負け犬ビームは凄まじく、

バリアは吹っ飛ばされた。さらに迫った負け犬ビームを、ウスラ・バッカはギリギリのところでかわしたかに見えたが、微かにスーツの肩の部分に亀裂が走った。
「私がパリで買ったお気に入りのオートクチュールのスーツを！」
ウスラ・バッカはスーツを脱ぎ捨てると両腕を胸の前でクロスさせた。
邪悪なオーラが迸り、一気にバクとクロミに向けて発射した。凄まじい邪悪な光が二人に突き刺さろうとした時、王様とルミちゃんが飛び込んできて盾になった。
だが、邪悪な光は四人の体を突き抜けた。悲鳴と共に四人は地面に落下して気を失った。
残るはマイメロとフラットくんとピアノちゃんだった。いや、上空に浮かんでいる気球の中にはハリネズミくんが隠れていた。ハリネズミくんは最悪の場合に備えてコロリを行うタイミングを見計らっていたのだ。
しかし、とんでもない魔力を持つウスラ・バッカには見破られていた。ウスラ・バッカは背後に浮かぶ気球を振り向きもしないで指を鳴らした。気球はあっさり爆発して、ハリネズミくんは地面に落下し、気を失ってしまった。
「まずいよマイメロ！　ここは一か八かくるくるシャッフルだ！」
「わっぱめぇ〜〜！」
「はいは〜〜い」

　マイメロは頭巾の中からメロディ・タクト……いや、マリーランドを出発する時に王様から魔法で変えてもらったハイパー・メロディ・タクトを取り出し、呪文を唱えた。

「メロディマーク！　くるくるシャッフル！」

　空中にメロディ・コンパクトが出現すると、蓋がひとりでに開いて、二〇枚ほどの裏返しのカードが飛び出してきて、円を描きながら回り出す。

「まいめろめろめろみめめろめろ、あわせてめろめろむめろめろ……あ、ちゃんと言えた♥」

　回転していたカードが止まると、二枚のカードがクルリと飛び出してきた。

　やはりマイメロは持っていた。

　カードは最強であるウサミミ仮面とマイメロママだった。

　すぐにウサミミ仮面のテーマ曲が流れ出し、彼方からシツジ仮面が運転するウサミミカーが疾走してきた。後部座席にはウサミミ仮面が腕組みをしていて、その頭にはマイメロママが乗っかっていた。

「フフフフ、ついに出て来たな、ウサミミ仮面」

　ウスラ・バッカは急降下して、急停車したウサミミカーの前に着地した。

　すると、ウサミミ仮面の頭からマイメロママが宙返りをしながら飛び降りた。

「なんだ、このおばさんは？」

マイメロママはウスラ・バッカに向かってゆっくり歩き出した。
マイメロたちに助け起こされた王様や歌たちが固唾を飲んで見守っている。
「本当なら、ウサミミ仮面に露払いをさせるところだけど、まだケガが完全に治っていないから、私が先に相手をしてあげるわ」
「え？　ウサミミ仮面が露払いだって⁉」
ウスラ・バッカは警戒した。
「ウサミミ仮面より強いのか？　そんなの聞いてないぞって、思ったでしょう？」
マイメロママの毒舌攻撃が始まっていた。
「な、何っ⁉」
「どうやら、図星のようね。あなたって、すぐに顔に出るタイプね！」
言葉と一緒に、矢印光線がマイメロママの口から飛び出し、ウスラ・バッカの胸を貫いた。
「うっ」
ウスラ・バッカの体がぐらりと揺れた。
「おおっ、効いているゾウ！」
王様が叫んだ。
マイメロママの毒舌攻撃は続く。

「オートクチュールのスーツですって？　自分に自信のない男ほど着飾るものよね」
また矢印光線に胸を貫かれたウスラ・バッカが、ガクッと片膝を突いた。
「それに何？　プレイボーイ気取りで、奏ちゃんを誘惑して、フラれたんですってね？」
またしても矢印光線に胸を貫かれ、ウスラ・バッカは倒れた。
「や、やめろ……やめてくれ……」
「フフフ、偉そうにしているけど、ほんと打たれ弱いのね。ゆとり教育のせいかしら？」
「ゆ、ゆとり……!?」
この言葉はウスラ・バッカには禁句だった。マイメロママはウスラ・バッカの地雷を踏んでしまった。
「私は……その言葉が……大嫌いなんだあああ!!」
そう叫ぶと、ウスラ・バッカの体が人間からウラノス星人に変化した。
さすがのマイメロママもたじろいだ。
「な、何っ？　その体は!?」
その隙を突き、倒れていたウスラ・バッカの右手から衝撃波が放たれ、マイメロママは吹っ飛ばされた。
悲鳴と共に、近くのビルまで吹っ飛び、壁にめり込んで気絶した。

「ママ～……」

マイメロが泣きそうな声で呟いた。

「トドメだーーっ！」

立ち上がった異形の姿のウスラ・バッカが右手を突きだした。

その掌に邪悪なオーラが迸った瞬間、邪悪な光が飛び出し、壁にめり込んで動けないマイメロママに命中した。

ドカ――――ン!!

ビルは半壊して、爆煙に包まれた。

マイメロや歌たちの顔に絶望の色が浮かび上がった。

ところが、爆煙が消えると、背中をこちらに向けたウサミミ仮面が片膝を突いていた。

ウサミミ仮面のマントは半分ほど焦げ落ちて、煙が上がっていた。

ウサミミ仮面がゆっくり立ち上がり振り向くと、その腕で無傷のマイメロママが気を失っていた。

「おおっ！」

みんなの歓喜の声が響いた。

ウサミミ仮面はマイメロママを地面に降ろすと、

「聞こえる聞こえる、愛に悩む人々の叫びが。悪に苦しむ人々の嘆きが。だってウサギの

耳は長いんだもん。愛と正義の使者、ウサミミ仮面、参上」
棒読みではなく、まさに正義のヒーローの言い回しで、ポーズもやる気満々だった。
「シツジ仮面もよろしく！」
シツジ仮面も絶妙なタイミングで絡んできた。
ウサミミ仮面は、覚めた表情でウスラ・バッカを睨んだ。
「ウスラ・バッカ、まさかあなたがそんな姿のエイリアンだったとは驚いたよ」
「ウサミミ仮面……いや、ケイイチ、君とは楽しい時間を過ごしたよ。でも、それもここでジ・エンドだ！」
ウスラ・バッカは全身から邪悪なオーラを発すると、舞い上がった。
上空からマイメロや街ごとに吹っ飛ばす気で、ウスラ・バッカがウサミミ仮面を振り返った時だった。
「『ウサミミすっぽんぽん』‼」
なんと、ウサミミ仮面はマスクと仮面以外を脱ぎ捨てて、体全体からピンク色のビームを発射した。
まさか、人一倍プライドが高く、そんな羞恥プレイのような究極の裏奥義をウサミミ仮面が放つとは思わなかったウスラ・バッカは虚を突かれた。
ピンク色のビームを浴び、悲鳴を上げると、グッタリとしながら落下して、地面に落ち

た。
ウスラ・バッカはピクリとも動かなかった。
「ウサミミ仮面さん、すごーい♥」
「ウサミミ仮面──っ‼」
全員がウサミミ仮面に駆け寄った。
だが、すっぽんぽんの姿に、女性陣は嬉しい悲鳴を上げ、顔をそむけたり、両手で顔を覆ったりした。マイメロママだけは何もせず、しっかりウサミミ仮面の下半身を見て、ニヤリと笑った。
すぐに、シツジ仮面がすっ飛んできて、自分のシツジのコスチュームを脱いで、ウサミミ仮面に着せた。
ウサミミ仮面はすっぽんぽんより恥ずかしかった。
だが、その時、笑い声が響いてきた。
一同が振り返ると、死んだと思っていたウスラ・バッカの手の指が動き出した。
「くっくっくっ、どうやら、私を本気にさせてしまったようだな」
ウスラ・バッカがゆっくり起き上がった。
「ま、まだ生きていたのか……⁉」
ウサミミ仮面にはもう戦う力は残っていなかった。

「フフフ、私の本当の力を見せてやる。うおおおおおおおお!!」
野獣のような雄叫びを上げると、体中から邪悪なオーラが迸り、みるみる巨大化していき、『ウサミミジャイアント』くらいの大きさになった。
「ま、まずいゾウ！　なんとかしないと……」
王様が悲痛な表情で言ったが、こちらにはもう戦う術はなかった。
一同の顔に絶望の色が浮かんだ時、ウスラ・バッカの後方の空に、気球が現れた。
気球にはドリアン大臣と王立科学研究所のメイ博士が乗っていた。
メイ博士は何か叫んでいるが、遠すぎて何を叫んでいるのか聞こえなかった。
だが、マイメロの耳には届いていた。
「クロミちゃん、合体しよう～」
「お前、この期に及んで何言ってんだ？」
「メイ博士が、メロディ・タクトとメロディ・キーを使ってね、マイメロとクロミちゃんが合体すれば、すんごい事が起きるって言ってるよ」
「それは本当ですか？」
ルミちゃんが尋ねると、マイメロはニッコリ頷いた。
「だったら、クロミ、やってみて！」
歌が言ったが、クロミは激しく首を横に振った。

「じょ、冗談じゃないよ！　誰がマイメロなんかと！」
「このままじゃ、みんなやられてしまうゾナ！」
バクも促した。
「うう……」
クロミはまだためらっている。
「クロミちゃん、マイメロがやられちゃったら、クロミノートが書けなくなっちゃうよ」
「ううっ……それは……」
その時、ウサミミ仮面が言った。
「クロミ、僕からも頼む」
「はい、柊しゃま～♥」
クロミはデレ～ッとなって頷いた。
「おっしゃー！　頼んだで、クロミ！」
真菜にハッパをかけられて、クロミはきりりとした顔になった。
「で、どうやりゃいいんだい？」
「それは聞いてない」
マイメロが言うと、ウサミミ仮面以外、全員がずっこけた。
「お前な～～っ！」

クロミが怒鳴りつけると、王様がアドバイスした。
「とにかく、呪文を交互に唱えてみるのはどうじゃ？」
「それはいいかもしれません」
ルミちゃんも同意した。
その時、ドスン！　という地響きとともに地面が波打ち、全員が悲鳴を上げて倒れた。
巨大化したウスラ・バッカが業を煮やして、地団駄を踏んだのだ。
「お前たち、いい加減にしろ！　いつまで待たせるのだ！」
待つ方も待つ方だと思うのだが。
「ウスラ・バッカさん、あと三〇秒待って。おねがい♥」
マイメロのお願いポーズに、つい頷いてしまうウスラ・バッカだった。やはり、ゆとり野郎だった。
「そんじゃ、マイメロ行くよ！」
「はいはーい」
二人は同時にメロディ・タクトとメロディ・キーを構えて呪文を交互に唱えた。
「開け！」
「メロディマーク！」
「夢の扉！」

「くるくるシャッフル！」

すると、空中にメロディ・コンパクトが出現し、蓋がひとりでに開いて、二枚のカードが飛び出してきた。二枚のカードは表向きでマイメロとクロミの絵柄だった。

二枚のカードは絡み合うようにクルクルと回転して、一つに合体すると、閃光して消えた。

同時に、マイメロとクロミの体も閃光したかと思うと、二人がピンク色と黒色の光の玉となって、絡み合うようにクルクル回って、一つの玉になり、消えた。

次の瞬間、黒とピンクのゴスロリファッションをまとい、頭はクロミで顔はマイメロのニューキャラクターが登場した。大きさは元のままで、少しも強そうには見えなかった。

「な、なんや、これ⁉」

真菜は震えながら後ずさった。

「まあ、クロメロディってことかのう」

王様の一言で、名前は決まった。

「クロメロディ、可愛い♥って、なんだよ、まんまじゃねえか！」

クロメロディの声は、マイメロとクロミの声が合わさったものだった。

途端に、巨大化したウスラ・バッカが笑い出した。



「はっはっはっ、どんな凄いヤツが現れるかと思ったら、大したことなさそうだな」
「バカにすんじゃないよ！　頑張っちゃうもんね～」
クロメロディは巨大化したウスラ・バッカの足下へ近づいていった。
「もっと魔力を使うつもりだったが……これで終わりだ」
巨大化したウスラ・バッカは右足であっさりクロメロディを踏み潰した。
「や～～～ん！」
クロメロディの悲鳴が響いたが、すぐ聞こえなくなった。
「ああ……」
見ている者全員の口が開いたままだった。
「はっはっはっ、次はウサミミ仮面だな……ん？」
ウスラバッカの表情から笑いが消えた。
大きなウスラ・バッカの右足がちょっと浮き出した。
歌たちも驚いて、ウスラ・バッカの右足を注目した。
右足はさらに浮き上がり、ぺちゃんこになっていると思われたクロメロディがその体を徐々に大きくしながら持ち上げていた。
「クロメロディ！」
歌たちの顔に歓喜の表情が浮かんだ。

クロメロディはますます大きくなって、ウスラ・バッカの右足を弾き飛ばした。

「うわあああ！」

巨大化したウスラ・バッカはひっくり返り、背後の電波塔に激突して、目を回した。

その拍子に、大きなパラボラアンテナの上で気絶していたままの潤が空中に投げ出され、落下したが、バクが飛んで行って救出した。

その間にも、クロメロディは強大化していき、すでにウスラ・バッカの一〇倍の大きさになっていた。

ウスラ・バッカが意識を回復して、目を開けた時だった。

「クロメロディ、『猫踏んじゃったアタ――ック』!!」

という叫び声と共に、クロメロディの超巨大な右足が襲いかかって来た。

ウスラ・バッカの顔が恐怖で歪んだ瞬間、クロメロディの右足の下敷きになった。

ウスラ・バッカの断末魔の叫びは、激しい地響きに掻き消された。

歌たちの体が、その衝撃で三メートルほど浮き上がり、悲鳴を上げながら元の場所に落下した。

「いたたた……」

歌が周囲を見回すと、道路には地割れが走り、あちらこちらのビルの壁にもヒビが入り、窓ガラスが割れていた。

クロメロディが右足を上げると、スルメのように平たくなり、元の大きさに戻ったウスラ・バッカが、突風に煽られて、ひらひらと舞い上がった。

すると、人影が突如現れると、ウスラ・バッカを掴んだ。

ウスラ・バッカの執事のウノだった。

「お騒がせいたしました！　では」

律儀に一礼すると、瞬時に消えた。

歌たちが呆気にとられて見ていると、超巨大化したクロメロディが閃光して、元のマイメロとクロミの姿に戻った。

「マイメロ――ッ！」

「クロミ――っ！」

「クロミ様――っ！」

みんなが歓喜の声を上げ、二人に駈け寄っていった。

王様が傍らにいるハリネズミくんを見て、ウインクした。

「はい、王様。コロリでっすね！　じゃあ、いきまっす！　コロリ！」

ハリネズミくんが前転をすると、戦いで破壊された街が元通りになり、夢ヶ丘に、地球に、マリーランドに平和が訪れたのであった。

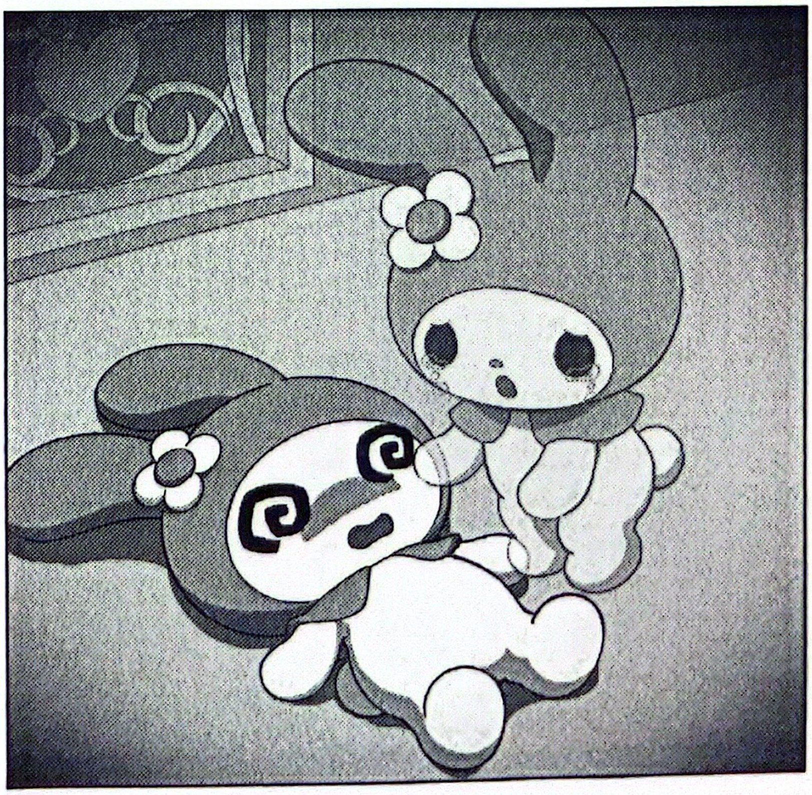
ウノは宇宙空間に浮かび、青い地球を眺めていた。
その背中には、元の姿に戻ったがぐったりしているウスラ・バッカを背負っている。
「おのれ……この恨み、絶対晴らしてやるから、覚えとけよ！」
ウスラ・バッカのよくありがちな捨てゼリフを聞いたウノは、マイメロたちには聞こえませんよ、絶対と、喉元まで出かかったが飲み込んだ。
「王子、あまり魔力も消耗してませんし、とりあえずウラノス星に帰りましょう」
いつもなら悪態をつくのだが、ウスラ・バッカは敗れたショックからなのか、頷くしかなかった。
次の瞬間、二人の姿が閃光して、スッと消えた。

その頃、夢ヶ丘の街では、温泉があちこちで噴き出していて、歌たちは自宅の庭の温泉に入り、戦いの疲れを癒していた。
「どうして、戦いが終わると、温泉が噴き出るんだろう？」
歌が不思議そうに呟くと、美紀が言った。
「きっと地球が救ってくれたお礼に、プレゼントしてくれてるんじゃないかしら」

「確かに、暴走したダーちゃんやニャンミから地球を救った時も温泉が噴き出したわね」
奏が納得したように言うと、琴が苦笑して言った。
「でも、一日で温泉は消えちゃうんだよね」
「まあ、ええやないか。それより、クロミ、ほんま頑張ったな」
真菜が横で温泉に浸っているクロミに労いの言葉をかけた。
「あたいだって、やる時はやるのさ」
と、クロミが胸を張ったが、囲いで仕切られた女湯に、マイメロがいないのに気づいた。
「マイメロのヤツ、どこ言ったんだ？」
「そう言えば、さっきから姿が見えないけど……」
歌がみんなと共に、周囲を見回しながら言った時、囲いの向こうの男湯からバクとマイメロの声が聞こえて来た。
「マイメロ、こっちは男湯ゾナよ」
「バクくん、固いこと言わないの」
クロミが立ち上がって叫んだ。
「何〜〜っ!?」
クロミが温泉から飛び出して、囲いの上にジャンプすると、マイメロが恵一の背中を石

鹸で泡立てたタオルで流していた。
「ウサミミ仮面さんったら恥ずかしがり屋さんなんだから〜。先輩さんの着ぐるみを脱げばいいのに」
「マ、マイメロのヤツ〜〜ッ！　あたいさえ柊しゃまにそんないいことしたことないのに〜〜っ！　クロミノートに書いてやる！」
　クロミがノートを書き始めた。
「ウサミミ仮面さんったら、早く脱いで。おねが……」
　とマイメロが言い終わらないうちに、
「ウザいっ！」
　恵一がマイメロの耳を掴んで、女湯の方へ投げ飛ばした。
「や〜〜〜ん」
　悲鳴を上げながら飛んできたマイメロを、歌がキャッチした。
「もう、マイメロったら」
　歌は胸の谷間で目を回すマイメロを笑顔で抱き締めるのだった。

（おわり）



## あとがき

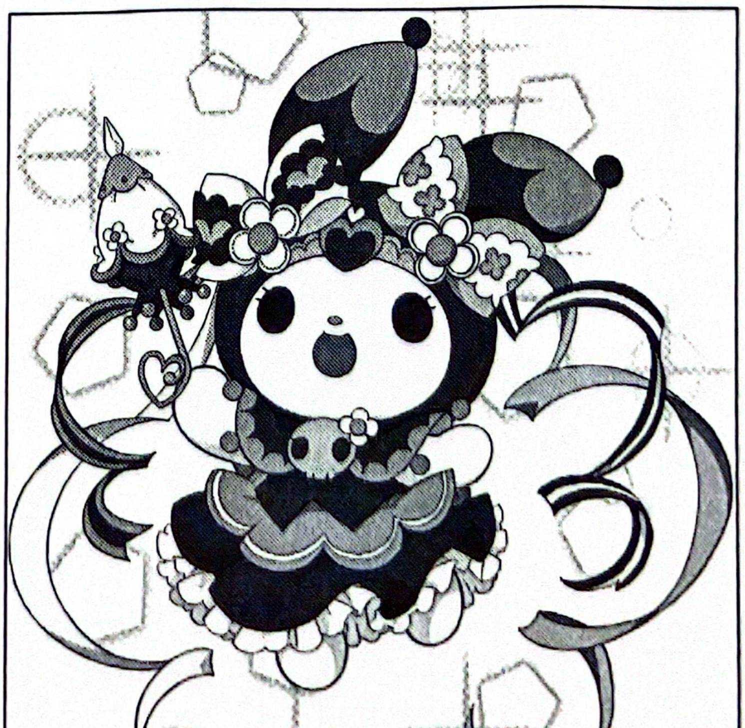
昨年一〇月の中頃に、生まれて初めて骨を折った。しかも、あばら骨三本を六ヶ所もだ。
仕事場近くの良く食べに行く寿司屋さんの大将夫婦と常連さん総勢二〇名で、江戸川河口付近に船を浮かべ、ハゼを釣りつつ、天ぷらを食べながら酒を飲み交わす毎年恒例のイベントに参加した時のことだった。
ここ二、三年は青潮の影響で釣果のほうはさっぱりだったが、昨年は朝から入れ食い状態で、三〇分で納竿して、午前中からみんなで持ち寄った肴で酒を飲み始めた。昼間船の中で揚げて出された天ぷらを食べた記憶がないほど、私は酩酊してしまった。
午後二時には船を降り、夕方の反省会兼飲み会に備えて、地下鉄東西線の原木中山駅まで徒歩で向かった。
私は記憶がないのだが、常連さんの話では相当ご機嫌だったらしい。ところが、気持ちとは裏腹に足取りは千鳥足。改札を抜け、ホームに向かう階段の前で……とっとっとっ、といきなり歩みが速くとなると、そのまま階段に激突した……らしい。
そして、そのまま救急車で病院送りとなってしまう大失態。
幸いなことに頭は打っておらず、あばら骨の骨折だけで済んだ。とても、今年還暦を迎え

るオッサンのすることではない。女房からはきつくお灸をすえられ、寿司屋の大将夫妻や参加した仲間たちには本当に迷惑をかけてしまった。猛省。
足とか腕とは違い、あばら骨の骨折はただただ安静にして骨が繋がるのを待つのが治療で、入院はたったの三日間。あとは、鎮痛剤を飲むだけ。
ところが、ベッドで安静にしていても、咳をしただけでも痛みは走るし、寝返りなんかもっての他。一番大変だったのはクシャミで、しただけでも激痛でベッドから推定三〇センチは体が跳ね上がる。だから、クシャミをしたいのにひたすら我慢する。だが、したい。でも、痛いから我慢。でもでも、したい。このせめぎ合いが非常に疲れる。なんとか我慢出来ればいいが、大概は早く楽になりたいと思い、クシャミをして悲鳴を上げる。
そんなことで、完治するまで四〇日ほどかかってしまった。
その間、この小説や、別の出版社のシリーズ物の小説もテレビのアニメーションの脚本も、執筆が遅れに遅れることになってしまった。関係者の皆様、この場をお借りして、ご迷惑をかけたことを深くお詫び申し上げます。
〝痛い〟話はこのへんにして、『おねがいマイメロディ』の二巻目の小説も、そんな中で書き上げた。年末締切りが二月の頭ぐらいまでかかってしまったが、健康状態とは裏腹に、自分では楽しみながら執筆出来たと思う。
テレビシリーズでは到底書けないエピソードだが、監修のサンリオさんの反応も悪くない

らしい。本当に寛大な会社なんだと、改めて感謝する次第。
最後に、プロットの段階でアドバイスをして下さった森脇真琴監督、原稿が遅れたのにもかかわらず、素敵な表紙と挿絵を描いて下さった宮川知子さん、そして、原稿を辛抱強く待って下さった株式会社ＰＨＰ研究所の前田眞宜さんに感謝の意を表します。

二〇一四年三月

山田隆司



〈キャラクター著作〉
株式会社サンリオ
〈企画原案〉
a k i n o
〈企画協力〉
株式会社ウィーヴ
株式会社スタジオコメット
〈装丁〉
AFTERGLOW
〈作画協力〉
Ｊはにわ
〈編集担当〉
前田眞宜

スマッシュ文庫の最新情報はこちら！
http://www.php.co.jp/smash/

本書へのご意見・ご感想を
お寄せください。

宛先
〒102-8331　東京都千代田区一番町21
株式会社PHP研究所　スマッシュ文庫課
山田隆司先生
宮川知子先生

スマッシュ文庫

おねがいマイメロディ ふぉ～えば～
2014年4月25日　第1版第1刷発行

著　者　山田隆司
監　修　株式会社サンリオ
イラスト　宮川知子
発行者　小林成彦
発行所　株式会社ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102-8331　東京都千代田区一番町21
スマッシュ文庫課　☎03-3239-6251（編集）
普及一部　☎03-3239-6233（販売）
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/
組　版　朝日メディアインターナショナル株式会社
印刷所
製本所　図書印刷株式会社


ISBN978-4-569-76162-6